

第3章

実践指導事例

実践指導事例の見方

第3章の実践指導事例では、第2章の教育・保育課程に示す「0歳児から5歳児の発達に応じて経験させたい内容」についての事例を、3つの力に焦点をあてて紹介しています。

【事例】

3つの力に応じた事例を紹介しています。

【内容の視点】

「〇〇の力」の内容の視点を示しています。
(※P20参照)

【まなびの力】

4歳児6月

事例9

「わあ〜水が溢れるよ！」

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

自然の美しさに触れて感動したり、自然物を使って遊ぶことを楽しんだりする。

〔4歳児Ⅱ期（6月〜9月）〕

【経験させたい内容】

各学年及び各年齢の期における「発達に応じて経験させたい内容」を示しています。(※P48・49参照)

【活動のねらい・内容】

- ◎砂や水の感触を十分に味わいながら遊ぶことを楽しみ開放感を
- 手や足で砂や水の感触を十分に楽しむ。
- 砂や水などに親しみ、その性質に気づく。
- 遊びをおもしろくするために、用途に応じた用具を探したり使ったりする。
- 自分の思ったことや思いを言葉で表現したり、仲間や友達と協力して遊ぶ。

【活動】

- ・この時
- ・砂遊び
- ・見立て
- ・喜びや
- ・一人

【活動のねらい・内容】【教育的価値】

「〇〇の力」を育てる活動としての「ねらい」「内容」を示すとともに、この活動を取り上げた理由を「教育的価値（関連性）」の観点から示しています。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名：□□ / 教材：□□ / ポイント：□□ / 環境への配慮：◆

砂遊びをしよう！

＜準備物＞

- ・持ち手付きバケツ（水を入れても子どもの力で運べる大きさ）
- ・スコップ（1人に1本程）
- ・丸型筒状のトコ（子どもが扱いやすい長さ約70センチ）
- ・たらい（水は汲んでおく）



持ち手付きバケツ
一人で、または友達と一緒に運べるように、人数の7割程の数を準備する。



スコップ
自分の好きなように使う。

- ◆子どもたちが感覚や開放感を思う存分味わえるように、保育者が裸足になったりして誘いかける。
- ◆砂や水の心地よさが感じられるように、素足やビーチサンダル等で活動するように促す。
- ◆保育者は、砂や水の特性や感触を十分に味わい楽しむ姿を見せていながら、子ども自身が繰り返し遊ぶ中で、感じたり気づいたり試したりする姿を支えていく。



筒（トコ）に繰り返し水を入れ、下に浸みだしたり、勢いよく流れたりする不思議さやおもしろさに気付かしていく。

繰り返し楽しむなかで、それぞれが十分に遊び込めるように、また自分なりの発見や気づきが生まれるように、十分な時間を設ける。

【環境設定】

「〇〇の力」の「経験させたい内容」に適した活動及び環境設定を具体的に紹介しています。それぞれの環境におけるポイントや配慮などを示しています。

【必要な援助・環境の再構成などのポイント】

事例の中で、特にポイントとなった環境や援助を示しています。環境を再構成した場合（今後に予定している）は、その必要性や効果についても考察しています。

読みとり

しむ子が増えてきた。スコップで穴を掘ったり筒に水を流しても砂場で遊んでいた子どもたちが、スコップを持ち出し、昨日、その様子を見ていた7、8人程の子どもたちも、裸足に水を繰り返し流して遊び、水の勢いで砂が浸食することを。

- ・A児の筒に「そっと水を流す」手首の微妙な動きがし方は、今までの経験からこぼれないように注ぐ力加減がわかっていることが伺える。
- ・B児は、今までの経験から、水を入れると筒（トコ）が倒れやすいことを想像し、A児の代わりに筒（トコ）を押さえる役となる。
- ・C児は、友達の楽しそうな様子を見て「楽しそう」「やってみよう」という思いが生まれ、水を流すという役割を見つけて遊びの仲間に加わり、水を流すのを繰り返す。

【事例】【読みとり】

「経験させたい内容」にかかわる事例を紹介しています。「読みとり」ではあえて「〇〇の力」の視点に焦点化して考察しています。

(例)「まなびの力
(思考・言葉・創造)

- ・水の流れで砂が掘れたり、深くなったりする姿を発見する。

【まなびの力】

事例 1	0歳児（6か月頃～9か月頃）	8か月「これな～に？」
事例 2	0歳児（9か月頃～12か月頃）	10か月「好きなもの み～つけた」
事例 3	1歳児Ⅰ期（4月～8月）	5月「何して遊ぼうかな？」
事例 4	1歳児Ⅱ期（9月～3月）	10月「ぐるぐる・トントン」
事例 5	2歳児Ⅰ期（4月～8月）	5月「ダンゴムシ モジョモジョ」
事例 6	2歳児Ⅲ期（1月～3月）	1月「オオカミさん こっちだよ」
事例 7	3歳児Ⅱ期（6月～8月）	8月「積み木っておもしろいな」
事例 8	3歳児Ⅳ期（11月～12月）	11月「おねつをはかりましょう」
事例 9	4歳児Ⅱ期（6月～8月）	6月「わぁ～ 水があふれるよ！」
事例 10	4歳児Ⅴ期（1月～3月）	1月「リスさん カリカリ」
事例 11	5歳児Ⅱ期（6月～8月）	7月「きれいなケーキをつくりたい！」
事例 12	5歳児Ⅳ期（11月～12月）	11月「縁日ごっこ」

事例1

「これな～に？」

【経験させたい内容】

〔0歳児 おおむね6か月から1歳3か月未満〕

興味のあるところへ自分で移動し、触る、なめる、見る、登る、降りる、押す、引っ張るなどして遊ぶ。

〔0歳児（6か月頃～9か月頃）〕

様々なものに触れて、いろいろな感触を経験する。

【活動のねらい・内容】

◎安心できる保育者と一緒に、様々な素材や形のものに触れていろいろな感触を経験する。

○様々な玩具を通して、手首や指先を使った遊びを楽しむ。

○保育者の見せる玩具に興味をもち、自分で持とうとしたり真似をしようとしたりする。

○ものをつかんだり離したりして遊ぶ。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・いろいろな素材や形の玩具を用意することで、多様な感触を知ったり試したりする遊びを楽しみ、自分の周りの環境への興味や好奇心の芽生えを促すことができる。
- ・握る、つまむ、離す、落とす、投げる、引っ張るなど、手指の操作や目と手の協応を促すことができる。
- ・つかんだり離したりしやすい玩具を準備することで、意図的にものを離す動作ができる力を促し、新たな探索行動を生み出すことができる。

【環境設定】<場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

手指を使って遊ぼう



① 布積み木

<準備物>

牛乳パック 布



② ひっぱり人形

<準備物>

柔らかいカップ 靴下
フェルト



③ 布のにぎにぎ

<準備物>

布 綿 梱包材



④ お手玉

<準備物> 布 大豆

- ・やわらかな感触を味わえる布おもちゃなど、安全性の高い手作り玩具を豊富に用意する。
- ・保育者自身が遊びを見せて（積み木を積んだり、布を輪にしたり、わらべ歌に合わせて動きをつけたりなど）玩具への興味を引きつけるようにする。

- ◆保育者が一緒に遊ぶことで、真似をしたり探索をしたりするなど、好奇心をもって繰り返し遊べるようにする。
- ◆何でも口にする時期なので、玩具は誤飲しない大きさにし、消毒を行い清潔にしておく。
- ◆手づくり玩具は中身が出てこないようにしっかりとテープなどで固定しておく。
- ◆保育者が手渡したり、手の届く範囲に置いたりするなど子どもの視界に入る置き方を考えるようにする。

音や動きを楽しもう



⑤ ころころ

<準備物>

テープの芯 布 イラスト



⑥ マラカス

<準備物>

プラスチック容器 ビーズ
大豆 ペットボトル



⑦ やわらかボール

<準備物>

直径 10 cm程度

- ・手に握りやすい大きさにしたり持ち手を付けたりして、音が簡単に鳴るようにしておく。
- ・保育者は、子どもの視界に入る位置で玩具を動かすなどして、興味を引きつけるようにする。また、興味をもっている様子や状態を言葉にしたり、要求の仕草や指差しに応えたりする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① 布積み木でとんとんとん】※環境設定① 保育者：A児の前に座って、布積み木を「とんとんとん」と言いながら、両手で打ち合わせて見せる。 A 児：保育者の顔や布積み木をじっと見ている。 保育者：A児の前に数個の布積み木を置く。 A 児：布積み木に目をやり、片手でつまんで手を上下に動かしたり、布積み木から手を離したりを繰り返す。 保育者：A児が繰り返す様子を笑顔で見守っている。しばらくして、A児が離れた布積み木を拾い、A児の目の前で「とんとんとん」と声に出しながら2つの布積み木を打ち合わせてみる。 A 児：同じように布積み木を両手に持ち、打ち合わせるような仕草をする。 保育者：「とんとんやね」とA児の顔を見ながらゆっくりした口調で声をかける。 A 児：「うーあー」と笑顔を見せ声を出して笑う。 	・保育者が楽しそうに遊んでいる様子を見せることで、保育者が持っているものや布積み木を打ち合わせる仕草に興味を示しじっと見ている。この時期、興味のあることに注視する行為は大切な育ちである。 ・保育者が目の前に布積み木を置いたことで、ものへの興味から、自分から布積み木を片手でつまんで持ったり、つかんだものを意図的に離したりする遊びにつながった。何度も繰り返す様子から、つまんで離すという行為に興味をもったことが伺える。 ・保育者は、A児が十分に繰り返すを楽しんだタイミングに合わせて、再度布積み木を打ち合わせる遊びを見せた。 ・今度はものだけでなく、保育者の打ち合わせる行為にも興味をもち、同じように真似る姿となった。 ・保育者が「とんとんやね」と自分の楽しさを言葉にして共感してくれたことで、A児と保育者との間にコミュニケーションが生まれ、嬉しさを喃語として表し、また遊びへの意欲へとつながっていった。
【場面② マラカスで遊ぶ場面】※環境設定⑥ B 児：部屋の中央で玩具を持ってお座りしている。 保育者：B児から少し離れたところでマラカスを振る。 B 児：音がする方に顔を向け、持っていた玩具を手から離し、ハイハイをして保育者のところに行く。 保育者：「Aちゃんもする？」とB児の目の前でマラカスを振る。 B 児：保育者の持っているマラカスに手を伸ばし、片手に持って腕を振る。マラカスの音が鳴るとにっこりする。 保育者：「じょうずじょうず。がらがらって鳴ったね～」とB児の前で別のマラカスを一緒に鳴らす。 B 児：保育者を見ながら「あーあー」と言いながら笑顔で両手を振ったり、少しおしりを浮かすように全身を動かしたりする。時折、マラカスを口元につけたり、振って鳴らしてみたりするなどを繰り返す。 	・保育者が音を聞かせることで、音の出るものに興味を示し、自らハイハイをして保育者（目的の玩具）のところに行こうとする行動が促された。 ・保育者の持っているマラカスに手を伸ばすなど、ほしいものがあると自分から手を伸ばして持とうとする。 ・安心できる保育者に温かい表情や言葉でかかわってもらうことで、ものへの興味だけでなく保育者との遊びに興味が広がり、繰り返す楽しむ姿へとつながった。また楽しい気持ちを声や表情だけでなく、少しおしりを浮かすなどして全身を動かして表現している。 ・興味をもったものや玩具（マラカス）を、口元や手で硬さや形、感触などを確かめている。

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・この時期は、特に手指の機能が向上するので、より手指を使って楽しめるものを準備し、自ら探索したい気持ちが芽生えるようにする。また、様々な感触のもの、音が出るもの、動くものなどにも関心が広がるため、視覚的聴覚的にも楽しい様々な玩具を用意する。
- ・子どもの様々な興味や好奇心を育むためには、保育者自身の人的環境としての役割が大きく、保育者が玩具で遊んで見せたり、玩具を通して楽しいかかわりをもったりするなど、保育者との信頼関係を深めることが大切になる。
- ・子どもの発達や興味に合わせた手づくり玩具を準備し、一人一人の楽しみ方にゆとりと寄り添うように心がける。

事例2

「好きなもの み〜つけた」

【経験させたい内容】

〔0歳児 おおむね6か月から1歳3か月未満〕

保育者に優しく語りかけられることにより、喜んで声を出したり、応えようとしたりする。

〔0歳児（9か月頃～12か月頃）〕

要求したり援助を求めたりする時に、周りの関心を引こうとして、手差し指差しをしたり発語をしたりする。

【活動のねらい・内容】

- ◎見つけたものや触りたいものを喃語や指差しなどの表現で保育者に伝えようとする。
- ◎保育者に優しく語りかけてもらうことで、言葉（音声）を発することを楽しむ。
- 動物や乗り物や食べ物など知っている絵や写真に興味をもち、指差しをしたり発語をしたりする。
- 保育者に喃語や手差し指差しに伝えてもらうことを喜ぶ。
- 保育者が指を差した方向にあるものを見つける。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・動物や食べ物などの絵や写真は、子どもにとって身近で興味や親しみをもちやすい。
- ・声や身振り、仕草などで意思表示をするようになる時期のため、指差しによって保育者にやりたいことややってほしいことを伝えたい環境を準備することで、言葉の発達を促すことができる。
- ・手差しや指差しを通して、ものと名前を一致させ「マンマ」などの簡単な一語文がでてくることを促すことができる。
- ・保育者と指差しや声や表情でのやりとりを繰り返すことで、要求に応じてもらえるという安心感をもつことができ自己の表現する意欲を育む。

【環境設定】 <場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

<準備物>

- ・季節の動植物や身近なものをテーマにしたモビール
- ・動物や食べ物など身近なものの写真や絵、絵本

モビールで遊ぼう



① 動物のモビール

- ・興味をもち自ら触ってみたいという要求が生まれるように、子どもの視線を意識した配置に設定したり、視界に入るよう保育者が揺らしてみたりする。
- ・指差しの要求の意味を理解し、「触ってみたいね」「ゆらゆらしてるね」と丁寧に言葉にしながらかわるようにする。

絵や写真で遊ぼう



② 遊び絵本や手づくり玩具



③ 壁に写真やイラスト



- ・「いないいないばあ～」のように変化がある教材や絵本などを準備し、ものを通して保育者と一緒に楽しみを共有できるようにする。
- ・身近にある食べ物や乗り物などの写真を保育室の壁に貼るなど、自然に子どもの視界に入る環境を準備する。
- ・「〇〇だね」と名詞を繰り返すだけでなく、食べる真似をして「むしゃむしゃ、おいしいね」と保育者が楽しむ様子を見せながら一緒に遊ぶ。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① 触ってみたい】※環境設定① A 児：モビールを見て「うーうー」と声をあげる。保育者を見る。 保育者：「ウサギちゃんがいるね～」と言いながらA児を抱っこして「ウサギ」のモビールを揺らす。 A 児：「わーわ」「ぶぶぶ」と言いながらモビールの動きを目で追いながら手を伸ばす。 保育者：A児の真似をして「わーわ」と言う。 A 児：保育者と顔を見合わせて「わーわ」と言う。モビールを見ながら「うーんうーん」と声を出して手を伸ばす。 保育者：「タッチするの？」と聞きながらA児にモビールを近づける。 A 児：モビールを手でぎゅっとつかみ、にこっと笑いながら何度も引っ張り揺らす。 【場面② バナナやね】※環境設定③ A 児：壁に貼ってある写真をじっと見ている。 保育者：「Aちゃん何見てるの？」と声をかけながらA児の横に座る。 A 児：壁に貼ってあるバナナの絵を指差しして保育者の顔を見ながら「あーあー」と声を出す。 保育者：A児を見ながら「バナナやね」「バナナあったね」と応える。 A 児：笑いながら「あーうー」と声を出し、今度はバナナの写真の隣のリンゴの写真の指差ししながら、また保育者を見る。 保育者：「あーうーやね」「リンゴやね」と絵を指差ししながら応える。 A 児：保育者が指差しする「リンゴ」を見て笑顔で「うーうー」と声を出す。	- 天井から長めに吊されているモビールに気付いたことを「うーうー」という喃語で保育者に知らせている。 - 保育者が抱っこして、目の前でモビールを揺らしたことで、より近い視界に入ったモビールに興味をもつことができた。また、興味をもったモビールを触りたいという要求の意味をもった喃語を発語し、自分から手を伸ばし触ろうとしている。 - 保育者がA児の「自分で触りたい」という気持ちを読みとり、A児の喃語を繰り返したり、要求を言葉で表したりしながらモビールに触れられるようにしたことで、自分の思いが伝わった喜びを感じている。 - 興味をもったモビールを自分の手にできた嬉しさを、笑顔や何度も引っ張ることで表現している。 - 保育室の壁に、安定した座位の姿勢で見られる写真やイラストなどを準備しておいたことで、落ち着いてじっくり見ることを楽しむことができた。 - 保育者を見ながら、指差ししたり「あーあー」と声を出したりしている姿から、自分の知っている「バナナ」を見つけたことを、大好きな保育者に伝えたい思いが伺える。 - 保育者がA児の伝えたかったことを具体的な言葉にして伝えたことで、保育者と興味が共有された嬉しさを感じ、まだ言葉としては話せなくても、意味のある喃語や指差しを盛んに表現することへとつながった。
必要な援助・環境の再構成などのポイント - この時期から盛んに見られる手差しや指差しは、話し言葉につながる重要な特徴と捉え、保育者がその手差し、指差し、言葉（音声）などに丁寧に対応していくことで、子どもの言葉への関心を高められるようにする。 「これは何かな？」とものへの興味が広がったり、自分が発見したものを伝えたい気持ちを喃語や指差しで盛んに表したりする様子にじっくり寄り添い、時には同じ言葉を繰り返したり言葉を添えたりする。 - 子どもが言葉を発した時は、何を伝えたいのか、どんな気持ちなのかなど、その場の状況から意味を読みとり、子どもの思いを言葉で補って応答することで、子どもの会話する喜びを育てていく。 - 興味を引くことで発語が増える時期なので、モビールであれば揺らしてみたり保育者が触ってみたりするなど、その教材により興味をもてるようにしていく。	  

事例3

「何して遊ぼうかな？」

【経験させたい内容】

〔1歳3か月から2歳未満〕

室内や戸外で探索活動を十分に楽しむ。

〔1歳児 1期（4月～8月）〕

身近な環境の中で、探索活動や一人遊びを十分に楽しむ。

【活動のねらい・内容】

◎保育者に見守られながら自由に探索活動を楽しみ、好きな遊びや玩具を見つけて遊ぶ。

○あちこち歩き回り、興味のあるものや好きな遊びを見つけようとする。

○興味をもった遊びや玩具で一人遊びをじっくりと楽しむ。

○操作のある遊びや指先や手先を使った遊びに興味をもち、繰り返し楽しむ。

（ビニールテープ貼りはがし、ホース落とし、ハンカチを引き出す遊びなど）

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・いくつかの遊びを用意することで、興味をもった場所や玩具を自分で見つけたり選んだりして楽しむことができる。
- ・変化のある遊び（玩具）は、興味をもった遊び方（行為）を繰り返し楽しむことができる。
- ・引っ張る遊びは、出てくるおもしろさを繰り返し楽しめるとともに、手指機能の発達を促すことができる。
- ・入れて落とす遊びは、ものが穴に入ると見えなくなる不思議さが刺激となり、集中して楽しめる。
- ・シールを貼る・はがす遊びは、手と目の協応を促すとともに指先を使うことができる。

【環境設定】<場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

ひっぱって遊ぼう

① どんどんひっぱれ



手指を使った探索や操作を楽しむように穴やスポンジを様々な大きさにする。

落として遊ぼう

② ホース落とし



- ◆十分な探索行動ができるように、安全で広い場所を確保する。
- ◆遊びごとに仕切りを用意したり、玩具の数や遊びの種類に配慮したりするなど、一人一人が繰り返しじっくりと安心して遊べる場を保障する。
- ◆探索活動が楽しめるように複数の遊びを用意しておき、子どもが自分で動いて好きな遊びが見つけられるようにする。

貼ったり、はがしたりして遊ぼう



保育室

- ・感触の違いを感じられるように、硬いホースや柔らかいホースを用意する。
- ・自分で入れたものが見て確認できるように透明の容器にする。

③ シール遊び



- ・貼ったりはがしたりを繰り返し楽しめるように、ビニールテープなどのはがしやすい素材を工夫する。
- ・指先を使って遊べるように、つまんだり引っ張ったりがしやすい適度な粘着力のものを準備する。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
4月当初は慣れない環境に不安で泣ける子が多く、自分で遊びを見つけることが難しかった。その中で、保育室のタンスに貼ってあるシールを何度もはがすことを楽しむA児の姿が見られた。 (※この姿を発達に応じた興味と捉え遊びに取り入れることにした。) 【場面① 何をしようかな?】※環境設定②・③ 保育室には複数の遊び場が用意されている。 特に何かする様子もなく、保育室の隅に座っているA児。保育者がA児のそばに行き「今日は何して遊ぼうかなあ。おもしろいことないかなあ」とつぶやくと、保育者の顔をちらっとみる。近くでホース落とし（環境構成②）をして遊ぶB児の様子に目をやり、また辺りをキョロキョロと見回した後、シール遊び（環境設定③）の場へ向かう。 シールをはがして遊んでいる友達を少し眺めた後、無言で貼ってあるシール（ビニールテープ）をはがし、違う場所に貼ることを繰り返す。特に表情は変えず黙々と繰り返す。途中A児の隣にC児が来て同じように遊び出す。時折C児に目をやりながらもそのまま続けて遊ぶ。 【場面② どんどん入れよう】※環境設定② 穴のあいた容器にホースを入れようとするD児。1度目は穴にうまく入らず、力を入れてぎゅっと押し込む。その後も何度かは力を入れて押し込むことを続ける。保育者がD児に手を添えながらホースを縦向きに入れる。保育者の顔をちらっと見て、すぐに自分から別のホースを手取る。穴をじっと見て、今度は縦向きにホースを入れる。うまく入る。何回か繰り返し穴に入れた後、保育者の顔を見てにっこり笑う。 保育者が「すごいね～」と笑顔で声をかけるとにっこりと笑い、さらに繰り返して黙々と入れる。たくさん入ったところで容器を覗き込み、容器を両手で持って振ってみる。容器から「がらがら」と音がする。また容器の中をじっと見つめ、少し大きく振ってみる。また容器から「がらがら」と音がする。にっこりと笑いながら、またホースをどんどんと入れていく。縦向きにスムーズに入れていく。	
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
- 一人遊びは、興味をもったものを自分で追求するという主体性の発達に欠かせないものであり、思考力や創造力を養う大切な機会なので、友達に邪魔されることなく興味をもったことにじっくりと楽しめる場所や時間を保障していくことを大切にする。 - 探索や一人遊びを楽しむには、保育者の存在が重要であり、さりげない言葉がけや一緒に遊びを楽しむ中で新たな気付きを知らせるなど、その場面に応じたかかわり方を工夫することが必要である。 - 遊び方や楽しみ方が分からない場合は、保育者が一緒に遊びながら教材の楽しみ方を知らせるとともに、子ども自身が、満足いくまで十分に繰り返す姿を大切にする。	

事例4

「ぐるぐる・トントン」

【経験させたい内容】

〔1歳3か月から2歳未満〕

ちぎる、破る、クレヨンでなぐり描きをするなどの手や指先を使った遊びを十分に楽しむ。

〔1歳児 II期（9月～3月）〕

クレヨンや水性ペンでなぐり描きやぐるぐる描きなどを楽しむ。

【活動のねらい・内容】

- ◎クレヨンで自由になぐり描きをして楽しむ。
- 自分から興味をもった場所や色を選んで楽しもうとする。
- 保育者や周囲の友達が描いている様子に興味をもち、真似をして描いてみようとする。
- 腕を大きく動かしたり、クレヨンをトントンと打ち付けたりして、思い思いに様々な表現や動きを楽しむ。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・ なぐり描きは、リズムなどの間隔、外界に働きかける積極性、手の動きを調整する力など、様々な発達を促す活動である。感触遊びの経験を積み、肩、肘、手首を使った運動が豊かになる時期に、なぐり描き遊びを通して「描く」ことへの興味を広げていきやすい。
- ・ 丸型クレヨンは握りやすく手のひらですっぽり握ることができる。ブロック型クレヨンは3指で握ることができ、なめらかで滑りやすく、力が弱くても描きやすい。
- ・ 大きな紙や小さな紙を用意することで、1人、数人、みんななど、一人一人が好きな場所で自由に伸び伸び描くことができる。

【環境設定】 <場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

クレヨンで遊ぼう

<準備物>

- ・クレヨン（丸型、ブロック型など）
- ・ポスター紙 ・ビニールシート
- ・新聞でつくった画板 ・机 ・椅子

丸型クレヨン



① みんなで描こう

大きな模造紙
(コシが強く薄手で滑りがよいもの)



紙を床に置き、腕や体を思いきり動かして伸び伸びと大きな表現ができるようにする。紙は模造紙やそれ以上の大きさのものを用意し、みんなで描くことが楽しめるような場にする。

② 数名で描こう

ポスター紙をつなげたもの



椅子に座り、落ち着いて保育者や友達と一緒に描いたり見たりして楽しめるようにする。紙はテーブルに巻きつけるように置き、数名で共有できる大きさにする。

③ 1人で描こう

画用紙を半分に切ったもの



自分の椅子に座り、1人で落ち着いて描くことができるようにする。紙は1人で描くのに適当な大きさにする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① 大きな紙に描こう】※環境設定① 保育者：「今日はこ～んな大きな紙にお絵描きしようね～」と子ども達の前に模造紙を広げる。 A 児：身を乗り出し、急いで模造紙のところに座り、自分のそばにあった赤色のクレヨンを手を持ち紙に描きだす。始めは横描き、さらにぐるぐる丸、しばらくしてさらに大きなぐるぐる描きをする。自分の前の紙に描くところがなくなってくると、少し横へ移動してさらにぐるぐる、次にはトントントントンとクレヨンを打ちつける。 【場面② 先生と一緒に描こう】※環境設定② 保育者とB児、数名の子で机を囲み一緒に座っている。 保育者：B児の隣で丸をぐるぐる描いている。 B 児：保育者の描いたものを見て「これは～？」と聞く。 保育者：「ぐるぐるだね」と言う。 B 児：保育者が描いた絵の上に「ぐるぐる～」と言いながら笑ってぐるぐる描きをする。 保育者「ぐるぐるいっぱい描けたね！先生と一緒にだね」と声をかける。 B 児：保育者を見ながらにっこりと笑い、今度は保育者の絵の場所とは別のところに自分で「ぐるぐる～」と言いながら描く。	・保育者が見せた大きな模造紙に魅力を感じたことから、すぐに「やってみたい」と意欲をもって自分から場所やクレヨンを選び遊びだすことができた。 ・クレヨンを持って迷いなく遊びはじめた姿から、今までの経験から、描くことは「楽しい」「おもしろい」と感じていることが分かる。 ・大きな紙に描く嬉しさや心地よさから、往復線だけでなく、腕を肩と肘を協応させながら大胆に伸び伸びと「ぐるぐる描き」を表現することができた。 ・広い場所があったことで、もっと描きたいという気持ちが芽生え、自分で場所を移動したり、さらにトントントンと打ち付けて描いたりなど、様々な表現方法を楽しむことができた。 ・保育者がそばにいて、それぞれが安心して表現遊びを楽しんでいる。 ・保育者の描く「ぐるぐる」に関心をもち、「これは(なに)?」と自分から保育者に言葉で伝えている。 ・保育者が「〇〇だよ」という描いたものの説明ではなく、「ぐるぐるだね」と表現の様子を伝えたことがB児にとってはとても分かりやすかったと思われる。「先生と一緒に」という気持ちをもって、自分から「ぐるぐる～」と真似をして遊ぶ姿が生まれた。 ・大好きな保育者が「いっぱい描けたね。一緒にだね」と自分の表現を認めてくれたことが嬉しく、また「ぐるぐる描き」が自分でできた喜びと自信を感じることができ、さらに「もっと描いてみよう」と意欲につながるようになった。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・「なぐり描き」は様々な発達を促す活動であり、この時期には「描く遊び」を積極的に取り入れていくことが必要である。ただし、発達の個人差が大きい時期なので、一人一人の身体機能（手指の動きなど）に応じたかかわり方を心がける。 ・子どもが落ち着いて表現遊びを楽しめるように、各保育者がそれぞれの場所でゆっくりとかかわれるように配置する。 ・まずは「楽しく描く」ことで遊びへの意欲につなげることを大切にする。また、子どもの“もっとしたい”という気持ちを受け止めながら、描くことの楽しさを共感する言葉をかけたり、受け止めたりするようにする。 ・保育者は、子どもと同じ向きから絵を見ながら対応し、言葉をかける時には、「〇〇かな」「〇〇みたいだね」など具体的なイメージに結び付けたり誘ったりすることを控え、描くこと自体やその様子に共感するようにする。 ・描く場所がなくなったら、新しい紙を出したり、新しい場所に紙を設定したりして、伸び伸びとした表現を思いきり楽しめる環境を準備する。	

事例5

「ダンゴムシ モジョモジョ」

【経験させたい内容】

【おおむね2歳から3歳】

戸外で花や石など、自分の気に入ったものを手にとって遊ぶことを喜ぶ。

【2歳児 I期（4月～8月）】

身近な小動物や草花に興味をもって、保育者と一緒に見たり触れたり集めたりしながら、気付きや発見を喜ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎身近な自然や小動物に興味をもち、見たり触れたりして楽しむ。
- 保育者と一緒にダンゴムシを見たり触ってみたりしようとする。
- ダンゴムシの動きや、形が変わることに気付き、その不思議さやおもしろさに興味をもち、自分から見たり触れたりして楽しむ。
- 興味をもったことや気付いたことを、自分なりの言葉で保育者に話そうとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・ダンゴムシは、身近で見つけやすく、小さくて可愛いイメージがあり、また動きもゆっくりとしているため、小動物との出会いとして親しみがもちやすい。
- ・保育者と一緒に探した経験から、身近な環境に自分からかかわり、自分で探したり見つけたりする喜びを感じることができる。
- ・触れると体を丸める特徴があり、その驚きや喜びを保育者や友達に擬態語や自分なりの言葉で表現しやすい。

【環境設定】<場所：園庭> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

ダンゴムシを見つけよう

① 先生と一緒に！



<準備物>

- ・プリンやヨーグルトのカップ（子どもの人数分）
- ・牛乳パックを切った入れ物
- ・小動物（ダンゴムシ）の絵本

- ◆砂場などの遊び場の近くに鉢植えやプランターを置くなどして、小動物が住みやすい環境にする。
- ◆靴箱の前にカップなどを用意し、戸外に出てすぐに手にできるようにする。
- ◆保育者もそばで一緒に遊び、子ども達の見てほしい思いを十分に受け止められるようにする。

② 私のダンゴムシ



- ・花壇や草むら、植木鉢の下など、ダンゴムシのいそうな場所に誘い、子ども自身が見つけたり触ったりして楽しめるようにする。
- ・ダンゴムシの動きにより興味をもてるように、平らな場所に置いたり、手の上に乗せたりする。
- ・保育者が積極的に話しかけたり、子どもの言葉を広げたりしながら、言葉のやりとりを促すようにかかわる。

- ・見つけたダンゴムシを入れる小さなカップなどを準備する。カップは手に持ちやすい大きさにし、一人一人が自分で持つことで、より気付きや親しみが促せるようにする。
- ・ダンゴムシの動きが見やすいように、内側の白いヨーグルトカップや牛乳パックを切ったものを用意する。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
4月の後半にダンゴムシを見つけると「じじ」と言って覗き込む姿が見られた。保育者がカップや飼育ケースにダンゴムシを入れると覗き込んだり持ち歩いたりするようになった。また、保育者がダンゴムシを手に乗せて見せたり、ダンゴムシが載っている絵本などを用意したりしていくことで、少しずつ身近に感じて触ろうとする姿が見られるようになってきた。本時も園庭に出る前に、「昨日のダンゴムシさん、いるかな？」と子どもたちに話しかけた。	
【場面① ダンゴムシみつけた】 A 児：カップを片手に園庭に出る。 「ダンゴムシ！」と草のあるところに走って行き、しゃがみ込んで草の中をじっと見る。 片手で草を分け「ダンゴムシいた！」と指先でつまんでカップに入れ保育者に見せにくる。 保育者：「本当だね。どこにいたの？」と聞く。 A 児：「こっち」と草の方を指差し、もう一度、同じ草のところへ行きしゃがみ込んで探し始める。4匹つかまえてカップに入れる。 「ダンゴムシいっぱい！」と笑顔で保育者にカップを見せた。 【場面② ダンゴムシ モジョモジョ】 B 児：つかまえたダンゴムシを牛乳パックの入れ物に移しじっと見つめる。上から指で触るとダンゴムシがひっくり返って丸まる。 「あ！ゴロンした！」と保育者に話しかける。 保育者：「どれ？ほんとだね」とB児が持っているカップを覗きこみ、丸まったダンゴムシを見る。 ダンゴムシがゆっくりと上向きに体を開く。たくさん手足が細かく動き出す。 B 児：「うわ！ダンゴムシ モジョモジョ！」とびっくりした表情になる。 保育者：「本当だ。モジョモジョだね」と言葉を返す。 B 児：ダンゴムシをじっと見つめ「先生見て！またモジョモジョ」と言いながら、自分の指先を上向けて細かく動かしながら保育者の方を見る。 保育者：「ほんと。モジョモジョだね」とB児の手の動きを真似る。 B 児：ダンゴムシが元の向きに戻って動き出すと、もう一度そっと指で触る。ダンゴムシが再び丸くなる。にっこりする。そのまま無言でじっとダンゴムシを見つめている。 その後も、ダンゴムシが動き出すと触って丸める行為を繰り返した。	・保育者の「昨日のダンゴムシさんいるかな？」の言葉がけで昨日遊んだ楽しさを思い出し、自分からカップを手にして昨日と同じ場所に向かうことができた。 ・これまでの経験からダンゴムシのいる場所や探し方を知っている。また、ダンゴムシのつかまえ方や力加減も分かっている。 ・自分で見つけたダンゴムシを、大好きな保育者に見せることが嬉しく、また保育者の質問に対して、どこでつかまえたかを自分なりの言葉と行動で説明している。 ・カップの中の4匹のダンゴムシを「いっぱい」という言葉で表現している。「いっぱい」という概念が育っていることが分かる。 ・底が白い牛乳パックの入れ物に入れたことで、ダンゴムシの様子がよく見え、よりダンゴムシの動きに興味をもつことができた。 ・丸まったダンゴムシの様子を、「ゴロンした」という自分が知っている動きの言葉で表現した。 ・丸まっていたダンゴムシの体が開いてたくさんの足が動く様子に驚き、細かな足の動きを、「モジョモジョ」という擬態語で表現した。 ・保育者が、本児の言葉を「本当だね」と肯定して繰り返したことで、共感してもらえた喜びを感じ、さらに興味をもってじっくり見るという行動につながった。 ・ダンゴムシが動く様子をじっと見たことで、擬態語だけでなく自分の手を使って表現し、より具体的に保育者に伝えようとしている。 ・さっきは丸まったことに驚いたが、今度は先ほどの経験から「もう一度試してみたい」という気持ちから触ってみた。予想通り丸くなったことで「やっぱり丸まった」という嬉しい気持ちを感じ、この後また「モジョモジョ」が始まるという期待から集中して見ている。 ・触ると丸くなり、しばらくすると「モジョモジョ」と動き始めるおもしろさや不思議さに興味をもち、何度も繰り返している。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・保育者の生き物に対してのかかわり方が大きな影響をもつ時期なので、保育者自身がダンゴムシに親しみをもち、ダンゴムシの動きのおもしろさや不思議さに気付かせるようにする。また、興味をもった子ども達のつぶやきや思いを受け止めながら、さらに生き物への様々な関心が広がるように言葉をかける。 ・子どもが発した単語に「○○だね」と形容詞をつけたり共感したりすることで、言葉の広がりややりとりを促す。 ・アニメズムの世界に生きる発達段階であることから「お家に帰してあげるね」「また遊ぼうね、バイバイ」など、擬人化したかかわりをしながら、遊んだ後は自然に返すようにする。	

事例6

「オオカミさん こっちだよ」

【経験させたい内容】

〔おおむね2歳から3歳〕

保育者を仲立ちとして、生活や遊びの中で簡単な言葉でのやりとりを楽しむ。

〔2歳児 Ⅲ期（1月～3月）〕

繰り返しの言葉や楽しいやりとりの出てくるお話のおもしろさを感じ、喜んで聞いたり使ったりする。

【活動のねらい・内容】

- ◎保育者や友達と簡単なおっこ遊びを楽しむ。
- 絵本のイメージをもちながら、繰り返しの言葉のやりとりを楽しむ。
- 大好きな保育者や友達に、遊びを通して自分の思ったことや欲求を簡単な言葉や仕草で伝えようとする。
- 保育者や友達と一緒に、おいかげ遊びやかくれんぼ遊びを楽しむ。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・見たことや経験したこと、また絵本などで気に入った場面などの真似をしたり、見立てやつもり遊びを盛んに楽しんだりする時期なので、お話からの簡単なおっこ遊びを楽しむことができる。
- ・簡単なストーリーのある本を好むようになる時期であり、親しみのある絵本やお話の内容のものであれば、2歳児なりにイメージをもつことができる。
- ・「7ひきのこやぎ」のお話は、ストーリーに分かりやすい言葉や行動の繰り返しがあり、子どもにとって興味をもちやすく真似をしやすい。
- ・自分の言葉で表現しにくい子も、繰り返しの決まったフレーズがあることで、自信をもって表現する（声を出す）ことができる。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

オオカミさんごっこ

＜準備物＞

- ・オオカミのお面 ・マット
- ・段ボールの囲い（2か所）

① オオカミのお面
（リアルでないもの）



② 先生オオカミ
「とんとんとん」



③ お家（隠れられる場所）



- ・オオカミのお面を用意し、保育者がオオカミ役になって一人一人の子どもの言葉や行動に合わせて、言葉のやりとりを楽しめるようなかわり方をする。
- ・「トントントン、お母さんですよ。開けておくれ」など、絵本の中に出てくる繰り返しのフレーズや簡単な言葉をかけながら、子ども達と応答性のあるやりとりをする。
- ・オオカミを怖がりながらもかわろうとする子や保育者のそばで保育者の真似をしながら遊ぶ子など、一人一人のペースで遊びに参加する姿を認める。

- ・段ボールなどの囲いを用意して、中に入ったり隠れたりできるようにする。
- ・子どもがしゃがむと隠れられる高さ、膝下でまたげる高さの囲いを用意し、様々な遊び方を楽しめるようにする。
- ・囲いの周りを逃げ回ったり、囲いを自由に移動したりできるように、安全な広い場所を確保する。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
いろいろなお話を聞く中で“7ひきのこやぎ”は喜んで聞くお話の一つである。4人の子どもが、こやぎのお家の囲い（ダンボール）の中で遊んでいる。 【場面： トントントン 入れて】 A児・B児は、ダンボールの囲いを家に見立てながら、こやぎになってごっこ遊びを楽しんでいる。 A 児：お家（囲い）の外から「トントントン入れて」 B 児：「いいよ」 保育者：2人がお家（囲い）を出たり入ったりして遊んでいるところにオオカミの面をかぶってやってくる。 保育者：「トントントン、一緒に遊ぼう」と声をかける。 A 児：「オオカミ～」といって急いでお家（囲い）の中に入る。 A児とB児は、お家の中で寄り添いながら外の様子を見ている。 保育者：「トントントン。お母さんですよ。一緒に遊ぼう」と言いながら家の中のA児とB児を見る。 A 児：「いや、入れたらん」 B 児：「だめ。遊ばん！」 2人で顔を見合わせて笑う。 保育者：「だめか。失敗、失敗」と一旦離れる。 A児・B児は家の中から保育者（オオカミ）の様子を見ている。 保育者：保育室の中を一回りして、もう一度家に近づいていく。 保育者：「トントントン、かわいいウサギさんだよ。一緒に遊びましょう」 A 児：「うそや！オオカミやん。だめ～」と保育者（オオカミ）を見ながら少し笑みを浮かべて答える。 B 児：「うそや！オオカミやん。だめ～。遊ばな～い」と笑う。 保育者：「入れてくれないなら…入っちゃおうかな！」とお家の周りをウロウロと歩く。 A 児：「キャー」と言いながらお家から逃げ出す。 B 児：同じように「キャー」と言いながらA児の後についてお家から逃げ出す。 保育者：「まてまてー」と言いながら2人をおいかける。 A児・B児：保育者（オオカミ）を目で追いながら、別の囲いの中に入る。 保育者：「Aちゃんこやぎはどこいったかな、Bちゃんこやぎはどこにいったかな～」と言いながら囲いの周りを歩く。 B 児：「こっちだよ」と囲いから顔を出し、保育者（オオカミ）を見ながら家の外へ逃げていく。 A 児：B児に続いて同じように逃げていく。	

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・繰り返しの言葉が楽しい時期なので、「7ひきのこやぎ」「3びきのこぶた」など、楽しい繰り返しのやりとりやストーリー性がある短い絵本などを選び、読み聞かせをしたり遊びに取り入れたりする。
- ・まずは保育者がオオカミになり「オオカミにつかまらないように」という簡単なルールだけのおに遊びを取り入れ、おいかけられたり隠れたりなど、役に応じた動きや言葉を楽しめるようにする。
- ・楽しい触れ合いを通して、保育者に対する安心感やもっと一緒に遊びたいという気持ちがもてるようにする。
- ・友達とトラブルになった時には、保育者が互いの思いを聞いて十分に受け止めるとともに、通訳のように代弁するなどの仲立ちをしながら、それぞれが自分なりの言葉で思いが伝えられるようにかかわる。

事例7

「積み木っておもしろいな」

【経験させたい内容】

〔3歳児〕

身近なものに触れ、見立てたり偶然できたもので遊んだりすることで、ものの感触や形、使い方などに興味をもつ。

〔3歳児 II期（6月～8月）〕

自分のしたい遊びや、気に入った遊具や場を見つけて、おもしろいと感じたことを繰り返し遊ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎積み木の感触や素材のおもしろさに興味をもち、様々な遊び方を見つけて楽しむ。
- 積み木を積んだり並べたりする楽しさや、崩れても繰り返し遊べる楽しさを感じる。
- 保育者や友達と一緒に見立て遊びやつもり遊びを楽しむ。
- 自分のイメージしたものをつくって遊ぶ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・形にこだわることなく、並べたり積み上げたりすることができ、またいろいろなものを表現しながら繰り返し遊べる。
- ・偶然できた形を何かに見立てたり、創造や模倣したりする力を養える。
- ・自由度が高く、空間や図形の認識能力が身に付く。
- ・ソフトブロックやブロックにはない「ずれる」「くずれる」ことを感じることができる。
- ・手先の器用さやバランス感覚を養うことができる。
- ・木の温もりや感触が感じられる自然素材で、十分な量を用意しやすい。

【環境設定】<場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

積み木で遊ぼう

- ◆積み木の量や置く位置や広さなどを考慮し、一人一人が十分に積み木遊びを楽しめる環境を工夫する。
- ◆経験差によって積み木のおもしろさが感じられない子もいるので、そばで保育者が遊び方を見せたり一緒に加わったりしながら、積み木遊びのおもしろさを伝えていく。

十分な量と広さ 見立てやすい形や色



- ・創造力が広がるように、白木の積み木を中心に準備するとともに、イメージのきっかけになりそうな色積み木も若干量準備する。
- ・一人一人が十分に使えるような量を身近で手に届く位置に用意する。
- ・並べたり広げたりできる広い場所を確保する。
- ・種類の違う積み木や様々な形の積み木を準備し、好きな形やイメージに適した積み木を自由に選べるようにする。

イメージしやすい環境



先生や友達と一緒に



- ・抽象的な形の集まりである積み木は、その経験差によって、どのように遊んだらよいのかがイメージできない子がいるので遊び出しのきっかけになるように並べたり、つくりかけにしたりして興味がもちやすい環境を準備する（様子に応じて準備する）。

- ・保育者が遊ぶ様子の真似をしたり、一緒に遊ぶ中で扱い方や楽しみ方を知らせたりなど、保育者の人的環境としての役割を大事にする。

片付けられる箱

積み木の種類によっては、全ての積み木がきちんと収まる箱を用意し、形の組み合わせを考えながら片付けることで図形や空間を認知する力が育まれるようにする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
昼食後などに積み木を準備することで、積み木遊びに興味をもって楽しむ姿が見られるようになってきた。最初は積み木を並べるだけの姿が多かったが、保育者が一緒に遊ぶことによって、徐々に並べたり積んだり倒したり、また「〇〇をつくろう」などの見立てを楽しんだりしながら、保育者や数人の友達と場を共有しながら遊ぶようになってきた。 A 児：保育者が少し並べておいた積み木を見て、「僕も並べよう」と近くの積み木の箱からいろいろな形の積み木を並べていく。真剣な表情で黙々と並べ続ける。部屋の中央から端の方まで並べる。時折、顔を上げては並べた積み木を見てまた並べることを繰り返す。円柱の積み木（下図①）を手にする。じっと見た後、並べていた手前の積み木（下図②）に転がして当ててみる。「あれ？倒れんな・・なんでやろ？」と1人でつぶやく。今度はもう少し強い力で転がしてみるが倒れない。近くにいた保育者に向かって「倒れん。なんでやろ？」と聞く。 保育者：「なんでだろうね〜。」と首をかしげながら、そばでA児の言葉を繰り返す。 A 児：「おっきいかな。」とつぶやき、手前の積み木を小さい積み木（下図③）に変えて再び円柱積み木を転がす。しかし倒れない。「う〜ん・・・」と首をかしげる。 保育者：しばらくして「この積み木はどうかかな？」と平たい四角柱積み木（下図④）を渡す。 A 児：「やってみる」と持っていた円柱積み木を転がすと倒れる。「倒れた！」と笑顔で保育者に伝える。 A 児：「もう1回しよう」 保育者：同じ四角柱積み木をA児のそばに置く。 A 児：置いてある積み木を同じように並べ、円柱積み木を転がす。3つの積み木が連続で倒れる。「すごい！いっぱい倒れた！もう1回」と言いながら、今度は自分で箱の中から四角柱積み木を探し並べ始める。 ① 円柱 ② 立方体（大） ③ 立方体（小） ④ 平たい四角柱	

- ・並べてある積み木があったことで、続きを並べてみたいという興味生まれ、近くにあった積み木を並べ始めた。形には特にこだわることなく、たくさん並べることに集中し、時折自分が並べた積み木を確かめながら繰り返している。
- ・偶然に手にした円柱積み木から、「転がしてみたら・・・」という行為を思いついた。1回目は特に意識なく転がしてみたが、2回目は倒そうという意識で力加減を調整して転がしてみた。2回目のやり方ならば倒れると思っていたようで、「何で倒れないんだろう」という予想に反した結果を体験したことで新たな疑問が生じた。
- ・保育者がA児の素朴な疑問に対して答えを出すのではなく、同じ言葉を繰り返して投げかけたことで、A児自身が倒れない理由を予想して試してみるという行動を促すことができた。
- ・A児が自分なりに試したが倒れなかったというタイミングを見て、「どうかかな？」というさりげない態度で平たい四角柱の積み木を渡した。「倒れた」という喜びから、「もう一度確かめる」という行為が生まれ、「やっぱり倒れた」という確認へとつながる「学びのサイクル」が心の中に生じている場面である。
- ・A児の心が「確認」から「もっと倒したいという意欲」へと移ったタイミングに合わせて、保育者がA児に積み木を渡したことで、自分から「倒す」という目的に応じた形を探して並べ、たくさん倒したいという遊びに広がっていった。



必要な援助・環境の再構成等のポイント

- ・経験差にもよるが、子どもによって積み木遊びの楽しみ方が分からない子もあり、時には興味のきっかけになるように並べたり積んでおいたりして遊び出しをイメージできるような環境を準備することも必要である。
- ・保育者は、子どもが興味をもったことに集中して繰り返し試して遊ぶ過程を大事にし、子ども自身がじっくり取り組めるような場所や時間を保障するようにする。
- ・子どもが疑問をもったタイミングをチャンスと捉え、すぐに保育者が答えてしまうのではなく、一緒に考えるという姿勢を見せながら、子ども自身が考えて試してみるという場面を生みだせるようななかかわり方を大事にする。
- ・興味の広がりによっては、「倒れる」ことにより興味・関心を広げられるような環境や遊具（ドミノや無限積み木、カプラなど）も準備し、遊びの様子に合わせて設定していくようにする。

事例8

「おねつをはかりましょう」

【経験させたい内容】

〔3歳児〕

親しみをもって保育者の話を聞いたり、困ったことやしてほしいことを言葉で伝えたりする。

〔3歳児 IV期（11月～12月）〕

遊びの中でやりとりを楽しみながら、生活に必要な言葉を知る。

【活動のねらい・内容】

◎自分のしたいことや思ったことを言葉や行動で表しながら遊ぶ。

◎保育者や友達とかかわって遊ぶ中で、自分なりの思いやイメージを膨らませながら言葉でのやりとりを楽しむ。

○遊びに必要なものを選び、見立てたりなりきったりして遊ぶ。

○「入れて」「貸して」「いいよ」「ありがとう」など遊びに必要な言葉を、自分で言ったり保育者に促されて言おうとしたりする。

○同じ場にいる友達とお医者さんごっこを楽しむ中で、相手の言葉の真似をしたり、遊びに必要な言葉を使ったりする。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・2～3歳は、大人の行動を好んで再現したり、真似をすることでそれぞれの役割に関心をもったり、注意深く観察したりするなどの力が養われる時期である。さらに、身近な場面を再現したごっこ遊びを好んで楽しむ時期でもある。
- ・お医者さんに診てもらふ経験は身近で、特に関心が強いことから、ごっこ遊びとしてのイメージがもちやすい。
- ・お医者さん役、患者さん役のやりとりは分かりやすく、また共通のイメージをもちやすい。
- ・同じ場で遊ぶ中で、遊びに必要な言葉を知ったり使ったりすることができる。
- ・遊びに必要なものを、身近にある材料を使って自分なりにつくったり見立てたりすることができる。

【環境設定】<場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

お医者さんごっこをしよう

〈準備物〉

- ・お医者さんグッズ
(子どもの扱いやすいサイズにする)
- ・お面、聴診器（聴診器と口の中を見るライト）、体温計、包帯、冷えピタ（フェルト）、薬注射器、ベッド、布団
- ・囲い（ダンボールなどでつくったもの）

① なりきって遊べるグッズ



お面



包帯、体温計、注射器

- ・お医者さんグッズをよく見えるところに出しておき、遊びのきっかけをつくる。
- ・聴診器などは、安全に配慮したうえで、首から掛けられる工夫をする。



聴診器とライトのセット

◆自分なりになりきったり見立てたりして遊べるような場所や遊具、手づくり教材などを用意する。

◆本物らしく見立てやすい環境を工夫する。

② こっそりと入れる場所
(ダンボールの囲いなど)③ 見立てて遊べる遊具
(人形、ベットなど)

- ・1人または2、3人が入り込んで落ち着いて遊べる場所を数か所準備する。
- ・段ボールや囲いなどは、子どもの遊びや人数に合わせて自由に動かしやすいものにする。

④ つくって遊べる材料や用具

小さな紙 長細い色画用紙 カップ
薬の容器 水性マーカー など



- ・お医者さんごっこが楽しくなるために、つくりたいと思いついた時に自由につくれるような製作コーナーを用意しておく。
- ・ハサミで1回切り程度が楽しめるように、細長い紙を用意する。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
ダンボールの囲いの中で、A児とB児が人形に布団をかぶせて寝かせている。そばに保育者がいて、3人が同じ場所で遊んでいる。 A 児：「この子微熱、注射チクン」と言いながら、ベットの寝かせている人形の腕に注射の真似をする。 保育者：腕に注射した時に人形になりきって「痛いよ～」 A 児：保育者の顔を見て、にこっと笑う。 B 児：同じ人形のお腹に聴診器でポンポンあてながら「先生、この子お腹ゴロゴロっていつてる」 保育者：「お腹ゴロゴロって聞こえるのね」 B 児：保育者の顔を見て笑いながら「うん」とうなずく。 C 児：その様子をしばらく見た後、人形を抱いて「入れて」と入って来て、隣のベットに人形を寝かせ「今日は入院します」と独り言のように言う。 A 児：「早く寝ましょう」と言い、自分の人形をトントンする。 C 児：「あ、そうだ」と言いその場を離れ、薬袋5つを腕に抱えるようにして戻ってくる。 A 児：「もう1回、お熱を測ろう」と言って体温計を人形の脇に挟む。しばらくして体温計を見ながら「お熱高い」とそばにあった冷えピタを人形のおでこに貼る。 B 児：C児が薬を持っているのを見て、「この子に飲ます薬をちょうだい」 C 児：一瞬表情を曇らせたが、何も言わず1つB児に渡す。 B 児：「ありがとう」 保育者：「よかったね、Cちゃん優しいね」と言葉をかける。 C 児：にっこりする。 B 児：「朝の薬はこれね」と人形に飲ませる真似をする。 A 児：その様子を見て、B児が一旦置いた薬を手に取り、同じように人形に飲ませる真似をする。 B 児：「Cちゃん、(薬を) もっとちょうだい」 A 児：「1個ちょうだい」とC児に言う。 C 児：「はい」とにっこりしながら2人に渡す。 A 児：「ありがとう。これもこの子の薬やで」と言い、自分の人形に飲ませる真似をする。	

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・ごっこ遊びは、場面に応じた言葉の使い方や役割の理解など、様々な学びが促せる大事な遊びであることから、保育者も仲間になりながら、発達への促しに必要な場面を選んでタイミングよく言葉をかけるようにする。
- ・友達と意思の違っている場面では、まずは保育者がそれぞれの意思をしっかりと受け止め、場面によっては代弁して相手に伝えるなどして、友達と一緒に遊ぶことが楽しいと感じられる場面を大切にする。
- ・イメージや会話力もまだ不安定な時なので、ものを媒介にして一緒に楽しめるような環境を十分に用意しておくことが必要である
- ・話したい気持ちを受け止め、ゆったりとかかわりながら話を聞いていく。また言葉を補うなどして子ども同士のやりとりを楽しめるようにする。また、相手が遊びに夢中で伝わりにくいこともあるので保育者が仲立ちしていく。
- ・周りにいる子どもが保育者の言葉を聞いていることを意識しながら“やってみたい”と思えるような雰囲気をつくったり“つもりの世界”の中で誘いかけたりする。

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

自然の美しさに触れて感動したり、自然物を使って遊ぶことを楽しんだりする。

〔4歳児 II期（6月～8月）〕

砂や水、泥などの自然物に触れて感触を楽しみながら遊ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎砂や水の感触を十分に味わいながら遊ぶことを楽しみ、開放感を味わう。
- 手や足で砂や水の感触を十分に楽しむ。
- 砂や水などに親しみ、その性質に気付く。
- 遊びをおもしろくするために、用途に応じた用具を探したり使ったりする。
- 自分の思ったことや気付いたことを、保育者や友達に言葉で伝えようとする。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・この時期の砂遊びや水遊びは、開放感を十分に味わうことができる。
- ・砂遊びは、その可塑性から、形を思いのままに自由に変えたり、道具や用具を使って見立てたりすることができる。
- ・見立てやすいのでイメージがより広がり、創造性を養うことができる。
- ・喜びや発見が多い遊びであることから、保育者や友達に感じたことを言葉で伝える喜びを味わうことができる。
- ・一人一人が、自分の遊び方で何度も繰り返し楽しむことができる。

【環境設定】＜場所：園庭＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

砂遊びをしよう！

＜準備物＞

- ・持ち手付きバケツ
（水を入れても子どもの力量で運べる大きさ）
- ・スコップ（1人に1本程）
- ・丸型筒状のトコ
（子どもが扱いやすい長さ約70cm）
- ・たらい（水は汲んでおく）



持ち手付きバケツ

1人で、または友達と一緒に運べるように、人数の7割程の数を準備する。



スコップ

自分の思いで十分に遊び込めるように、遊びに必要な用具として1人1本ずつ準備をする。



丸型筒状のトコ

子どもが扱いやすいように、短めのものを立てておく。

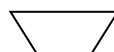
◆砂や水の心地よさや感触、開放感などを思う存分味わえるように、まずは保育者が素足になり、子ども達にも素足やビーチサンダルで活動するように促す。

◆保育者が、砂や水の特性や感触を十分に味わい楽しむ姿を見せるとともに、子ども自身が繰り返し遊ぶ中で、感じたり気付いたり試したりする姿を支えていく。



筒（トコ）に繰り返し水を入れ、下に浸み出したり、勢いよく流れ出したりする不思議さやおもしろさに気付かせていく。

繰り返し楽しむ中で、それぞれが十分に遊び込めるように、また自分なりの発見や気づきが生まれるように、十分な時間を設ける。



水入りたらい

子どもが必要に応じて汲みに行ったり、また水の量を調節したりしながら遊べるように、砂場から少し離して置いておく。

子どもの姿	読みとり
気温の上昇に伴い、水を十分に使い思う存分砂遊びを楽しむ子が増えてきた。スコップで穴を掘ったり筒に水を流したりすることに興味をもって遊ぶ姿が見られた。当日も砂場で遊んでいた子ども達が、スコップを持ち出し、昨日と同じ場で遊び出す。保育者が素足になって遊び出すと、その様子を見ていた7、8人程の子ども達も、素足になりスコップを持って穴を掘り始める。昨日A児は、筒に水を繰り返し流して遊び、水の勢いで砂が浸食することを楽しんでいた経験から、今日は早速筒を砂山に突き刺した。	
【場面① 水が出てきた！】 A児は、砂場に突き刺した筒（トユ）を片手で支えながら「ここに、水を入れるんや。」と言い、水を運んでくる。その言葉を聞いたB児は、A児の代わりに筒（トユ）が倒れないように持つ。A児は、そっと筒に水を流す。C児は、A児のバケツが空になると「もっと、水を運ぶわ」とそばにあったバケツを持ち、水を汲む。A児とC児は交互に自分のバケツを持って水を汲む。 D児は、水で浸食した筒（B児が持っているトユ）の周りに、砂を集める。水を流す度に集めた砂に水が染み出てくる。D児「わぁ～水が出てきた！！」B児は、その様子をじっと見ると、砂場に刺してある筒（トユ）を両手で一気に引き抜く。筒（トユ）の下から、勢いよく水が流れ辺りに広がる。 A児C児D児「わぁ～（水が）出てきた！！」「つめたい！」「ドバッと、出てきた」と、口々に言う。 流れ出した水に足をつけたり、足をバシャバシャと動かしたりする。 【場面② とろとろ・もこもこ もう1回！】 B児が砂場に刺してある筒（トユ）を支えて、A児C児が交互に、筒（トユ）の口から水がこぼれないように流し入れる。水が筒（トユ）の上まで溜まると、下から水が染み出して砂の様子が変化する。「とろとろが出てきた！」「もこもこ砂が出てきた！」と砂の様子を口々に言う。しばらく見た後、3人で一緒に筒（トユ）を一気に引き抜く。飛び出すように流れだす水に「うわ～」「きゃー」と歓声がある。「もう1回」「もう1回」と何度も繰り返し遊ぶ。筒（トユ）を抜く度に大きな穴があき、その様子を見ては「どんどん深くなってきた！」と発見したことを友達に伝える。	・A児の“筒にそっと水を流す”手首の微妙な動かし方は、今までの経験からこぼれないように注ぐ力加減が分かっていることが伺える。 ・B児は、今までの経験から、水を入れると筒（トユ）が倒れやすいことを想像し、A児の代わりに筒（トユ）を押さえる役となる。 ・C児は、友達の楽しそうな様子に「楽しそう」「やってみよう」という思いが生まれ、水を汲みに行くという役割を見つけて遊びの仲間に加わり、A児の真似をして繰り返し水を運ぶ。 ・D児は、砂と水の関係（浸透や浸食）に興味関心をもつ中で、砂の特性に気付き、浸透のおもしろさや集めた砂の形が変化していく様子を喜び、繰り返し楽しんでいる。 ・水が勢いよく流れ出す様子を「ドバッ！」という擬態語で表す。ワクワク感から感じたことをいろいろな言葉で表す。 ・素足になっていることで、汚れを気にせず思う存分遊ぶ姿につながっている。 ・水を含んだ砂の様子を「とろとろ」「もこもこ」という擬態語で表す。それぞれが砂の様子をそれらしい表現で表している。 ・おもしろいと感じたことを何度も繰り返し遊びながら、一緒に遊ぶ友達同士で確認をする。 ・水の勢いで砂が掘れたり、深くなったりすることを発見する。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・子どもが汚れを気にせずに思いきり遊べるように、袖まくりや素足になるなどの身支度を促す。また、素足の感触が苦手な子には、まずは保育者がモデルとなって一緒に遊びながら、砂や水に十分触れられるきっかけづくりをしていく。 ・自分達の見つけた遊び場や楽しさが、昨日から今日そして明日へと連続していくように、またおもしろいと感じたことを納得いくまで繰り返し遊べるようにしておく。 ・子どもが、より砂や水の感触や特性を楽しめるような用具を準備するとともに、保育者も一緒になって遊ぶ中で、新しい用具の使い方などを知らせていく。 ・保育者は、子どもが砂や水など素材の特性に気付き、その様子を自分なりに知っている言葉で周囲に表現している姿を認めていく。 ・砂の質、固さ、水の量、水の勢いなどについて不思議に感じたり疑問に思ったりする体験を大切にしながら、「不思議だね」「なぜだろうね」などの言葉がけをしたり、また子どもの発想を受け止めたりしながら、科学的なおもしろさに興味関心が高まるようにする。	

事例10

「リスさん カリカリ」

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

絵本などの中の人や身近な動物などになりきって遊んだり、音楽やリズムに合わせて動いたりすることを楽しむ。

〔4歳児 V期（1月～3月）〕

絵本やお話などのストーリーに沿って、自分のイメージを動きや言葉などで表現して遊ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎お話に興味関心をもち、感じたことを動きや言葉で表現して楽しむ。
- いろいろな役になりきって遊ぶことを楽しむ。
- お話の一場面など、自分が興味をもった言葉ややりとりを繰り返して遊ぶ。
- お話遊びに必要なものをつくって楽しんだり、つくったものを使って遊んだりする。
- お話のストーリーに沿って、自分なりに動きや言葉で表現して遊ぼうとする

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・視聴覚教材（絵本、紙芝居、ペープサート）に関心をもち、集中して見たり聴いたりするとともに、頭の中でストーリーを理解しながらお話遊びを楽しむ経験ができる。
- ・お話のイメージで遊ぶ中で、自由な発想を思いついたり空想を広げたりする経験ができる。
- ・イメージの世界でなりきって遊ぶ楽しさを味わうことができる。
- ・イメージの実現に向けて、自分なりに様々な素材を使ってつくろうとしたり、またつくったものを使って遊んだりすることができる。
- ・様々な言葉に関心をもち、自分の経験したことや思ったことを相手に話したり、会話の楽しさを味わったりしながらお話の展開を楽しむことができる。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

「どうぞのいす」ごっこをしよう

＜準備物＞

- ・手づくりペープサート ・面と帯
- ・手づくり木製看板と椅子
- ・ダンボールの囲い（動物ごとに1つずつ）
- ・包装紙や不織布 ・カラービニール袋など
- ・セロテープ ・ホッチキス ・クレパス

① 木製看板



お話のイメージが湧くような材料を選択し、子どもの力量で簡単につくれるように準備しておく。

◆お話のおもしろさを味わいながら、自分のイメージを言葉やいろいろな動きなどで表現することを楽しくめるように、保育者も役になりきって表現することを楽しんでいく。

② ペープサート遊び



お話がクラスで共通のイメージとしてつながるようなペープサートを準備する。

③ ダンボールの囲い（お家）



同じ役の友達と思いを伝え合いながら、落ち着いて遊べる場を整える。

④ お面・帯

- ・一人一人が自分の表現を楽しめるように、未完成の絵柄を準備する。
- ・ホッチキスなどの身近な道具やものの使い方が分かるように、片方のみゴムをかけた帯を準備する。



⑤ ごっこに使うものをつくる



共通のお話のイメージで遊べるよう、必要なものが容易につくれるような材料やアイデアを投げかける。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
子ども達に、お話「どうぞのいす」の絵本を読むと、多くの子が興味をもった。そこで、お話や繰り返しのおもしろさ、なりきって遊ぶ楽しさが味わえるように、お話のペープサートや動物のお面、椅子などを用意した。子ども達は、早速お話に沿ってペープサートを動かしたり、お面をかぶったりしっぽなどをつけたりして、気の合う友達と一緒に役や興味をもった役になりながら楽しんでいる。また、いすの上に置くものをつくって置いたり、いろいろなものが次々と置かれたりすることを喜んでいる。	
【場面① なりきってあそぼう】 A児：リスの面をかぶり、しっぽを付け、両手を口の前に揃えて、つま先歩きをしている。そばにいたリスの面をかぶっているB児に「Bちゃんも、一緒にリスさんになろう」と誘う。 B児：ニコニコしながら、「Aちゃん。リスみたいに上手に歩くな！教えて」 A児：嬉しそうに「ひざはぴったんこ。手をつんつんするんやで。足は、トコトコトコって歩くんよ！」と、リスになりきってつま先歩きをする。 B児：後ろについてA児の姿を真似る。 【場面② つくったもので遊ぼう】 B児：「“どうぞのいす”に、リンゴを持っていくんや！今、つくったん！！」とA児にリンゴを見せる。 A児：「な～んて、おいしそう。カリカリカリ」と言いながら、食べる真似をする。「私も、いろいろつくったよ！」とバスケットの中のミカンや飴、たこ焼きなどを見せる。 B児：「わあ～たくさん入っている！動物さん食べに来やあれかなあ～」と大きな声で話しながら、“どうぞの椅子”につくったものを置く。 【場面③ お話のストーリーに沿って遊ぼう】 C児はキツネ役 C児：A児B児の会話を聞き、椅子の上を覗き込み「わあ～いっぱい！！」と驚いた顔で言う。 A児：「食べて！“どうぞなら、遠慮なくいただこう”って、言ってよ！！」と伝える。 C児：「どうぞなら、遠慮なくいただこう」と同じキツネ役のD児とE児とで顔を見合わせながら言う。 A児：部屋に置いてある鈴を持ち、キツネ役のC児達が食べている時に合わせてシャランシャランとならす。	・A児は、自分なりのリスのイメージで、お面をかぶったりしっぽをつけたりしながら「なりきり遊び」を楽しんでいる。 ・同じ役（同じ面）のB児と楽しみを共有したいという思いから、かかわるために必要な言葉を使って友達を誘う。 ・「上手だね。教えて」とB児に認めてもらった嬉しさから、自分がイメージする表現を相手に自信をもって伝えることができた。 ・自分のイメージを自分なりに相手に分かるように、擬態語など様々な言葉を使って伝えようとしている。 ・B児は、A児に教えてもらったやり方を真似をしながら、自分でもやってみようとする。 ・お話がより楽しくなるように、自分がつくったものを遊びに取り入れている。 ・友達がつくったものを食べる真似をすることで相手を受け入れている。“おいしそう”と、場面に応じた言葉で表現している。 ・B児は、自分のつくったものをクラスの友達に食べてもらいたい思いで周りの友達にも聞こえるように大きな声で伝えるとともに、次への展開を期待しながら楽しんでいる。 ・C児は、A児とB児の話に耳を傾けて、お話のストーリーに沿って一緒に遊ぼうと自分から参加してきた。 ・絵本に出てくる気に入ったフレーズを友達に要求しながら、言葉（台詞）のやりとりを楽しんでいる。 ・A児は、普段使っている楽器を使うことを思い付き、友達の動きに合わせて鳴らすことで、自分なりによりお話し遊びが楽しくなるように工夫している。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・子どもが興味をもちやすい絵本や紙芝居などのお話を投げかけ、クラスで共通に楽しむごっこ遊びへと展開していく。 ・お話の楽しい場面が再現できるように、保育者自身が役になりきって言葉や表現を引き出したり、イメージに合う環境や材料用具などを準備したりする。また、必要に応じて衣装や音楽なども準備しておく。 ・子ども達が簡単につくれる材料用具を準備するとともに、自分なりに必要なものをつくろうとしたり、友達同士で教え合ったりする姿を大切にしていく。 ・一人一人の発想や動きを丸ごと受け止め、自分なりの表現を考えたりなりきったりすることを楽しめるようにする。 ・子ども達がいろいろな言葉に関心をもち、場面に応じて使えるように、保育者も仲間になって遊びながら言葉で表現する場面を意図的に促していく。	

事例11

「きれいなケーキをつくりたい！」

【経験させたい内容】

〔5歳児〕

目的や課題を自分のこととして受け止め、これまでの経験を生かすなどして工夫して取り組む。

〔5歳児 II期（6月～8月）〕

身近にあるいろいろな素材や材料の使い方が分かり、遊びに生かそうとする。

【活動のねらい・内容】

◎いろいろな素材や環境に触れる中で、自分なりの目的をもち、試したり考えたりしながら遊ぶ。

○身近にあるいろいろな素材や材料の使い方が分かり、取り入れて遊ぼうとする。

○石鹸と水の量との調整で、いろいろな硬さになる石鹸の特性に気付く。

○泡を使って工夫して遊ぶ。

○一緒に遊ぶ友達に対して、自分が気付いたことや自分の思いを言葉で伝えながら遊ぶ。

【活動・教材を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・水の量や石鹸の量、泡立て具合によってできる泡の硬さや違いに気付くなど、試しながら遊ぶことができる素材であり、また、少しずつ泡に変化していくという達成感を味わいながら、できたものに色をつけたり、花を飾ったりして見立てるなど工夫して遊ぶことができる。
- ・自分なりに目的をもって繰り返し取り組んだり、友達と比べたりして遊ぶことができる。
- ・低年齢からの遊びの経験を、さらにイメージを広げながらじっくり繰り返し楽しむことができる。
- ・経験したことや気付いたことから予測を立てて試したり確かめたりするなど、思考力や探求心が育つ。

【環境設定】 <場所：園庭> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

泡を使ってごちそうづくりをしよう

<準備物>

- ・ボウル・石鹸（白、色つき）・草花
- ・おろし金　　・泡だて器　・絵の具
- ・皿やカップ　・スポンジ　・トレイ
- ・メニュー表や切り抜き

① 自分で選んで使おう



これまでの経験から、砂でケーキをつくれるような型ぬきや、ケーキに見立てたスポンジ、シェイクやパフェに見立てて使えるような透明容器など、自分がつくりたいものを考えたり選んだりできるようにしておく。

子どもがケーキの飾りに見立てやすいような草花や絵の具などを用意する。絵の具を使う子には、スポイトのように手先を使って量が調節できるようにストローを準備する。

- ◆友達の様子に刺激を受けたり、様子に気付いたりしながら楽しめるよう机を近づけておく。また、できたものを並べて見たり比べたりなど、お店のイメージにつながるような場所を用意する。
- ◆自分達で用具を選んで準備したり、また明日につながるための片付けができるような置き場にしたりする。
- ◆友達と声をかけ合って貸し借りできるのもの（おろし金、石鹸など）は数を少なくし、個人でじっくり取り組むのに必要なもの（ボウル、泡だて器など）は数を多めに用意する。



② ケーキをつくらう



③ 真似をしてつくってみよう



- ・メニューやケーキづくりの参考になるように、広告の切り抜きなどを用意する。
- ・本物のメニューらしく、子どもが実際につくったものを写真にとり、切り抜いて使えるような準備をしておく。

子どもの姿	読みとり
石鹸を使って洗濯遊びやシャボン玉遊びなど、様々な泡遊びを楽しんでいたところ、4歳時に水に石鹸を入れて泡立て、生クリームに見立ててケーキづくりをした経験を思い出し、女兒を中心にケーキづくりへの興味が広がってきた。ケーキの載っている絵本を見たり、自分が食べたものや見たことのあるケーキの話をしたりなど、ケーキづくりへの関心が高まる中で、当日には「苺やチョコケーキをつくりたい」「絵の具も使いたい」と具体的に材料を要求する声が子ども達からあがり、草花などと共に絵の具も用意した。	
【場面① 硬いクリームをつくろう】 気の合う友達A・B・C児がテーブルに集まり、泡クリームづくりを始める。道具置き場から、ボウル、おろし金（受け皿付）、泡だて器、石鹸をとってきて、おろし金で石鹸を削り、それぞれに石鹸の粉をつくり始める。ボウルに入れた水に少しずつ石鹸粉を加えながら「トロトロのクリームにするんや」と話すA児。隣のB児は、「私はかたーいのにする」とボウルに直接石鹸を削り入れて少しずつ水を加えて混ぜる。根気よく混ぜて硬い泡ができると「逆さ向けても落ちひんで」と周りの子に話す。C児「どうやってそんな硬くするん？」とB児のボウルを覗き込む。B児「石鹸いっぱい削って水はちょっと、よ〜く混ぜてな」と答える。C児は自分のボウルに石鹸をたくさん削ると、水を少しずつ入れながら繰り返し混ぜ始めた。途中で泡立て器を持ち上げて泡の様子を見ながらつくっていく。C児「ちょっと硬くなってきた」と笑顔を見せながら混ぜ続ける。 【場面② おいしいケーキをつくろう】 C児は硬めのクリーム（泡）がつかれると「よーし、桃味のケーキにしよう」と、ストローを使ってクリーム（泡）に赤色絵の具を少しずつ垂らしながら繰り返し混ぜる。ピンク色になったクリーム（泡）を丸スポンジの上に垂らし、スプーンでクリームを塗り広げていく。時々メニュー表を見ては花びらや小枝を飾り、出来上がるとA児がつくったシェークの近くに置いた。保育者が「Cちゃんのケーキ、ふわふわクリームにお花もいっぱい飾ってあっておいしそう！」と声をかけるとC児はにっこりほほ笑んだ。	・遊びに必要な用具や材料が分かり、自分で選んで手際よく準備ができる。 ・今までの経験から自分なりの泡づくりの方法でつくってみようとする。 ・自分のイメージする泡の形状に近づけるために、それぞれに水と石鹸の分量や混ぜ方を工夫しながらつくっている。 ・友達のしていることに興味をもち、疑問に思ったことを友達に聞いたり、その方法でやってみたりする。 ・自分のつくり方を友達に分かりやすい言葉で伝えようとする。 ・赤絵の具と石鹸は桃色になるなど、予め色の組み合わせを理解しながらつくっている。 ・自分のイメージに合う桃色のクリーム（泡）をつくるために、ストローを使って絵の具の量を調節している。 ・見本の写真を参考にしながら、イメージに合う材料や自然物を選び、素材の組み合わせを楽しんでつくっている。 ・保育者に認めてもらったことが嬉しく、自分のケーキづくりに自信をもつ。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・自分なりに試せたり、偶発的な発見や気づきが生まれたりする材料や用具を用意する。 ・工夫して遊んでいる様子を具体的に認める言葉がけをすることで、自分のやり方に自信をもてるようにする。 ・子どもが気付いた様々な事象（泡の違い・色の混ざり具合・材料の使い方）やその子なりの工夫を十分認める。 ・より本物らしくしたいという気持ちを受け止めるとともに、遊びが発展するような材料やアイデア、言葉がけなどを考え、必要に応じて取り入れるようにする。 ・自分なりにこだわりをもって繰り返し遊んでいる姿を受け止め、その遊びから今後の遊びの広がりを予測し、必要と思われる材料を子どもと共に準備できるようにする。 ・自然物を使って繰り返し遊ぶ中で、イメージに合う材料や容器などを準備したり、また必要に応じたものの量や配置場所などを考えたりする。 ・友達同士で教え合える場所や機会を大切にする。	

事例12

「縁日ごっこ」

【経験させたい内容】

〔5歳児〕

ゲームや遊びの中で数を数えたり、文字に触れたりすることなどを通して、数や文字に興味をもち、必要感をもって遊びに使う。

〔5歳児 IV期（11月～12月）〕

遊びに応じて、必要な表示を考えたり文字や数字を積極的に取り入れたりする。

【活動のねらい・内容】

- ◎自分が表現したいことやイメージしたことの実現に向け、自分なりに工夫して楽しむ。
- 自分が表現したいことに向け、必要な材料や方法を選び、自分なりに考えてつくろうとする。
- 自分の考えを相手に分かるように話そうしたり、友達の話を理解しようとして関心をもって聞いたりする。
- 数や文字・記号などに興味をもち、必要に応じて書いたり調べたりしながら遊びに取り入れる。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・地域の行事を題材に取り上げることで、クラスみんなでイメージを共有しやすく、また体験したことを再現するために、一人一人（グループで）イメージに合う表現活動を展開することができる。
- ・友達とイメージを共有して遊ぶために、自分の思いを相手に分かるように話したり、相手の思いを理解しようとして聞いたりする場面を多く経験できる。
- ・自分が表現したい材料や方法を選び、様々に試行錯誤しながら遊ぶことができる。
- ・文字や数、図形、記号などを使って遊ぶ中で、言葉以外の方法で相手に伝える便利さを感じたり、関心を高めたりできる。

【環境設定】＜場所：保育室、廊下＞/活動名：□□□ / 教材：□□□ / ポイント：□□□□ / 環境への配慮：◆

縁日ごっこで遊ぼう

＜準備物＞

- ・店の品物の製作に必要な材料（自然物、空き箱、カップ、段ボール、紙類、ビニール類、ひも類など）
- ・道具など（段ボールカッター、ボンド、ガムテープ、セロハンテープ、マジック、掃除道具など）



お店の場所を廊下に表示

宣伝しよう「みんなきてね」

◆全体で使える場所やお店のそばなどに、必要な材料を自分達で選んで出せるように、素材や色ごとに分類して準備する。新たな材料を出す場合には、置く場所やタイミング、量などについては、子どもの活動の様子を見ながら判断する。

ぼくたちのお店



- ・それぞれの店に、小テーブル（作業台）を置き、その場で仲間と相談しながら製作できる場をつくる。
- ・マジック立てを用意（ヨークの容器などを利用）し、色や数を確認して片付けたり、整頓したりする姿につなげる。

- ・それぞれの店やその近くに掃除道具（ミニほうき、ちりとり、ゴミ箱）を置くことで、自分達で片付けようとする姿につなげる。

- ・画用紙、厚紙、ダンボールなど、様々な材質・丈夫さなどの紙を準備することで、自分達の遊びや宣伝（チラシや看板）する場所に応じたものを選べるようにする。
- ・様々なサイズの紙を用意し、自分の必要な大きさを考えて切って使えるようにする。

子どもの姿	読みとり
秋の自然物を使つての製作遊びを繰り返す中、数名がクラスの一角でアメ屋さんを始めた。刺激を受けた子などで少しずつお店屋さんが増える中、地域の木之本本地蔵への参拝やたくさんのお店が並ぶ縁日で遊んだ経験が重なり、クラスでの縁日ごっこへとイメージが広がっていった。繰り返して遊ぶ中で、もっとお客さんに来てもらいたい思いが強くなり、看板や値段、地図、メニューなどを思いつき、文字や数字、記号を使って宣伝しようとする姿が見られるようになった。 【場面① やじるしを書いて案内しよう】 A児：「お客さん来ないなあ。迷子になってるのかな・・・あ！そうや！いいこと思いついた！」と、近くにある数枚の紙（ポスターの裏紙）とマジックをとり、自分の店までの道を示す矢印（↑）と案内文（文字）を書き始めた。書き終わると、矢印の向きをくるくる回しながら、店の前や近くの廊下にセロテープで貼り付けた。 「これで明日からたくさんお客さんがくるな」 ↓ 翌日、その紙が破れていた。 A児：「あれ～！破れたるやん・・・」と紙をじっと見つめている。 B児：「みんなが踏んだからや、もっと丈夫にしないとあかんわ」（※B児は同じ店の仲間） A児：「ん～、ダンボールかな。」とB児と顔を見合わせると、2人でダンボールを探しに行った。置いてある段ボールの切れ端と養生テープを手に取り、昨日と同じ矢印や文字を書き同じ場所に養生テープを使って貼り付けた。  【場面② 大・中・小で値段を変えよう】 たこ焼き屋さんでは、4名が集まり紙を丸めてたこ焼きをつくっていた。子どもによってそれぞれつくる大きさが違う。大きさが不揃いなたくさんのだこ焼きを見て、C児「いろんな大きさがあるな。これ（大きなたこ焼き）も100円か？」とD児に向かって言う。D児「そっか・・・おかしいな。もっと高くする？」E児「大きい方がお腹ふくれるし、高くしよ！これはちゅうくらいやな」F児「じゃあこれは？（かなり小さいたこ焼き）」と手にとる。4人は顔を見合わせて笑う。D児「値段を決めよ！」と近くにあった画用紙に文字を書き出す。「大きいのはすごい高いで」と「0」をたくさん並べて「10000えん」と書き机に貼る。C児達3人は、たこ焼きを大中小に分けてテーブルに並べる。 	・クラスから離れた廊下にお店を出していることから、お客さんが来ないことについて「お客さんが迷っているのかも・・・」と縁日で見聞きする「迷子」をイメージする。お客さんが迷わずお店に来られるように、またお客さんがたくさん来るように（遊びがより楽しくなるように）考えて、宣伝（案内）することを思いついた。 ・今までの経験から、たくさんの人に知らせる方法として、文字や記号を使う方法を思いつき、身近にある紙とマジックを使い「この案内（矢印）を見てお客さんが増えるかな」という期待をもちながら書いた。迷わずに書き出す様子から「ぼくは字が書けるよ」という自信や喜びも伺われる。 ・案内の紙をくるくる回して廊下に貼る姿から、矢印の向きが自分の店に向くように確かめている。案内に使う矢印の意味を理解し、お客さんに自分の店の場所がしっかりと伝わるように考えている。 ・昨日につくった案内の紙が破れてしまったことに対して、諦めてしまうのではなく、友達の言葉を聞いて「もっと丈夫にしたらいい！段ボールだったら踏まれても大丈夫」という新たな気付きや材料の選択につながった。また、段ボールを貼るには、その厚みなどから養生テープを選んだ。（※ガムテープは丈夫で強いと理解しているが、廊下に貼らないという約束を守り、その他の材料の中で一番丈夫であろうと養生テープを選んだ。） ・大きさが違うたこ焼きの値段が同じであることに疑問を感じた。「大きければ高い・小さければ安い」という基準をもち、大きさと値段の大中小を対応させている。「ちゅうくらい」と表現することから、大きさや量などの概念が育っていることが分かる。 ・「10,000円」の価値は分からないものの「0」を多く書くことで高くなるという概念をもっている。 ・お客さんに分かりやすく説明するには、値段を決めて文字に表し、店に貼って知らせる方法が便利だと理解している。必要に応じて文字や数字を遊びに取り入れようとする。 ・伝えたい思いから、自然と文字や数に興味をもって書く姿が見られた。 ・買い物などでの経験から、よりお店屋さんらしくしたい思いをもち、大中小の大きさごとに並べる。

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・環境の再構成は、子ども達との話し合いの中で出たアイデアが実現できるように、素材や用具を各コーナーや全体の子が使う場に整理して置いておく。
- ・縁日ごっこの場所は、保育室にとどまらず廊下にも発展した。縁日は長く列になっている、保育室は狭いなど、子ども達のイメージに合わせて柔軟に対応する。年長であれば行動範囲も広く、店が離れても全体を把握できる。
- ・友達とのかかわりも考慮して、店の配置は保育者が意図する時もある。
- ・文字や数・記号については、理解に個人差がある。一人一人に合わせて保育者が手助けし、表現できた喜びにつながるようにする。

【かかわりの力】

【かかわりの力】

事例13	0歳児（6か月頃～9か月頃）	7か月「せんせい もっとして」
事例14	0歳児（9か月頃～12か月頃）	11か月「いないいない ばあ」
事例15	1歳児Ⅰ期（4月～8月）	8月「ぱくぱくもぐもぐ」
事例16	1歳児Ⅱ期（9月～3月）	1月「これ よんで！」
事例17	2歳児Ⅰ期（4月～8月）	6月「〇〇ちゃんも！！」
事例18	2歳児Ⅱ期（9月～12月）	12月「みんなでハッピーバースデー♪」
事例19	3歳児新入児Ⅰ期（4月～5月）	5月「ありさん ちょんちょん！」
事例20	3歳児Ⅴ期（1月～3月）	2月「わたしもしたいな…」
事例21	4歳児Ⅰ期（4月～5月）	5月「つかまえたのに怒られた…」
事例22	4歳児Ⅳ期（11月～12月）	1月「私はお当番さん！」
事例23	5歳児Ⅱ期（6月～8月）	6月「みんなで見つけよう！」
事例24	5歳児Ⅲ期（9月～10月）	10月「ぼく 〇〇チームがいい！」

【かかわりの力】

0歳児 7か月

＜生きる力の基礎＞

かかわりの力

協 同

信 頼

規 範

事例13

「せんせい もっとして」

【経験させたい内容】

〔0歳児 おおむね6か月から1歳3か月未満〕

保育者の語りかけや働きかけに、声を出したり答えようとしたりする。

〔0歳児（6か月頃～9か月頃）〕

名前を呼ばれたら応じようとしたり、知っている人に抱いてもらおうとしたりする。

【活動のねらい・内容】

- ◎大好きな保育者とのかかわりを求め、安心して触れ合い遊びを楽しむ。
- 担当の保育者に抱いてもらったり触れ合ってもらったりすることを喜ぶ。
- 担当の保育者との触れ合い遊びを心地よいと感じ、単純な遊びを繰り返し楽しむ。
- 名前を呼ばれると、声のする方を目で見て応じようとする。
- 声を出して担当の保育者とのかかわりを求める。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・「人見知り」が特徴であるこの時期は、特定の大人との間で愛着関係が結ばれることが重要であり、「触れ合い遊び」は信頼する担当の保育者に守られている実感を得ることができる。
- ・担当の保育者との心地よいかかわりの中で、自ら後追いをしたり目で追ったりするなど、大好きな保育者とのかかわりを求めようとする。
- ・個別に触れ合うことで、心地よい時はほほえんだり、不快な時は泣いて要求を表したりするなど、担当の保育者に対して自分の感情を十分に表現できる。
- ・繰り返しのある遊びに期待したり喜んだりする。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

触れ合って遊ぼう

① わらべ歌遊び



♪ちーちーこい
こい とまれ
とまらぬちっ
はとんでけー♪



② こっち こっち遊び



だっこして～

③ たかい たかい遊び



たかい
たか～い

- ・保育者は、表情豊かに、子どもの期待に応える言葉や動きを工夫する。
- ・「たかいたかい」は子どもの様子に気を付けながら、ゆっくり視線を合わせて抱き上げる。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
担当保育者とのかかわりが深まり、保育者を探したり求めたりするようになってきた。保育者と目が合うと自分からほほえんだり、近づいてきたりするようになる。	
【場面① わらべ歌遊び】 ※環境設定① 保育者：A児を自分の膝にのせ、両手首を持ち「♪ちーちーこいこい〜♪」と歌いながら両手を軽くトントンと合わせる。 A 児：保育者に身をゆだね両手をトントン合わせる。 保育者：「♪〜とんでけ♪」とA児の両手を上へあげる。 A 児：にっこりほほえむ。 保育者：「おもしろかったね。もう一回ね」と遊びを繰り返す。 A 児：トントンと手を合わせるところまでは自分の手をじっと見ている。「♪〜とんでけ♪」と両手をあげたところで声をあげて笑う。 保育者：「おもしろいね〜。もう1回しようね〜」と繰り返す。 A 児：保育者が歌い始めた時からにっこり笑って「♪〜とんでけ♪」で大きい声をあげて笑い、足をバタバタと動かす。 保育者：「楽しいね」とA児の顔を見て笑いかける。 A 児：保育者を見てにこにこ笑い、足をバタバタと動かす。 【場面② こっちこっち遊び から たかいたかい遊び】 ※環境設定②・③ 保育者：「Aちゃんおいで」とA児を見ながら床をはう。 A 児：保育者を見た後、‘ずりばい’で保育者の後を追う。 保育者：A児の前に座り「Aちゃんおいで」と手を広げる。 A 児：動きを止め、保育者の方を見る。さらに‘ずりばい’をして保育者の前まで来て、保育者の膝に両手をおき上体を起こそうとする。 保育者：「Aちゃん‘ハイハイ’上手ね」と抱きかかえ、対面姿勢で膝にのせながらA児の頬と自分の頬を近づける。自分の目とA児の目の高さを合わせる。 A 児：保育者を見て足を動かし、「えー」と声を出して笑う。 保育者：「Aちゃん。たかい、たか〜い、ばっ」と目線の高さを合わせたまま上へゆっくり抱き上げる。 A 児：保育者を見て声を出して笑う。繰り返すたびに足をバタバタさせる。	・大好きな保育者に体をゆだね、歌に合わせて体を揺らしたり、リズムの心地よさを感じたりしながら触れ合い遊びを楽しんでいる。安心して体をあずけている姿から、担当保育者への信頼が感じられる。 ・一度経験した遊びに興味をもち、保育者が握る自分の手の動きを目で追っている。繰り返し遊ぶ中で、保育者の次の行動への期待が生まれる。 ・「おもしろいね。もう一回しようね」と楽しい気持ちを受け止めてもらい、保育者と繰り返し遊ぶ楽しさを、笑い声や体をバタバタすることで表出している。 ・A児と保育者との間で「一緒に遊ぶの楽しいね」という気持ちが共有されている。さらに体をバタバタすることで「もっと遊びたい」という要求を伝えている（表現している）。 ・大好きな保育者を目で追いながら、自分から保育者のところへ近づいていこうとしている。 ・保育者が「おいで」と求めてくれている意味を理解し、自分から保育者のそばにいきたい、抱っこしてほしいという気持ちをもって行動している。 ・保育者と頬を合わせたり、目を合わせたりする行為を心地よく感じ、その嬉しさを笑顔や発語で表現している。 ・保育者への信頼から、「たかいたかい遊び」にも不安なく体をあずけ、期待や要求に応じてくれる大好きな保育者との触れ合い遊びを繰り返し楽しむ。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・いわゆる「8か月不安」の時期に当たり、人見知りや後追いをする時期であることから、子どもが不安を表した時は、ゆったりと抱きしめるなどして安心できるようにする。愛着の形成を示す発達の大切な一過程であることを理解し、特にこの時期の乳児が在籍するクラスでは、不必要な人の出入りを避けたり、担当保育者ができるだけ離れず安心感を与えるかかわりを大切にしたりするように心がける。 ・担当保育者とのゆったりとしたかかわりを大切に、子どもの視野に入る保育者の位置や目線を合わせてのかかわり方などを意識する。 ・自分の期待や要求に応じてくれる保育者とのかかわりが安心感につながるので、体を触れ合っている遊びや心地よいリズムのわらべ歌遊びなどを取り入れていく。	

【かかわりの力】

0 歳児 1 1 か月

＜生きる力の基礎＞

かかわりの力

協 同

信 頼

規 範

事例 1 4

「いないいない ばあ」

【経験させたい内容】

〔0 歳児 おおむね 6 か月から 1 歳 3 か月未満〕

保育者の語りかけや働きかけに、声を出したり答えようとしたりする。

〔0 歳児（9 か月頃～1 2 か月頃）〕

保育者のしていることに興味を示し、自分もしようとする。

【活動のねらい・内容】

◎ 大好きな保育者とのかかわりを喜び、安心して過ごす。

◎ 保育者と一緒に隠れ遊びの楽しさを感じる。

○ 保育者の語りかけを喜び、声を出したり答えようとしたりする。

○ 自分の思いを喃語や表情、体全体で表出し、保育者に受け止めてもらうことを喜ぶ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・ 「いないいないばあ」遊びは、他者との応答性のある遊びで、保育者との楽しいやりとりを生み出すことができる。
- ・ ものを媒介にしながら楽しくかかわることで、大好きな保育者への信頼感を育むことができる。
- ・ 隠れたものがまた現れることへの期待感をもち、相手に繰り返し要求して楽しむことができる。
- ・ わらべ歌遊びに合わせて遊ぶことで、リズムの心地よさを感じ、指差しや喃語、体全体で保育者に喜びを伝えるなどの姿へと広がる。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

先生と一緒に いないいないばあ～

① いないいないばあ人形



② わらべ歌 ♪「かくかく」



- ◆ 保育者が常にそばにすることで、保育者に認められながら安全に、安心して遊べるようにする。
- ◆ 子どもと目を合わせながら、楽しい表情や仕草を見せたり、子どもの気持ちを読みとりながら応答したりする。

③ いないいないばあの窓



④ いないいないばあの扉



⑤ いないいないばあの壁



⑥ 先生とばあ～



- ・ 様々な場所やものを使って「いないいないばあ」遊びのバージョンを工夫して楽しむ。
- ・ 心地よいリズムやタイミングをとり、子どもの様子や要求などに合わせながら、何度も繰り返して遊ぶ。
- ・ わらべ歌などを取り入れながら、様々な触れ合い遊びを楽しむ。
- ・ 保育者が大きな人的環境になることから、表情や声を変化させるなどの楽しいかかわり方を工夫する。

⑦ いないいないばあのトンネル



【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① いないないないばあ人形】※環境設定① 保育者：「かくかくかくれんぼ・・・」とわらべ歌を歌いながら人形を隠し、「ばあ！」と人形を出す。 A 児：人形を見て笑う。しばらく人形を見ているが、保育者の顔を覗き込んで「あーあー」と言う。 保育者：「楽しいね～もう一度しようね。かくかくかくれんぼ・・・ばあ！」と、少し驚いたような声色を使って人形を動かして見せる。 A 児：今度は声を出して笑い、自分から人形を触りに来る。人形を触りながら保育者を見て笑う。 保育者：「またまた出てきたね。楽しいね～もう一度しようね。かくかくかくれんぼ～いないないないばあ！」と、わらべ歌に合わせて人形を隠して、さらに勢よく「ばあ！」で出す。 A 児：大声を出して笑い、その後に保育者の顔を触わりにくる。 【場面② 先生とばあ～】※環境設定② 保育者：「いないないないばあ人形」を離し、手で顔を覆い「今度は先生だよ。いないないないばあ～」と驚いたような表情の顔を見せる。 A 児：声を出して体を揺らしながら笑う。「あーあー」保育者の顔を覗き込み、保育者の顔を触る。 保育者：ポケットからタオルを出し、保育者の顔に掛ける。「いないないないばあ～」とタオルをとって、今度はおおげさににっこりした顔を出す。 A 児：さらに大きな声を出して笑う。 保育者：保育者の顔にタオルをかけて「いないないない～」と待つ。 A 児：「あー」「あー」と保育者のタオルを外そうとするが上手くはずせず、保育者と一緒に外す。保育者の顔を見てにっこりする。	・保育者がする「いないないないばあ」遊びに興味をもち、安心して保育者とのかかわりを楽しんでいる。 ・「ばあ～」と出てきた人形に興味をもち、人形を動かしているのが保育者だと理解すると、保育者に対してもう一度してほしい気持ちを「あーあー」という言葉で表している。 ・保育者が「楽しいね～もう一度しようね」と自分の思いを受け止めて繰り返してくれたことが嬉しく、声をあげて楽しい気持ちを表現している。人形を触りながら保育者を見て笑う様子から、A児と保育者との間で「楽しいね」という気持ちや雰囲気が共有されていることが分かる。 ・保育者が人形の出し方に変化をつけるなどして工夫することで、さらに楽しくなり、もっと保育者にかかわってほしい気持ちが高まる。また、人形だけでなく保育者の顔を触りにくる仕草から、楽しく遊んでくれる「先生」が大好きという思いが伝わってくる。 ・相手の状況に応じて表情や動きを変えてもらえる「先生」との「いないないないばあ～」は、体を揺らして笑う姿からも、保育者との応答性のあるやりとりを楽しんでいることが分かる。保育者の顔を触って「楽しいね。もっともっと」という思いを表現している。 ・「保育者は楽しいことをしてくれる存在の人」ということを感じ、タオルで顔を隠すという新しい遊びにも、特に驚く様子もなく興味や期待をもっがかかわる。 ・タオルをはずして保育者の顔を見ようとする行為から「見えていないものでも、そこにあることが分かる」という理解が育っていることが分かる。タオルを外すと保育者の顔が現れたことで「やっぱりいた」という確認とともに、大好きな先生の顔が現れたことへの喜びが感じられる。 ・「いないないないばあ」の楽しみ方が分かり、「いないないない～」の後に「あー」「あー」と声をあげ、本児なりに「ばあ～」と応えようとしている。

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・「いないないないばあ」遊びは、この時期の発達に合う子どもが好む遊びなので、保育者との遊びだけでなく人形や窓など、様々な場面や環境を使って繰り返し楽しいかかわりができるように設定する。
- ・保育者自身の表現が大切な人的環境となり、遊びの楽しさを大きく左右するので、わらべ歌にのせて楽しんだり、リズムミカルに表現したりなど、保育者は常に豊かな表情を大切にしたい楽しいかかわり方を工夫する。
- ・子どもの仕草や指差しの真似をしたり、喃語を言葉に表して共感したりしながら、言葉の獲得やコミュニケーションを促すようにする。
- ・保育者は、様々な遊びや子どもの様子に応答するなどして積極的にかかわりを持ち、楽しいことを保育者と共感したいと感じる子どもの気持ちを育んでいく。

【かかわりの力】

1 歳児 8 月

＜生きる力の基礎＞

かかわりの力

協 同

信 頼

規 範

事例 1 5

「ぱくぱくもぐもぐ」

【経験させたい内容】

〔1 歳 3 か月から 2 歳未満〕

表情や身振りなどで自分の気持ちを表したり、簡単な言葉を使ったりする。

〔1 歳児 I 期（4 月～8 月）〕

保育者に甘えたり、わがまを言ったりするなど、保育者に受け止めてもらうことで安心して思いを出す。

【活動のねらい・内容】

- ◎担当の保育者やいつも生活している友達と一緒に安心して食べる。
- ◎保育者の見守りの中、自分で食べようとする。
- 目の前にいる保育者や友達の様子に関心を示しながら、一緒に食事をするを楽しむ。
- 表情や仕草、言葉で自分の思いや要求を保育者に伝えようとする。
- スプーンや手づかみで好きなものから意欲的に食べようとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・「食べること」は生きる意欲を高める重要な活動であり、大好きな保育者との関係の中での「給食」の時間は、安心して自分の感情を出しやすい場面である。
- ・「担当保育者と自分」「担当保育者と周りの友達と自分」という少人数のかかわりの中、食べることを通して楽しい雰囲気や会話が生まれやすい。
- ・食事の仕方やスプーンの持ち方、手拭き、あいさつなど様々な食事の場面において、その子のペースに合わせたかかわりができる。

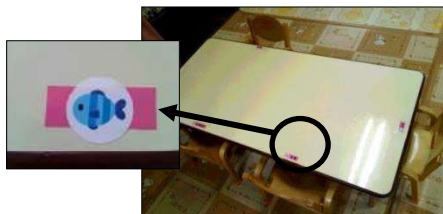
【環境設定】＜場所：保育室＞/ 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

給食を食べよう

＜準備物＞

- ・机（個人のマーク）
- ・イス

① 個人のマークを貼る



- ◆食事の席はいつも一定にし、自分の居場所として安心できる環境を整える。
- ◆担当の保育者も同じテーブルでおいしそうに食べながら「おいしいね～」「もぐもぐだね」「○○ちゃんも一緒だね」など、子どもの様子に合わせた楽しい言葉がけをしながら、楽しく食べる雰囲気をつくっていく。
- ◆同じテーブルにいる保育者や友達と一緒に、安心感をもって食べたりかかわったりできるように、保育者自身がゆったりとしたかかわりを心がける。また、表情や身振り、簡単な言葉などで伝えようとする子どもの姿を優しく受け止めながら、食事が楽しい時間になるよう配慮する。
- ◆手がベチャベチャした時など、汚れを感じる場面では「きれいきれいしようね～」とその都度声をかけながら優しく拭き、気持ちよく食べる環境をつくる。

A 児 保育者



C 児

B 児

D 児

② 保育者と一緒に食べる

- ・テーブルには個人のマークシールを貼り、いつも同じ場所で落ち着いて食べられるようにする。
- ・同じテーブルの友達は、おおよそ同じ生活リズムの子を寄せるなど、ゆったりと食べられる環境を整える。

- ・担当の保育者が同じテーブルに座り、一人一人に丁寧にかかわり、安心して食べられるようにする。
- ・保育者は子ども一人一人の顔がよく見える場所に座り、楽しく食べる雰囲気づくりを心がける。また、自分なりに食べようと頑張っている姿を認めるとともに、食べにくそうにしている場面ではさりげなく手助けをする。



【保育実践】

子どもの姿	読みとり
A児（低月齢児） B児（高月齢児） C児（低月齢児） 【場面：いっぱい食べられたね】※環境設定② A児・B児・C児・D児と保育者が1つのテーブルを囲んで食事をしている。 A児：スプーンを口へ運ぶ際、口元でスプーンをひっくり返し食べるためこぼれてしまう。特に表情はない。 保育者：「こぼれちゃったね。このまま口に持っていきとこぼれないよ。ほら!」と、A児のスプーンにそっと手を添えながら口に運ぶ。 「もぐもぐ かみかみ、おいしいね」 A児：再び自分でスプーンを口に運び、今度はうまく口に入る。保育者を見てにっこりとする。 保育者：「わあ、たくさんお口に入ったね。すごいね。おいしいね～」と笑顔で答える。 A児：保育者を見て笑顔になる。 B児：からっぽになった皿を保育者に見せながら「見て、ぴっぴか」と大きな声で知らせる。 保育者：「ホントや。きれいに食べられたね。すごいね。こっちの野菜も食べられるかな～?」 B児：「食べられるで、見て」と残っている野菜をスプーンですくい、また自分から食べて見せる。 その様子を見て… C児：「んーんー」とまだおかずが少し残っている皿を保育者に見せようとする。 保育者：「Cちゃんもいっぱい食べられたね」 C児：笑顔を見せる。 保育者：「ちょっと残ってるね、全部食べちゃおうか」と言いながら少し残ったおかずを集め、スプーンにのせてC児の口へ運ぶ。 C児：眉間にしわを寄せて保育者の手を押しのける。 保育者：「そっか。先生が持ったら嫌だったのね。自分で食べる?」 C児：深くうなずき、スプーンに乗ったおかずを自分で口に運び、笑顔でからっぽになった皿を見せる。 保育者：「わあ、きれいに食べられたね。自分で全部食べられたね」と笑顔で答える。	・自分の場所、自分の先生、いつもの友達という「いつもと同じ環境」があることで安心して食事をする事ができる。 ・うまく口に入らなかったものの、その表情からは特に感情は感じられない。大好きな保育者が、優しく手を添えたことで、今度はうまく口に入った。「もぐもぐ かみかみおいしいね」とA児の思いを口にして共感したことで嬉しい気持ちが芽生え、また自分でやってみようという意欲につながった。 ・自分で口に運べたことを、保育者が笑顔で褒めてくれたことで、ますます嬉しい気持ちが高まった。保育者を見て笑顔になる様子から、保育者に認めてもらえた嬉しさが感じられる。 ・B児は、からっぽの皿を見せることで全部食べたことを保育者に伝え、自分に関心を向けてもらおうとしている。 ・B児もA児と同じように保育者に褒められたことでさらに嬉しくなり、「もっと食べられるよ、見て見て!」という意欲が生まれ、保育者が促した野菜も自分から食べることができた。 ・同じテーブルのA児・B児と保育者とのやりとりを見ていたC児も、保育者に自分のことを見てほしい気持ちが生まれ、同じように褒めてもらえたことで満足する。 ・C児は「みんな頑張って食べられてすごいね」という同じテーブルでの雰囲気の中、保育者に食べさせてもらうのではなく、「自分で食べたい」という気持ちが生まれ、保育者の手を押しのけた。 ・保育者が「自分で食べたい」というC児の思いを声にし、C児の思いに任せたことで、より「自分で食べた。すごいでしょう」という自信が生まれ、笑顔で皿を見せるという行動になった。

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・食事の際の保育者や友達の席を定位置にし、担当の保育者がゆったりとかかわることで、一人一人にとっての安心できる居場所をつくる。
- ・給食の場面においても、子ども一人一人が伝えようとしている思い（表情や仕草など）を受け止め、子どもが感じているであろう思いを言葉にしながら、相手に伝わる嬉しさを味わえるようにする。
- ・同じテーブルの保育者や友達を真似をする姿を受け止め、「〇〇ちゃんと一緒だね」「一緒に食べるとおいしいね」など、安心できる人と一緒に食べる楽しさを伝えていく。
- ・一人一人の状態や好み、食事の仕方（食べ方、姿勢など）を把握し、それぞれに合った援助をすることで安心して食べられるようにする。

【かかわりの力】

1 歳児 1 月

＜生きる力の基礎＞

かかわりの力

協 同

信 頼

規 範

事例 16

「これ よんで！」

【経験させたい内容】

〔1 歳 3 か月から 2 歳未満〕

表情や身振りなどで自分の気持ちを表したり、簡単な言葉を使ったりする。

〔1 歳児 II 期（9 月～3 月）〕

保育者と簡単な言葉や動作のやりとりを楽しむ。

【活動のねらい・内容】

- ◎保育者や友達と簡単な言葉や動作でのやりとりを楽しむ。
- ◎ゆったりとした雰囲気の中で、保育者に絵本を読んでもらう心地よさを感じる。
- 気に入った絵本を保育者に読んでもらおうとする。
- 絵本の中の絵に興味をもち、指差しや保育者との簡単なやりとりを楽しむ。
- 保育者の語りかけに、指差ししたり自分なりに答えたりしようとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・絵本の読み聞かせを通じて、保育者との 1 対 1（または少人数）でのゆったりしたかかわりやコミュニケーションが期待できる。
- ・保育者との簡単なやりとりを通じて、真似をしたり答えたり、また共感してもらえたりなど、気持ちを通わせる心地よさを感じることができる。
- ・周囲の人や動物、ものなど様々な物事に興味や関心が高まってきている時期であり、絵本やカードを通して、保育者に興味のあることや知っていることへの気づきや思いを表現できる。

【環境設定】＜場所：保育室＞/ 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

絵本の読み聞かせ

＜準備物＞

- ・絵本（乳児向け）
- ・絵本ラック（布 透明シート）
- ・ペープサート ・遊び歌

- ◆発達の時期や季節に適した絵本を準備する。
- ◆部屋に絵本コーナーとしての場所を決めておき、自分で好きな時に見られるようにしておく。
- ◆表情や身振り、簡単な言葉で伝えようとする子どもの姿を優しく受け止め、安心感・満足感をもち、やりとりを楽しめるようにかかわっていく。
- ◆思いをうまく表現できない子どもの気持ちや言葉を代弁しながら、自分から言葉や表情、動作などで伝えようとする気持ちを育てる。

① 乳児向けの絵本



- ・絵や写真が大きく、色のはっきりしているもの。
- ・繰り返しやリズム感のあるもの。
- ・表現が簡単なもの。

② 絵本コーナー



③ うちわペープサート ♪やさいのうた



④ 大好きな先生に読んでもらおう



保育者は、子どもを膝に乗せるなどして、肌を触れ合わせながらゆったりとかかわる。

季節や子どもの興味、保育者が知らせたい事物に応じた絵本を用意し、表紙が見えるようにレイアウトするなどして、いつでも見たり触れたりできるようにしておく。

子どもが気に入った絵本やお話のペープサート、歌遊びなどを準備し、歌に合わせて動かしたり、保育者と一緒にお話遊びをしたりして楽しむ。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
A児（高月齢児）：簡単な言葉（2～3 語文）を使い、自分の思いや要求を伝えようとする。 B児（低月齢児）：発語が増えてきて言葉は理解しているが、まだ喃語程度である。 【場面：これ よんで】※環境設定②・④ B 児：ウォールポケットから絵本『くだものさん』を取り出し、保育者のところへ持っていく。 保育者：「これ読んでほしいの？」と笑顔で絵本を手にする。 B 児：うなずいて保育者の膝に座る。 A 児：保育者がB児に絵本を読んでいるのをしばらく見て、自分も絵本を取り出し保育者のところへ行く。 A 児：「これ読んで」と保育者の空いている片方の膝に座る。 保育者：「Aちゃんはこれを読んでほしいのね?じゃあBちゃんの絵本を読んでから読もうね」と2人を膝にのせたままB児の絵本の続きを読む。 B 児：絵本を読み終えんとすぐに立ち上がり、絵本コーナーから絵本『てぶくろ』を手取る。少し離れたところからA児が読んでもらっている様子を見ている。 保育者：A児の絵本を読み終えた頃、絵本を持ったまま自分の方を見ているB児に「Bちゃん、今度はその絵本を読むの?おいで」と誘い、再びA児・B児を膝に座らせてB児が持っていた絵本を読む。 A 児：絵本に出てくる動物を指差して「〇〇さん」と名前を呼んだり、「〇〇さんやある」などと話したりする。 B 児：A児と同じ場所を指差し喃語を発する。 保育者：「そうだね。〇〇だね。〇〇さんは手袋に入れるかな?」など、途中A児B児が発する言葉や指差しに答えながら読み進める。絵本を読み終わり2人の顔を見ながら「今日、寒くなかった?手袋してきた?」と尋ねる。 A 児：「してきてん（してきてない）」と笑って答える。 B 児：にっこりと笑う（言葉はない）。 保育者の膝から立ち上がり絵本コーナーにある別の絵本を手にとると、近くに置いてあるイスに座り1人で絵本を開く。 保育者：B児の方を向いて「Bちゃんはもっと絵本読むのね。そこだったらたくさん読めるね」と声をかける。 B 児：にっこりと笑って保育者を見る。 A 児：B児に目をやり、保育者の膝から離れ、絵本コーナーへ移動する。絵本を手に取り椅子に座って開く。 そのまましばらく別々に絵本を見ている。	
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・同じ場所で絵本を読み聞かせする場合でも、一人一人の発達や性格を考慮して、それぞれに合った言葉がけをしたり、それぞれに自分を見てもらえているという喜びや安心感がもてるように、保育者と子どもの1対1のかかわり方を大切にしたりする。 ・同じ場所にいる友達の言葉や遊びに関心を示したり真似をしたりする場面を大切にし、一緒にいることが楽しくなるような言葉がけや仲立ちをするなどして、気持ちを共有できる場や雰囲気を大切にしていける。 ・保育者に十分にかかわってもらえたことで、安心して自分の遊びを見つけ自分で行動していく姿を大切にする。また、その場合は必要以上にかかわったり言葉がけをしたりせずに見守っていくように心がける。	

- ・絵本がある場所が分かっている、自分の気に入った絵本を自分で選んで保育者に読んでもらおうとする。
- ・保育者の膝に自然に座る姿から、保育者に対して親しみをもっていることが分かる。
- ・A児はB児が保育者に読んでもらっているのを見て、自分も読んでほしい気持ちをもつ。先にB児が保育者の膝に座っていても特に気にならず、空いている片膝に自然に座る姿から、A児は保育者だけでなくB児（友達）に対しても日頃から親しみを感じていることが分かる。
- ・B児はもっと読んでほしい気持ちから別の本を取りに行くものの、すでにA児が読んでもらっているの、しばらく様子を見ている。B児はA児よりは友達がいる場所に自分からは入りづらいと思われる。しかし、保育者が声をかけてくれたことで、安心して保育者の膝に座ることができた。
- ・保育者が絵本を媒介しながら2人に言葉がけをしたことで、A児は自分で、B児はA児の真似をしながら、それぞれに自分の言葉や行動で保育者とコミュニケーションをとろうとする。絵本の内容を媒介にしたやりとりをしながら、3人に楽しい雰囲気が流れる。
- ・B児は保育者に読んでもらって満足したことで、今度は絵本コーナーで好きな絵本を見ようと自分から動くことができた。保育者がその気持ちを察して、B児の行動を認め声をかけたことで、保護者に見てもらえる安心感をもち、落ち着いて絵本を楽しむことができた。
- ・A児も保育者がB児に声をかけたことでB児の姿に気づき、同じように自分から絵本コーナー行ったり。
- ・保育者とのゆったりとした時間が、その後の自分で遊び出す姿へとつながった。

事例17

「〇〇ちゃんも！！」

【経験させたい内容】

〔おおむね2歳から3歳〕

一人遊びを楽しみながら、保育者が仲立ちとなり、友達に関心をもって遊ぶ。

〔2歳児 I期（4月～8月）〕

新しい生活の場や保育者に慣れ、友達のしていることに関心を持ち、同じ場で遊んだり真似をしたりすることを喜ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎身近な大人の真似や経験したことを再現し、見立て遊びやつもり遊びを楽しむ。
- 生活で経験したことを再現する。
- 保育者友達の言葉や仕草、動作に興味を持ち、真似をしてみる。
- 保育者の仲立ちにより、友達の存在を感じる。
- 自分の思いや感じたことを言葉や仕草で伝える。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・自分以外の他者を意識し始める時期で、大人の真似や経験したことを再現して遊ぶことを楽しむ。
- ・つくったものや見立てたものを介して、保育者や周りの友達と簡単なやりとりを楽しめる。
- ・同じ場にいる友達と一緒に、同じ言葉や言葉のリズムを真似したり繰り返したりして共鳴することを楽しむ。
- ・保育者とのやりとりの中で自分なりのイメージが膨らみ、ままごと道具や遊具を使って「つもり」遊びを楽しむ。

【環境設定】＜場所：園庭＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

ままごとごっこ

＜準備物＞

- ・シャベル ・コップ ・お皿
- ・スプーン ・型抜き ・机
- ・イス ・身近な草花 など

- ◆扱いやすいように砂を掘り起こしておいたり、シャベルなどをあらかじめ設定しておいたりなど、遊びのきっかけをつくっておく。
- ◆道具や玩具は、一人一人が使えるよう十分な数を用意する。
- ◆保育者や友達を近くに感じられる距離感を大切にする。
- ◆保育者が一緒に参加し遊びの仲間となる。子どもが遊びの中で思い浮かべるイメージを広げたり、補ったりする言葉がけをして、遊びを楽しくしていく。

① 遊び始めの環境



- ・それぞれに遊んでいる途中の様子に設定し、遊び出しやすいようにする。
- ・机などを複数設定したり、皿やカップなどを多めに用意したりして、用具に興味をもった子同士が自然に集まれるようにする。

② 見立てられるもの



- ・前日の遊び環境を再現しておく。
- ・このボタンがピンポン遊びのきっかけとなった。応答があることで、やりとりが生まれる。



③ みんなで囲める場所



- ・人的環境としての保育者。
- ・お互いの顔が見えるように、机を囲んで椅子を配置し、保育者も輪の中に入って楽しいやりとりや雰囲気づくりをする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
前日、B児は保育者と数名の友達と一緒に、「ボタン」を「呼びだしのもの」に見立てて“ピンポーン”遊びを楽しんだり、また砂でつくったごちそうをお子様ランチに見立てたりしながら、保育者とのやりとりを楽しんでいた。 【場面 ピンポ〜ン ○○ください】※環境設定② A 児：保育者と一緒にプリンづくり（型抜き）をしている。 B 児：近くで電車遊びをしていたが、A児らの様子に気がきやってくる。 B 児：「ピンポーン！すませーん（すみません）！」 （机の上にあるボタンを押す） 保育者：「いらっしやいませ。ご注文は何にしますか？」 B 児：「おこさまランチ、ください（ください）」 保育者：「おこさまランチですね…はい、どうぞ召し上がれ」と皿に型抜きした砂を盛って渡す。 B 児：ニコニコしながら、食べる真似をする。 A 児：時々カップに砂を入れたり出したりしながら、その様子をじっと見ている。 B 児：「ピンポーン！もっかいおこさまランチください！」 保育者：「はいはい、お待ちください」とつくり始める。 A 児：「Aちゃんも！」と持っていたカップとシャベルを置いて、B児の隣の机に座りお客さんになる。 A 児：「ピンポーン！すまちゃん（すみません）」 （机の上にあるボタンを押す） 保育者：「はい。Aちゃんは何が食べたいですか？」 A 児：「おこさまランチ！」と大きな声で言う。 B 児：「ピンポーン！Bちゃんも！おこさまランチ！」とさらに大きな声で言う。 保育者：「AちゃんもBちゃんもおこさまランチですね。忙しくなってきましたね。しばらくお待ちくださ〜い」と2人に向かって言う。 2人で顔を見合わせ、ニコリする。保育者から受け取ったごちそうを、それぞれに食べる真似をする。	

- ・ B児は、保育者がままごとの場所にいるのを見て昨日楽しんでいた遊びを思い出し、ボタンを「ピンポーン（呼びだしのもの）」に見立てて自分からかかわろうとしている。
- ・ B児は、お店屋さんの口調で遊び始めた保育者のやりとりに応えながら、お店にいったお客さんのつもりになって遊ぶ楽しさを感じている。
- ・ A児は、自分の遊びを続けながらも、保育者とB児のやりとりに関心をもっている。
- ・ B児が保育者との2回目のやりとりを終えたところで、自分なりに遊び方を理解し、ボタンを「ピンポーン」に見立ててB児の真似を始める。
- ・ 保育者がB児の時と同じようにお店屋さんになってくれたことが嬉しく、A児と同じように「おこさまランチ」と自信をもって答える。
- ・ 「ピンポーン」「おこさまランチ」と同じ言葉や動作と一緒に繰り返す友達がいることがより遊びを楽しめるものにしており、2人の直接的な言葉のやりとりはないものの、大好きな保育者を仲立ちとしながら、同じ遊びや楽しさを共有している。

必要な援助・環境の構成などのポイント

- ・ 保育者は、一人一人の興味や楽しんでいることに合わせ、役のイメージでなりきったかわり方をしたり、よりイメージが豊かになるように遊びを広げたりしながら、ごっこ遊びの仲間になって楽しむようにする。
- ・ 見立てや生活の再現遊びを盛んにする時期であり、遊びを通して言葉を獲得したり、保育者や友達の真似をしながら互いがコミュニケーションをとる場面を大切にします。
- ・ 生活の中でよく使うものやイメージが湧きやすいような道具を用意する。
- ・ 一人一人の遊びを大切にしながらも、友達のすることが自然に視界に入る環境を設定する。
- ・ 友達の持っているものや遊びに関心があっても、自分からは言葉や行動で表せないこともあるので、一人一人の表情や仕草からそれぞれの思いを汲みとり、保育者が友達との仲立ちとなって遊びをつなげていくようにする。
- ・ 友達に関心が広がる中で「同じことがしたい！」「同じものがほしい！」などの気持ちも高まってくるため、友達を真似て同じ遊びができるように、玩具や用具の数を多めに準備しておく。

【かかわりの力】

2歳児 12月

＜生きる力の基礎＞

かかわりの力

協 同

信 頼

規 範

事例18

「みんなでハッピーバースデー♪」

【経験させたい内容】

【おおむね2歳から3歳】

自分で表した気持ちや欲求を受け止めてもらうことを喜ぶ。

〔2歳児 Ⅱ期（9月～12月）〕

経験したことを再現して遊ぶことや見立てて遊ぶことを、保育者と一緒に楽しむ。

【活動のねらい・内容】

◎同じようなイメージの中で、保育者や気の合う友達と簡単な言葉のやりとりをしたり、見立て遊びを楽しんだりすることを楽しむ。

○身近な大人のすることや生活の中で経験したことの真似をしたり、言葉や動きで再現したりして遊ぶ。

○自分なりのイメージで再現遊びを楽しむ中で、保育者や気の合う（気になる）友達との簡単なやりとりを楽しむ。

○身近な素材や玩具を様々なものに見立てて遊ぶ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・家や家族をイメージした遊びは、様々な素材や玩具を何か別のものに見立てながら、日常生活を再現して遊びやすく、発想力や創造力を膨らませることができる遊びである。
- ・友達とのかかわりにおいて、同じようなイメージがもちやすく、またみんなと同じ行為をしたいという気持ちから保育者や友達とのやりとりが生まれやすい。
- ・身近な大人の真似をした生活や経験を再現した遊びは、言葉や仕草、動きなどを自然に楽しめる。

【環境設定】＜場所：保育室＞/ 活動名：□□□ / 教材：□□□ / ポイント：□□□□ / 環境への配慮：◆

ままごとごっこ

＜準備物＞

- ・ケーキ（ろうそく）
- ・お皿 ・コップ ・スプーン
- ・なべ ・フライパン
- ・食べ物の玩具 ・エプロン
- ・ジュース（色水入りペットボトル）
- ・スカートなどの衣装
- ・かばん ・赤ちゃん人形

① ままごとコーナー



- ・ままごとのコーナーが1つのお家に見立てられるように、棚などを利用して仕切るなどして、「お家」としての空間を大切に作る。
- ・身近な生活経験を再現したくなるような見慣れたもの（キッチン、テーブルなど）を置く。

- ◆じっくり遊べるようにコーナーを仕切ったり、数人が入れる大きさのお家を用意したりなど、かかわりが生まれやすい環境を準備する。
- ◆普段の生活を再現し、家庭にあるような用具を準備する。また、スカートやエプロン、バンダナなど、身に付けるものを用意し、より一層「○○のつもり」になりきれるようにする。
- ◆みんなが使える数を十分に用意する。
- ◆置いてある場所が分かるように、写真やイラストを貼っておく。
- ◆一人一人と保育者とのやりとりを大切にしながらも、同じ場にいる友達と同じ行為や言葉を楽しめるようなきっかけづくりをする。

② ダンボールの囲い（お家）



友達の存在を近くに感じることで、友達とのかかわりが生まれやすいように、2～3人でこっそりと入れる「お家」をつくる。

④ 赤ちゃん人形



お母さんをイメージしやすく、またお世話遊びを楽しむことができる「赤ちゃん人形」を用意する。

③ 材料・用具置き場



- ・遊びに必要な用具がいつも同じ場所にあり、取り出しやすくおいてあることで、安心して遊び出すことができるようにする。
- ・同じものを適当な数用意し、友達の真似をしたり、一緒のものを使ったりする嬉しさを感じられるようにする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
ごちそうをつくって友達や保育者に食べてもらうことや赤ちゃん人形の世話など、「〇〇ちゃんママ（パパ）」になって遊ぶことが盛んになってきている。特に「誕生会」は家庭や園でお祝いしてもらう経験から、楽しいイメージとして共有されていて、クラスの中で遊びの中に取り入れて遊ぶことが多い。	
【場面 みんなでハッピーバースデー】※環境設定① A児（ママ）はカバンを持って買い物へ。B児（ママ）・C児（パパ）は料理をして保育者にごちそうしたり、赤ちゃんの世話をしたりしている。保育者も同じコーナーにいてお家の人になる。 A 児：「ただいまー！」 保育者：「おかえりー。何買ってきたん？」 A 児：「えっと、絵本と、ジュースと、ケーキと…いっぱい！」とカバンの口を開けて保育者に見せながら言う。 保育者：「ほんと。いっぱい！ケーキも買ってきてくれたん？」 A 児：「うん。みんなで」とケーキを差し出す。 保育者：「みんなで食べていいの？」 A 児：「うん」 保育者：「Aちゃんありがとね。みんな！Aちゃんママがケーキ買ってきてくれたよ。」 A 児：「ケーキ買ってきたよ！」 B 児：「じゃあ、みんなでハッピーバースデーしよう！」 A 児：パッと笑顔になり、「しよう！」と言う。 保育者：「いいね！じゃあ、ごちそういっぱいいるね！」 C児も加わり、それぞれにごちそうや皿などを次々と並べて誕生会の用意をし始める。テーブルの上には様々な食べ物が山盛りに並べられている。 保育者：スプーンをロウソクに見立て、ケーキに立てる。 B 児：「みんな座って！♪ハッピーバースデー…♪」と歌いだす。 A児、C児、保育者も一緒に歌う。保育者がリードしながら「♪ハッピーバースデー ディア Cちゃん、Aちゃん、Bちゃん、先生～！ハッピーバースデーツューユー…せーの！ふー！」とロウソクの火（スプーン）を消す真似をする。3人も顔を近づけて息をふく。保育者が「おめでとう～！」と拍手をすると、同じく3人も笑顔で拍手をする。その後「いただきます！」「おいしいね！」と笑顔でごちそうを食べる真似をする。 保育者：「Aちゃんありがとう。またお願いね」 B・C児：A児の方を向いて「ありがとう！」という。 A 児：「また買ってくるわ！」とニコッと笑った。	・ママごと遊びに興味をもった3人が、ママごとコーナーでそれぞれになりたい人（ママやパパ）になったつもりで遊んでいる。保育者がA児に「おかえり」と声をかけたことで、B児とC児にとっても、みんなのお家としてのイメージが広がった。 ・保育者が「何を買ってきたの？」と尋ねてくれたが嬉しく、カバンにいっぱい詰め込んできたものを喜んで見せる。 ・今までの経験から、「ケーキ」は「みんなで食べる」という楽しいイメージがある。 ・保育者は、A児の「みんなで」という言葉を受けて、同じ場で遊ぶ子らが「みんな」を意識できるようにお家ごっこのイメージで声をかけた。また、保育者の言葉がけがきっかけになり、A児から友達に対して声をかける姿へとつながった。 ・B児は「ケーキ」から「ハッピーバースデー」にイメージを広げたようだ。この時期の子どもにとっても、「誕生会」は今までの家や園での経験からイメージの共有が図りやすく、また「ハッピーバースデー（誕生会）」はみんなが共通にワクワク感を膨らませるワードである。 ・保育者の「いっぱいいるね」という言葉を受けて、誕生会ごっこが3人の共通の遊びとなった。 ・B児の「みんな座って」という「みんな」は、お家にいる4人全てに向けた言葉ではあるが、声をかけているものの「みんな」を待っているわけではなく、自分のペースで歌い始める。 ・保育者の真似をしながらロウソクを消したり拍手をしたり、また、みんなで歌ったり食べる真似をしたりしながら楽しい雰囲気を共有して楽しんでいる。 ・保育者の「ありがとう」という言葉の真似をして、B児とC児もA児に「ありがとう」と言うことができた。A児も保育者だけでなく友達にも言ってもらえたことがより嬉しくなり、自分への自信にもつながった。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・見立て遊びやつもり遊びが十分に楽しめるように、生活を再現できるような素材や玩具を準備するとともに、保育者は、イメージが膨らむようなかわりや言葉がけをする。 ・「誕生会」など、子ども同士がイメージをもちやすい遊びや経験を積極的に遊びに取り入れるようにする。 ・一人一人の遊びや保育者との関係を大切にしながらも、遊びの様子によっては、保育者を仲介にして同じ場にいる友達とのかかわりが楽しくなるような誘いかけをする。 ・玩具の貸し借りや順番、交代などのトラブルが合った場合は、まずは「ほしかったよね」「嫌だったよね」とそれぞれの気持ちを受け止め、自分の思いを主張する大切さに気付かせるとともに、相手の思いについても知らせていくようにする。	

事例19

「ありさん ちょんちょん！」

【経験させたい内容】

〔3歳児〕

安心感をもって、伸び伸びと自分を表して行動する。

〔3歳児新入児 I期（4月～5月）〕

保育者との触れ合いを通して、不安や欲求を受け止めてもらいながら、安心して生活や遊びを楽しむ。

【活動のねらい・内容】

◎保育者と触れ合い、安心して遊ぶ。

○保育者のしていることに興味をもつ。

○保育者や近くにいる友達と同じ動きを真似るなどして安心して過ごす。

○ペープサートや指人形、お面などに興味をもち、自分なりに使ってみたり、保育者や友達と一緒に楽しんだりしようとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・お面やペープサートは自分と同一化して楽しめるよさがあり、特に新入時や進級時など不安がある時には、新しい保育者や友達とのかかわりを求めやすく親しみを感じるのに適している。
- ・“ちょんちょん”というリズムや動きが楽しく、またスキンシップをはかれるなど、触れ合い遊びを通して自然に保育者や友達とのかかわりを楽しむことができる。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

♪うた遊び♪ ‘おつかいありさん’
～ペープサートで遊ぼう～

◆登園した子が「楽しそう」「〇〇やってみたい」とそれぞれに好きな場所や遊びを見つけて遊びだせるような場所や環境を準備しておく。

＜準備物＞

ペープサート お面 クレパス ドールハウス
アリさんの道 ダンボールの囲い(お家) ごちそう

① 先生とちょんちょん♪



- ・ものを媒介にすることで、保育者との触れ合いを、より楽しめるようにする。
- ・どの子もが使えるように、ペープサートの数を多めに準備する。

③ お家であそぼう

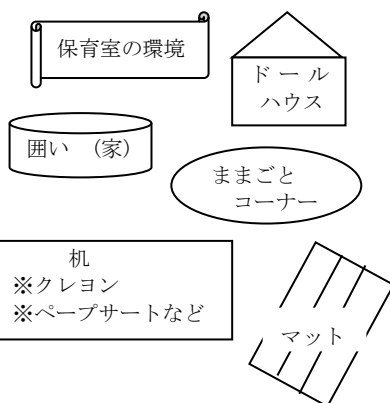


ドールハウスを置き、ペープサートを使って出入りしたり、保育者と一緒にやりとり遊びをしたりなど、それぞれに興味をもってかかわれるようにする。

② 色をぬりぬり



色を塗ったり、変身したりして遊べるペープサートやお面を準備し、自分のものをつくれるようにする。



④ お家に行こう



- ・アリさんに変身して、体を使って遊べるように、アリさんの道や家を準備する。
- ・保育者が同じアリさんに変身しながら、楽しい遊び方やつもりになってのやりとりなどを促す。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① アリさんちょんちょん！】 ※環境設定① 母親との朝の「さよなら」で泣いていたA児。 しばらくして泣き止んだものの、特に遊び出す様子はない。 保育者が近くで友達と“ちょんちょん”とペープサートを 合わせ遊んでいる姿をじっと見ている。しばらくして、保 育者がいるペープサートの場にやってくる。 アリのペープサートを持った保育者に「Aちゃんアリさん、 おはよ！」と話しかけられるとニコッと笑い、置いてあつ たアリのペープサートを手に取り保育者に見せる。保育者 が「これはAちゃんアリかな？」と尋ねるとA児は「こっ ちはAちゃん！こっち（保育者のもっているペープサート） がママ」と言いながら笑っている。 保育者が「おつかいありさん」を歌い始めるとA児も一緒 に口ずさみながらペープサートを揺らす。「あっちいってち ょんちょん」のフレーズに合わせてA児から保育者のペー プサートに合わせ「♪ちょんちょん～」と繰り返す。うまく 合わせられるとニコッと笑う。 【場面② アリさん はやく入って！】 A児は、保育者との「ちょんちょん遊び」を終えると、近 くにあったアリのお面をかぶり、辺りをキョロキョロと見 回す。しばらくダンボールの囲い（家）で遊ぶ友達の様子 を見て、自分からB児や数名の友達がいる段ボールの囲い （家）に行く。囲いに空いた穴から中を覗いてみたり手を出 したりしている。反対側の穴から覗いたB児と目が合い、 互いにニコリと笑う。保育者が囲いの前で足を開いてトン ネルをつくり「アリさんのトンネルで～す」と声をかける。 B児が「アリさんはやく入って」とA児に声をかける。A 児は笑いながらダンボールの囲い（家）に入っていく。	・母親と別れた不安を抱いたまま、安心できる保育者の姿を探し、自分から保育者のところにやってきた。保育者と友達との遊びを見てはいるが、この時はまだ不安の方が大きく遊びへの関心はない。 ・大好きな保育者がアリさんになって声をかけてくれたことで不安な気持ちが薄れ、昨日に遊んできたアリさん遊びを思い出し、自分からペープサートを手に取った。ペープサートというものがあることで、保育者と話しやすくなる。ただ、A児にとっての大切な存在は、まだ「自分」と「ママ」であり、保育者の持っているアリもママと表現している。 ・「おつかいありさん」は普段からクラスで親しんでいる歌で、ペープサートを媒介にしながら保育者との触れ合いを楽しんでいる。「ちょんちょん」というリズムカルなフレーズを口ずさんだりペープサートを合わしたりすることで保育者との距離を近くに感じている。保育者と一緒に遊ぶことで気持ちもほぐれ、保育者の言葉がけに笑顔になり、保育者とのやりとりを楽しむことができた。 ・場面①での「保育者と自分」との1対1のかかわりが安心感につながり、他の遊びにも目が向き、自分で動き出す力となった。 ・自分から興味のある場所に出向くものの、すでに数名の友達がいて自分からは入っていくことができない。しかし、お家の中を覗いたり手を出したりして、自分なりの方法で興味のある場所にかかわりをもったり、自分の存在を相手に表現したりしている。 ・保育者は、アリのお面をかぶったA児と家の中にいるB児が、ものをきっかけにしながらかわろうとしている場面を捉え、互いのイメージに合う「アリさんトンネル」を投げかけた。そのことがB児がA児を遊びに誘うきっかけとなり、A児は抵抗なく友達のいる家の中に入ることができた。

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・朝の受け入れや不安定な気持ちをもっている時には、保育者との1対1のじっくりとしたかかわりを大切にし、その後自分の遊びを見つけた、友達と一緒に遊びたいという気持ちにつながりできるようにする。
- ・不安定な時期は、特にお面、ペープサート、指人形など、自分と同一化できる教材を準備し、互いのコミュニケーションや表現のツールとして利用する。
- ・歌の中に、手や指を合わせて“ちょんちょん”と互いがかわれる動きを取り入れていくことで、保育者や友達と楽しくかわれるようにする。また“自分とちょんちょんしてほしい”、“先生と一緒にしたい”というそれぞれの思いを受け止め、好きな遊びの中でもじっくりとかかわっていけるようにする。
- ・一人または数名がこっそり入れる段ボールの家や囲いなど、自分（達）の安心できる遊び場所を準備する。子どもの興味や状況に合わせて囲いや家の数を増やしたり減らしたりできるようにする。

事例20

「わたしもしたいな…」

【経験させたい内容】

〔3歳児〕

同じ場所にいる友達とかかわり、触れ合って遊ぶことを楽しむ。

〔3歳児 V期（1月～3月）〕

一緒に遊びたい友達と同じ場で遊ぶ中で、友達の思いを時々感じながら、自分の思いを出して遊ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎同じ場所で遊ぶ保育者や友達とのかかわりを楽しむ。
- ◎一緒に遊びたい友達と一緒に、つもり遊びや見立て遊びを楽しむ。
- 保育者や友達のしている遊びに興味をもち、自分なりにかかわって遊ぼうとする。
- 保育者や友達と同じイメージの中とかかわって遊ぶことを楽しむ。
- 友達の思いを感じたり、自分の思いを出したりしながら、やりとりをして遊んでいこうとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・お家ごっこは、日常生活体験をもとにすることで、子ども同士がイメージを共有しやすいことから、保育者とかかわりを中心にしても、同じ場所で遊ぶ友達とかかわりが生まれやすい。
- ・様々にものを見立てたり、言葉のやりとりをしたりしながら、同じ場所に遊ぶ友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを感じることができる。
- ・同じイメージで遊ぶ友達と役になりきった言動を楽しむ中で、自然にかかわって遊ぶことができる。

【環境設定】 <場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

おうちごっこをしよう

<準備物>

- ・ごちそう
(既製品だけでなく、子ども達がつくったものも取り入れていく)
- ・お皿、コップなどのままごと用具
- ・エプロン、お買い物のかご、扱いやすい布、
- ・段ボールの囲いやドア、電話、机、椅子

① 応答をつくり出すもの

- ・玄関をつくり、家の中と外を意識した言葉のやりとりができるようにする。
- ・家の中がはっきりすることで、同じ家の仲間であることを感じることができる。



② 見立てられるもの



身近なものを見立てて遊ぶ中で、自分の思いを出すきっかけにしたり、友達をより意識したりして遊べるように準備する。

- ◆お家の雰囲気が感じられたり、身近なものを使って再現遊びができたりなど、気の合う友達とイメージを共有できるような場所を、クラスの中に数か所準備する。
- ◆ままごとの場合は、囲い過ぎず子ども達が出入りしやすいようにする。

③ なりきれるもの



- ・自分達で着脱できるエプロンやお買い物のかごがあることで、よりなりきって遊んだり、役を意識したかかわりで遊んだりすることができる。
- ・ゴムをつけるなどして、自分達で着られるようにしておく。



④ 共有して使えるもの



2～3人で座れる大きさの机を用意し、友達のしていることに目を向けたり、かかわったりすることができるようにする。

子どもの姿	読みとり
最近になって、A児はB児と「一緒に遊びたい」「一緒に〇〇したい」という思いが膨らみ、互いにそばで過ごし、同じ遊びに入ろうとしたりする姿が見られるようになってきていた。	
【場面：私もお母さん・・・】※環境設定① ままごとコーナーで保育者とB児が遊んでいる。 A 児：「入れて」と玄関のカーテンを開ける。 B 児：家の中から「いいよ」と答えながら遊びを続ける。特にA児を見ることはなく、ボウルを混ぜながら「これおいしいですよ」と言う。 A 児：「私、お買い物いかななくちゃ」と言って、家の中にあつた買い物かごを持ち出かける。しばらくして「ただいま～」と言いながら家の中に戻る。 保育者：「おかえり～」と答える。 B 児：「おかえり～」とA児を見てにっこりと答える。 A 児：にっこりする。 B 児：「私、お母さん。」と大きな声で言う。にこにこしながらごちそうづくりを続ける。 A 児：しばらくして「私もお母さん…」と小声で言い黙り込む。 B 児：何も答えず、そのまま無言で遊んでいる。 保育者：「そうか～。Bちゃんもお母さんがしたいんだね。どうしようか～」 B 児：少し嫌そうな顔をする。「(しばらく考えて) そうや！ 2人お母さんにしたらいいやん」とA児に笑いかける。 A 児：特に表情はなく下向き加減で何も言わない。 保育者：「いいね。2人いたら、ごちそうもいっぱいできるしね」 B 児：「いっぱい～。いっぱいやって」とA児を見て笑う。 A 児：顔を上げ「いっぱい～」と声のトーンを上げ笑顔になる。 「そうや、ここに(ごちそうを)置こ！」と言い、つくっていたごちそうをこたつ(※環境設定④)に並べて中に入る。 保育者：「Aちゃん、あつたかそうね」 B 児：「私もさむいから入りましょ！」 保育者：「先生も入れて！」 A児・B児と保育者で一緒にこたつに入り、ごちそうを食べる真似をする。 B 児：「ジュースも飲みましょう」と自分のコップを見せる。 A 児：「私はコーヒーよ」と言って自分のコップを見せる。 B 児：「そっか～」と笑いながら2人で飲む真似をする。	・玄関があることで、遊びに入りたい時に「入れて」「いいよ」の応答するやりとりが生まれた。ただ、一緒に場に入るものの、それぞれ自分のしたいことをしており、特に一緒に遊んでいる訳ではない。 ・「ただいま」「おかえり」のやりとりからも同じお家の人として受け入れていることが分かる。また、保育者が「おかえり」と声をかけたことをきっかけに、保育者の真似をして「おかえり」の言葉だけでなく、相手を見てにっこりするとかかわりが生まれた。A児も、大好きなB児に答えてもらったことを嬉しく感じている。 ・A児は、B児が先に「お母さん」と主張したことで、自分もお母さん役をやりたいという気持ちと、同じダメかな…という心の葛藤を自分なりに言葉や態度で伝えている。B児にもその声は聞こえているものの、「お母さん役」をしたい思いを無言という態度で表してる。 ・保育者の「どうしようか」の言葉に、「自分がお母さんなのに…」という嫌な思いを感じたものの、A児も「お母さん役をしたい」という思いは感じていて「2人お母さん」という自分なりの方法を提案した。 ・始めは納得していなかったA児だが、保育者の「2人ならいっぱいできる」という言葉と、大好きなB児が「いっぱいやって」と笑いかけたことで、2人の方が楽しそうだと心が動き、B児のアイデアを受け入れることができた。 ・「2人お母さん」というやりとりがあつたことで、互いに同じお家の仲間に自分の思い(イメージ)を出しながら遊ぶことができるようになり、さらに楽しくなるように、一緒に遊ぶ仲間と同じ場所を共有して使いたい(使ってほしい)という気持ちに広がっていった。 ・自分の思いを受け入れてもらえる関係の中では、同じコップでも「私はジュース」「私はコーヒー」とそれぞれに自分のイメージを相手に伝えることが楽しく、また互いにその違いを受け入れることも楽しい。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・友達と一緒に遊んでいても、まだまだ自分のペースで遊びたい時期なので、場所を共有した「一人遊び」や「並行遊び」の楽しみ方を十分に受け止めながら、タイミングを見て周りの友達に関心を広げていけるようにする。 ・保育者も仲間として遊びに入りながら、やりとりや応答を生み出す環境としての役割を担ったり、友達の言葉や簡単なイメージを共有できるような仲立ちをしたりする。 ・互いの思いが異なった時には、まずはそれぞれの思いを自分の言葉で表現できることを大切にしながら、まだ言葉できちんと伝えられない部分を補うようにする。また、些細なきっかけで互いが納得し、さらに一緒に遊ぶことが楽しくなることも多いので、保育者自身が遊びの仲間になりながら、互いの思いを満足できるアイデアや言葉がけを工夫する。	

事例21

「つかまえたのに怒られた…」

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

簡単なルールを守って遊ぶ楽しさを味わう。

〔4歳児 Ⅰ期（4月～5月）〕

友達と楽しく遊ぶためには、ルールがあることを知る。

【活動のねらい・内容】

- ◎クラスの友達や保育者と一緒に、おにごっこ遊びを十分に楽しむ。
- ◎おいかけたりおいかけられたりすることを楽しむ中で、ルールを守って遊ぶ楽しさを感じる。
- 逃げる・おいかけるなど、同じ役の保育者や友達と一緒に動くことを楽しむ。
- 友達や保育者の動きに気付き、自分からかかわろうとする。
- 友達との遊びの中で、自分の思いを言葉や動きで表す。
- ルールがあることで楽しく遊べるのが分かり、自分なりに守ろうとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・「むっくりクマさん」などの歌遊びを含む集団遊びは、手をつないで輪になったり歌ったりすることで、クラスの友達や保育者と楽しい雰囲気（仲間）が作りやすい。また、友達や保育者と声や動きをそろえる心地さを感じるができる。
- ・繰り返しのある簡単なルールなので、どの子どもが参加しやすく、また体を動かして開放的に遊べる遊びである。
- ・自分で自由に好きな役を選ぶことができ、また、つかまえられてもまた逃げられるというルールなので、みんなが安心して遊びに参加できる。

【環境設定】＜場所：遊戯室＞/ 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

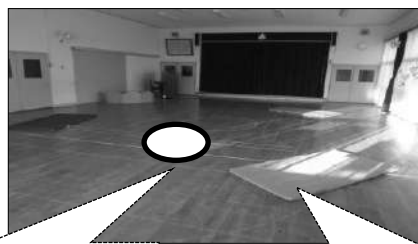
むっくりクマさんのおにごっこ

＜準備物＞

- ・マット3枚（色違い）
- ・クマのお面…邪魔にならない大きさのもの
- ・ビニールテープの円…遊び始めの場所の目印
- ・ルールの絵表示

- ◆子ども達が自分のしたい役を繰り返してできる（もっとやりたいと思える）エンドレスなルールにして安心して参加できるようにする。
- ◆イメージしやすい役を取り入れることで、ルールを楽しんで遊べるようにする。また、子ども達と遊ぶ中でルールを考えたりつくったりするなどして柔軟に対応していく。
- ◆マットの位置で運動量を調節したり、おにが多いとトラブルも増えことからお面の数を調節したりなど、発達に応じた楽しみ方ができるような環境を工夫する。

① クマのお面



② 遊び始めの場所の目印 （クマさんの寝る場所）

③ マットのお家（安全基地）

♪むっくりクマさん♪

♪むっくりくまさん むっくりくまさん あなのなか
ねむっているよ グーグー ねごとをいって むにゃむにゃ



*歌いながら回る

めをさましたら めをさましたら たべられちゃうぞ



『ガオ〜!』（くま役）→鬼ごっこスタート



④ ルールの確認絵表示



ルールやタッチの仕方をどの子どもにも分かるように絵表示して確認しながら行う。

子どもの姿	読みとり
【場面①：まてまて～】 A児はクマ（おに）になってB児をおいかける。B児はマットの家（※環境設定③）に逃げ込んだ。おいけていたA児はマットの端を踏んでしまう。B児に「あ～、Aくん、お家に入らあ。あかんのに！」と言われ、A児はすぐにマットから降り、しばらくB児の顔をじっと見ている。B児がまた他の家に走って行くと、A児の顔が急に笑顔になり、またB児をおいかけ始める。 【場面②：つかまえた！】 A児がB児をおいかけ、後ろから腰に手を回してつかまえる。2人はタックル状態になり転ぶ。A児はつかまえることができ笑顔になる。B児「痛い～」と泣くがA児は離さない。周りの子が「Aくんが悪いことをした」「AくんがBちゃんを泣かした」と保育者に訴えにいった。保育者は2人を起こしてみんなを集める。保育者がB児に泣いている理由を聞くと「急に押されて倒れた…お腹をぎゅっとしたから痛かった…」と言い再び泣く。保育者がA児に「倒そうとしたの？」と尋ねると、A児「ちがう。つかまえたんや！」と泣きそうになる。保育者が「クマのA君は、Bちゃんをつかまえたかったのね。倒そうとしたんじゃないんやね」と言うとA児はうなずく。保育者が「Aちゃんはつかまえようとしたんだって」とB児に伝える。それを聞くと他児らが「私も腕を引っ張られて痛かった」や「背中を叩かれた」と今まであったことを口々に言う。 【場面③：どうやってつかまえる？】 保育者が周りの子に「みんなの大好きなむつくりクマさんのおにごっこは、どうやってつかまえるといいのかな？」と問うと、数名から「痛いのはあかん」や「優しくタッチしたらいい」などの意見が出る。保育者が「なるほど～。優しくタッチね。みんな、つかまえるときにタッチできるかな？友達が痛くないようにできるかな？」と聞くと、「できる！」とみんなが手を上げる。保育者が「でも、タッチでちゃんとつかまえることができるかな？」「優しいタッチでつかまえられたら楽しいおにごっこになるね」とみんなに話す。C児が「ぼくつかまえられてもまた逃げるから大丈夫！」と答えると、保育者はにっこりとC児を見てほほえむ。A児にも「Aちゃんもタッチしてつかまえられたら、かっこいい強いクマさんになるね」と声をかける。A児は「できる」と言い、またおにごっこが再開した。	・「あかん」と言われて一瞬戸惑い、B児の顔を心配そうに見ていたA児だが、B児が再び走り出したのを確認し、怒られたのではなく遊びの中で言われたのだということが分かり、再びB児とのかかわりを求めて遊びを続けていくことができた。一緒に遊ぶ友達の気持ちを気にして遊ぶ様子が伺われる。 ・おにごっこに夢中になり、大好きなB児に対しても力加減が分からずにつかまえてしまった。A児の気持ちとしては、つかまえたばかりで、この時のB児の気持ちに気付いてはいない。 ・この時期、周りの子は、身近にトラブルがあると、保育者に伝えてその場を何とかしようとする。しかし、前後の状況や互いの思いまでは考えが及ばず、泣いている現象だけ見て、泣かした子が悪いと判断して伝えようとする。 ・保育者が、2人の仲立ちをしたことで、それぞれに自分の思いを言葉にすることができ、A児は自分の行動が相手が嫌がることだったと知る。 ・保育者がみんなを集めて2人のトラブルを仲介したことで、周りの子からも、友達の話す姿を真似をして、それぞれに自分の経験した時の気持ちを伝えることができた。無理につかまえると痛い思いをする子があるということがみんなの中で共有できた。 ・みんなが思いを共有できたことで、話し合いに自分から関心を向け、自分なりの参加の仕方でも話し合いに加わり、それぞれに自分が気付いたことを言葉で伝えようとする姿につながった。 ・A児B児のトラブルをきっかけとした話し合いで、「つかまえる時は優しくタッチする」という新たなルールが共通になった。 ・C児の意見についても、保育者がC児なりの楽しみ方として受け入れたことで、みんなが安心して意見を言ったり参加したりできることにつながった。 ・A児も保育者や周りの友達に気持ちも分かってもらえたことで、安心して遊びに戻ることもできた。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・友達への関心が強まり、一緒に遊ぶ友達の思いを気にできるようになる時期であることから、特にみんなで集まると楽しいと感じられる遊びを大切に、友達や保育者とのかかわりを十分に楽しめるようにする。 ・トラブルの場面においては、ルールを守ること大切だが、自分の思いと友達の思いの違いに気付いて葛藤する経験の場を大切に、お互い学び合う場となるようにする。また、一緒に遊ぶ中で、相手が嫌がることはどのようなことなのかを知ったり、どの程度の力でつかまえるのがよいのかなど、力加減を学んだりすることも大切にする。 ・まだまだ言葉で自分の思いや気持ちを十分に表せない時期なので、保育者が仲立ちとなり、お互いの思いや気持ちが分かり合えるようにする。その時、どちらがよくてどちらが悪いと判断するのではなく、それぞれの思いを受け止める中で、保育者自身が子どもの思いを分かろうとする姿勢を大切にする。 ・ルールを守って遊ぶことで楽しい遊びとなることを実感できるような場面を大切に、自分からルールを守ろうとするように姿を大いに認めていく。	

事例22

「私はお当番さん！」

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

自分から友達に何かをしてあげたり、してもらったりすることを喜ぶ。

〔4歳児 IV期（11月～12月）〕

当番活動を喜び、進んで手伝いをする。

【活動のねらい・内容】

◎当番の仕事を楽しみにして、みんなのためにやってみたいという気持ちをもつ。

○当番に喜びを感じ、決められた仕事に意欲的に取り組む。

○自分のしたことに、友達が喜んでくれたことを嬉しく感じる。

○友達にしてもらったことに「ありがとう」と言う。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・「みんなの中の自分」という感覚が育つ時期であり、クラスの代表として『今日のお当番さん』になる嬉しさから、「みんなのために頑張ろう」とする気持ちがもちやすい活動である。
- ・友達が喜んでくれることが嬉しいと感じる経験を積むことは、「自分は人の役に立っている」という自己信頼性（自分に自信をもつこと）につながるとともに、相手への思いやりやきまりを守ろうとする力などにつながっていく大切なことである。

【環境設定】<場所：保育室>/ 活動名： / 教材： / ポイント/： / 環境への配慮：◆

お当番をしよう！

子ども達と
話し合う

当番の仕事って？
みんなのために
できること…
何があるかな？

- ◆当番活動を始めるタイミングとして、クラスの子の意識をよく観察する。
- ・友達とのかかわりが深まり、相手の気持ちや要求を考えるようになってきた。
- ・クラスの中の自分としての意識が高まってきている。
- ・保育者や友達に感謝されることが嬉しく、保育者の仕事を喜んで手伝おうとする子が増えてきた。



① 食器配り

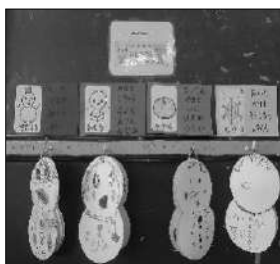
① 帳面配り

- ◆友達同士で認め合い、感謝されたり、達成感を味わったりできる当番の仕事を決める。
- ◆各生活グループから1人ずつで構成される当番グループにする。
※生活グループから1人ずつが当番になることで、誰のために仕事をするのかをはっきりさせる。また、自分のペースで安心して仕事に取り組める。
- ◆決めた仕事内容は、みんなが分かりやすいように、絵表示などで表示する。



① あいさつ当番

② グループ当番表



- ・グループの仲間や当番が誰なのか分かるように、クラスの見えやすい位置に表示をする。

③ 当番バッチ



- ・バッチがあることで、「自分が当番」「頑張ろう」という意欲をもてるようにする。
- ・友達同士で応援したり声をかけ合ったりできる目印にする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
当番パッチを準備したことで、自分の当番を心待ちにする。本日はA児が当番パッチをつけて初めて当番を行う日。	
【場面① 当番大好き！】 登園後、手早く持ち物の始末をするA児。保育者のところに行き、当番パッチを付けてもらう。保育者が「Aちゃん、今日一日、みんなのためにお当番さん頑張っね」と声をかけると、A児「は〜い、ありがとう。私、当番大好きなの！」と言い、にこにこして遊びはじめる。 A児が遊んでいるところに、同じ当番パッチを付けたB児が来る。A児は、B児のパッチをじっと見つめ、自分の服に付いているパッチを手に取り、B児に近寄り「同じ」とパッチを見せる。B児「お当番一緒や！」とパッチとパッチを合わせて抱き合い笑う。 【場面② 給食当番】 給食の時間になり、A児は当番の仕事（※環境設定①）として、グループの友達5人分の食器を配る。真剣な表情で「1枚、2枚…5枚」と1枚ずつ数えて5枚のお皿を運ぶ。同じように他の食器も運び、その後に牛乳を運ぶ。「できた！」と笑顔になり、自分の席に戻り、隣の友達と話をしている。 同じグループで向かいに座るC児が「ストローがない！ストロー！！」と怒りながら大きな声を出す。A児は「あっ！」と友達との話をやめ、走ってストローを取りに行き、配った後、黙って椅子に座る。C児も黙って受け取る。保育者は、A児に「Aちゃん、ストローがないって気付いてちゃんと配ってくれたんだね。えらいな〜。ありがとね、」と声をかける。A児は安心した表情になりうなずく。C児には「C君はストローがないことに気が付いたんだね。よく気が付いたね。でもね、そんな時は、『お当番さん、ストローを忘れてるよ』って優しく教えてあげるとかっこいいよ。お当番さんだって忘れることもあるもんね」と2人に声をかける。保育者の言葉にうなずくC児。A児は笑顔になり、そのままあいさつ当番に向かった。	・楽しみにしていた当番の日。持ち物の始末を手早く済ます姿から、パッチを付けてもらうことを楽しみにしている様子が伺われる。 ・保育者に、「みんなのために頑張っね」と自分を応援してもらえたことが嬉しく、はりきった気持ちになる。 ・具体的な目印となる当番パッチがあることで、いつもとは違う特別な日に思え、今日一日の自分の仕事に意欲的に取り組もうという気持ちをもつ。 ・同じパッチを付けたB児に対して、同じ仲間という親近感を持ち「一緒だね」と嬉しい気持ちを抱き合って表現している。 ・グループの友達に食器や牛乳を運ぶ仕事は、仕事内容も配る数も分かりやすく、自分からはりきって頑張ることができた。 ・真剣な表情で数を確認して配る姿や「できた」と笑顔になる様子から、仕事に対して真剣に取り組んでいることが分かる。また、自分の力で手早くできたことに自信をもち、安心して友達との会話を楽しんでいる。 ・C児は「自分のストローがない」という不満な思いを「怒る」という表現で周りに表した。特に当番に対して責めるという意図があったわけではないと思われる。 ・慌ててストローを取りに行く姿や黙ったまま涙をこらえている姿から、A児が自分の仕事だったのにできなかったと残念に思っている気持ちやC児に怒られた悲しさを感じていることが分かる。 ・A児は、保育者から「えらいな〜」「ありがとう」と認めてもらい安心することができた。 ・C児は、まずはストローがないことに気付いたことを保育者に認めたことで、怒ったように言ってしまったことへの注意を素直に受け入れることができた。 ・A児C児共に、それぞれの自分の思いを言葉にしてもらうことで、自分の気持ちを分かってもらえた安心感から、相手の言動を自分なりに受け入れることができた。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・当番活動を通して、一人一人が自分の思いを出せるようになることや、みんなで決めた仕事に対してはりきって頑張ろうとする気持ちを大切にする。 ・保育者は「仕事」としてできるようになることだけを求めるのではなく、「みんなのために頑張りたい」という気持ちが芽生えることを大事にしながら、本人の思いや周りの状況などを温かく見守り、時には言葉不足から生じるトラブルの仲立ちになるなど、必要に応じた援助をする。 ・友達が喜んでくれて嬉しい気持ちを積み重ねたり、友達と一緒にやり遂げた満足感を味わったりすることを大切にする。また、当番をすることでみんなが活動しやすくなったりみんなが喜んでくれたりするなど、役に立つ喜びを感じられる大切な活動であることを意識して進めるようにする。 ・グループづくりについては、今回のように生活グループからの代表で構成するだけでなく、生活グループのままにするなど、クラスの実態を合わせて柔軟に考えていくようにする。	

【かかわりの力】

5歳児 6月

＜生きる力の基礎＞

かかわりの力

協 同

信 頼

規 範

事例23

「みんなで見つけよう！」

【経験させたい内容】

〔5歳児〕

共通の目的をもって遊ぶ中で、友達の思いや考えを受け入れ、一緒に遊びを進めることを楽しむ。

〔5歳児 Ⅱ期（6月～8月）〕

友達と遊びを進めていく中で、イメージが共通になっていく楽しさを感じる。

【活動のねらい・内容】

- ◎友達と一緒に遊ぶことを楽しみ、思いを伝え合いながら遊びを進めていこうとする。
- ◎考えたり気付いたりしたことを遊びの中に取り入れようとする。
- 友達とイメージを共通にして遊ぶ楽しさを味わう。
- 自分の思いを友達に伝えたり友達の話を聞いたりなど、お互いの思いに気付いて遊ぶ。
- 思いついたことや発見したことなど、自分なりのアイデアを出しながら遊びを進める。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・新しいクラスの友達とのつながりが広がっていく時期に、共通になるイメージの遊びを取り入れることで、友達とよりつながりやすくなる。
- ・お話遊びやごっこ遊びは、友達との言葉による伝達や対話の必要が生まれ、お互いの思いや考えを伝えたり聞いたりする力が自然に身に付く。
- ・共通の目的をもつことで、自然と役割が生まれたり、互いに協力したりできる。

【環境設定】＜場所：園庭＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

魔女の宝を探そう！

＜準備物＞

- ・魔女からの手紙（イメージが広がるもの）
- ・園庭に隠したカード（共通の目的につながるもの）
- ・宝のビー玉など（共通の目的になるもの）
- ・地図、望遠鏡、剣など（なりきって遊べるもの）
- ・透明のカップ、ペットボトル（遊びを広げるもの）
- ・ドクダミなどの草花（子ども達が見つけたもの）

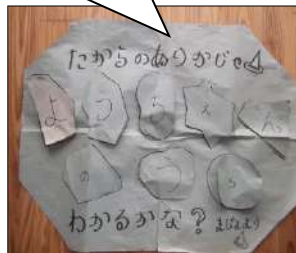
① 「宝のありか」が分かるカードをあつめる

園庭の様々な場所に、カードが隠してある。



友達と一緒に探したり、声をかけ合いながら、協力したりできる環境を準備する。

番号とカードに合わせた形が書いてある。



謎解き（文字集め）の興味から、数名の友達が集まってやりとりできる楽しい環境をつくる。

- ◆砂場付近など、園庭の見えやすい場所にカードを隠すことで、興味をもった子同士のかかわりが生まれやすいようにする。
- ◆一人一人の子どもの発想を、タイミングを図りながらクラスの中で伝えることで、友達との共通のイメージや遊びへと広げていく。
- ◆友達同士でワクワク感をもちながら遊びを進めていけるように、保育者も一緒に驚いたり、一人一人のアイデアを実現できるような環境を準備したりなど、時には同じ仲間になりながらイメージを広げたりして遊ぶようにする。
- ◆子どもの発想から生まれた様々な遊びの場を保障していく。（ドクダミのジュースづくり・砂場の落とし穴づくり）

② 魔女のジュースをつくらう

色水をつくれる道具やカップを準備する。



- ・昨日の遊びからさらにイメージを広げ、自分達で見つけた遊びを実現できる環境を整える。
- ・目的に合う材料を友達同士で探したり、教え合ったりしながら楽しめるようにする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
保育室の天井が太陽の光の反射で偶然光った自然現象に強い関心をもった子ども達。その頃にクラスで読んでいたお話のイメージと結びつけ「魔女が覗いてる」「魔女の仕業じゃない？」と想像しながら友達同士で話していた。その後も時々数名の子の中で魔女の存在に興味をもって話題にしたり、魔女探しをイメージして望遠鏡をつくったりなどして、それぞれに遊ぶ様子が見られていた。保育者は、その姿を受け止めながら、「仲間をつなぐ楽しい遊びに広がるのではないか」と考え【魔女からの手紙とカード】を仕掛けた。	
【場面：魔女からのカードを探そう】 太陽の光が反射して天井が光っている現象を発見したA児と数名の男児。「また魔女かも」「部屋まで魔女がきてるかも」「一緒に探しに行ってみようか」と口々に話している。A児は数人を誘い、以前につくっておいた望遠鏡や地図を持って戸外へ出ようとする。保育室の出口に手紙が落ちている。A児が拾って「これ誰のやろ？」B児「魔女かな？」と話す。A児が手紙を開けてみると「たからのありかじゃ わかるかな」と書かれた手紙だった。（※環境設定参照）A児達数名（B・C・D・E児）で顔を見合わせ「やっぱり魔女や」「宝物やって」「早く探しに行こう」と急いで園庭に出る。 A児が①と書かれた三角のカードを砂場付近で見つける。カードを開いてみると「こ」の文字。A児はカードを手紙の①の箇所に合わせてみる。ピッタリと合う。A児「全部集めたら宝の場所が分かるんや。そうや！そうなんや！」と興奮気味に周りの子に伝える。C児「ほんまや。もっと探そう！」B「手分けして探したら？」と頭を突き合わせて話をした後、それぞれ園庭に分かれる。B児が垣根で④のカードを見つけ「あったー」と大きな声をあげる。他児が集まってきて、今度はB児が手紙の④の場所にカードの「え」を合わせる。 A児が小屋の外壁の上（※環境設定参照）にカードを見つける。A児「あったー、でも高いところやで取れん」と周りに声をかける。仲間が集まってきて、B児とD児がジャンプしてみるが取れない。A児「あっ！そうや、背の高いFくんを呼んでくる」と急いで保育室にいたF児を呼びに行く。しばらくしてF児が笑顔でやってきた。Fが背伸びをして取ろうとしている様子に、A児たちが「頑張れ」とF児の体を支えながら声をかける。何度か手を伸ばし、やっと取ることができた。周りにいた子などから「あったー」と声があがる。	・偶然に起こった自然現象を、興味をもっていることと結びつけてイメージを広げ、気の合う友達に伝えたり遊びに誘ったりしたようだ。 ・望遠鏡などの手づくりアイテムがあることで、「魔女探し」というイメージをもった友達同士がワクワクした気持ちを共有して遊び出すことができた。 ・保育者が仕掛けた「魔女からの手紙」の存在で、ただの興味だったものがA児達の共通の遊びへと変わった。 ・A児を中心にした仲間で、手紙に示してある数字と文字を当てはめて文章を解読していくという遊び方を共通理解し、さらにB児の提案でそれぞれが「ワクワク感」を高めながら同じ目的に向かって探し始めた。 ・誰かが見つけると、その喜びや宝につながる情報を共有するために、その都度集まる姿が見られた。 ・自分達の力では無理だと分かった時に、保育者ではなく同じクラスで背の高いF児のことを思い出して頼みに向かう姿から、クラスの友達関係が広がり始めていることが分かる。また、頼まれたF児の笑顔からも、自分が必要とされた喜びが伝わってくる。このことをきっかけにF児も魔女探しの仲間に加わることができた。 ・みんなで探して解読できたという、この時期としては「分かりやすい協力」ができる遊びであったことで、「みんなの遊び」として楽しめるものになった。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・この時期は、特に友達とイメージを共有して遊ぶことが楽しくなるようなお話や遊びを投げかける。 ・保育者は、子ども達の生活や遊びの中から興味がある題材を選び、時には今回のように保育者から仕掛けを行うなど、子どもにとっての共通の目的を明確にすることによって、イメージを豊かにしながらクラスの友達とのかかわりがもてるようにする。 ・子ども達のアイデアを受け止め、遊びの中に取り入れていくことで、イメージしたことを実現していく嬉しさや友達のよさ、また一緒に遊ぶ楽しさを感じることができるようになる。 ・友達と一緒に遊びを進めていく中で、互いに主張し合う姿を大切に受け止めるとともに、必要によっては、相手の意見やよさに気付けるための仲立ちとなる。	

事例24

「ぼく ○○チームがいい！」

【経験させたい内容】

〔5歳児〕

友達との考えの違いやうまくいかない経験を通して、友達と工夫したり折り合いをつけたりしながら、問題や課題を乗り越えようとする。

〔5歳児 Ⅲ期（9月～10月）〕

友達と話し合いながら、自分達で遊びを進めていく。

【活動のねらい・内容】

◎仲間と一緒に遊びを進める楽しさを味わう。

○一緒に遊ぶ仲間に自分の考えを伝えながら、一緒に遊びを進めていこうとする。

○問題が起こった時、自分なりに考えたことを話したり、相手の話に耳を傾けたりしながら、自分達で解決していこうとする。

○ルールや遊び方について、互いに教え合ったり注意し合ったりしながら進めていこうとする。

○同じチームの友達と一緒に、勝ち負けの楽しさや悔しさを味わう。

【活動を取り上げた理由（教育的価値）】

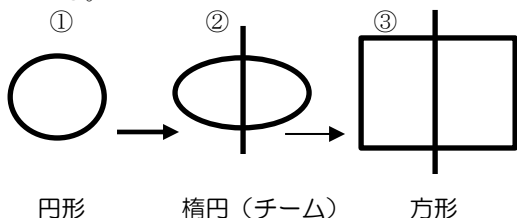
- ・ドッジボールは、ボールの取り合いや人数の分け方、「当たった」「当たらない」、勝ち負けなど、遊びを続けて楽しむためには、個人だけでなく友達同士で解決しなければならない場面が多い。
- ・チームで対戦する遊びなので、同じチームでの仲間意識がもちやすく、また仲間から認められたり励まされたりする経験ができる。
- ・勝ち負けがあるので、喜びや悔しさなど様々な感情体験ができる。
- ・楽しく遊ぶためには、ルールを守って遊ばなくてはならないことが分かる。

【環境設定】 <場所：園庭> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

忍者ボール（ドッジボール）で遊ぼう

<準備物> ・カラー帽子 ・ボール ・ライン
・チーム分けできるもの

子どもと一緒にルールづくりを進め、円形ドッジボールから、段階的にチームで対戦する方形ドッジボールへ移行していく。本時は、自分の力量に応じて①②③を選んで分かれている。



- ◆一人一人（グループ）の力量に応じた楽しみ方ができるように、陣地の形状①②③を準備し、自分で選択できるようにしておく。
- ◆子ども同士が相談したり、チーム意識を感じたりできるように、陣地の大きさや適当な人数、チームの力量などについて、子どもや遊びの様子を見ながら臨機応変に変化させていく。
- ◆ルールや約束が共通理解しやすいように視覚教材を用いる。また遊びをイメージ化することでより仲間である意識がもてるようにする（忍者のイメージ）。

② 楕円

① 円形

③ 方形



- ・トラブルをきっかけに、問題を意識できる場面を設けるなど、子どもと共にルールや約束を少しずつ変化させていくようにする。（頭は当たると危ないのでセーフなど）
- ・友達同士の中で、自分の思いを伝えながら自分達で遊びを進めていけるように、それぞれのチームに任せながらも、必要に応じては、保育者がかかわりながら、仲間と相談できるように後押しするなどの援助をしていく。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
「転がしドッジボール」の経験に、忍者遊びのイメージが加わり、「忍者ボール（ドッジボール）」という遊びに発展してきた。興味をもった子同士、またクラスみんなで繰り返し遊ぶ中で、トラブルなどをきっかけにしながら少しずつ遊びの約束ができてきた。そのような中、子ども達から「チームの人数を同じにしたい」という意識が出てきて、チーム間でもめる姿が出てきた。	
【場面① チームを決めよう】 数人が集まり、自分達で“忍者ボール”の遊びを始める。ボールを用意し、方形型コート（環境設定③）に集まる。A児の「チーム決めよう」という声に、B児「僕は白チーム」C児「じゃあ僕は黄色チーム」とそれぞれ自分が行きたいチームを言い合ったところ、黄色チームが6人、白チームが4人になる。B児「人数が合わんで」と言うと、D児「(白チームが)1人少ない」と言う。A児(黄)「じゃあ黄色チームから1人行けばいいやん」と意見を出す。そこで黄色チームの子達が集まって話し合う。「どうする？誰が行く？」「僕嫌や、黄色チームがいい」「僕も！」と、白チームに変わってもいいという子はない。チームが決まらないのでいつまでも遊びが始まらない。 【場面② 誘い行こう】 C児(黄)「いつまでたってもできんやん！」B児(白)が「僕らのチームあと2人少ない」とつぶやく。するとD児(白)が辺りを見回し「誰かいないかな？あつ、そうや！誰か呼びに行こうか？」と言う。それを聞いたB児(白)も「そうや、呼びに行こう」と賛同した。白チームの4人は勢よく他の遊びをしている友達のところに向かう。「白チームの人数が足りないから仲間になって！」と次々に声をかけるが、どの子にも応じてもらえなかった。白チームの4人は、しょんぼりした様子でコートに戻ってくる。 【場面③ チームを変える】 B児(白)「みんな違う遊びしてるって・・・」と黄色チームに伝えた。A児(黄)「じゃあどうする？このままではできんな」と言う。しばらくの沈黙の後、C児(黄)が「じゃあ・・・僕が白チームにいくわ！」と自分が白チームに変わることを伝える。白チームの子達は「ほんまに？！」「これでできるな」と大喜びする。黄色チームや白チームの他の子たちも口々に「C君、ありがとう」とC児にお礼を言う。C児「いいって。早く遊びたいし。よし、遊ぼう！」と呼びかけ、意気揚々と遊びが始まる。	・今までの経験から、「忍者ボール（ドッジボール）」が好きな仲間同士が集まり遊びを進めようとしている。 ・始めにチームを決めて遊ぶことが共通の約束になっていることから、一緒に遊ぶ仲間に向かって自分のなりたいチームを言い合っている。 ・なりたいチームに分かれるものの、人数差があつては遊びが始められないという共通の意識があり、みんなが同じ人数にしたいという気持ちをもっている。 ・黄色チームから1人だけ白チームに変われば、同じ人数になることは理解しているが、誰もが、「自分は変わりがたくない。誰かが行ってくれないかな」という気持ちと「自分ではない誰かが変わればいい」とは言えない気持ちとが揺れ動き、なかなか遊びが始められない。 ・チーム分けがうまくできず、遊びが始められないが早く遊びたいという思いは募る。 ・「足りない人数を呼びに行こう！」という友達の新たな提案を「それはいい考えだ」とチームのみんなが受け入れ、同じチームに入ってくれる仲間を探しに行く。同じ目的に向かって遊ぶ中で、友達の意見を受け入れ自分達なりに何とか遊びを進めようとしている。 ・友達を誘うことができず、しかし新たな方法も見つからずで「どうしたらいいのか・・・」という気持ちをみんなでも共有している。 ・C児は、早く遊びたいという思いと、今の状況や雰囲気を感じとったことから、「自分が白チームに変わる」ことを決めた。仲間同士でその雰囲気を共有していたため、ドッジボールができるように自分の気持ちを変えてくれたC児に対して、思わず「ありがとう」という感謝の言葉が出たのだと捉える。C児もみんなに感謝された喜びを感じるとともに、これでみんなと遊べるという嬉しさを感じている。 ・徐々にではあるが、保育者に相談することなく、自分達の中で遊びを続けようとする力が育ってきている。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・この時期の保育者の姿勢として、遊びの中で起こった問題に対して、まずは遊びを見守りながら、互いの思いに気付いたり自分の思いや感情を調整したりして自分達で遊びを進めていこうとする姿を支援していくようにする。ただし、まだまだ自分達で解決できることには限りがあるため、必要な場面では助言や環境づくりを提案しながら、それぞれが自分の思いや考えたことを友達に伝え合える仲間づくりを支えていく。 ・本時は「人数をそろえる」という課題に対して、自分達で解決しようとする姿を見守ったが、時期を見ながら、クラスの問題として話し合う機会をもったり、自分達でチーム分けができる方法を提案したりする。	

【からだの力】

事例25	0歳児（6か月頃～9か月頃）	8か月「さわってみよう」
事例26	0歳児（9か月頃～12か月頃）	10か月「のぼって おりて」
事例27	1歳児Ⅰ期（4月～8月）	7月「でこぼこ 楽しいね」
事例28	1歳児Ⅱ期（9月～3月）	1月「おもちゃ粘土で遊ぼう」
事例29	2歳児Ⅰ期（4月～8月）	6月「カエルになって遊ぼう」
事例30	2歳児Ⅱ期（9月～12月）	12月「ボール遊び 楽しいな」
事例31	3歳児Ⅱ期（6月～8月）	7月「おいかけごっこをしよう」
事例32	3歳児Ⅲ期（9月～10月）	9月「〇〇になって遊ぼう」
事例33	4歳児Ⅲ期（9月～10月）	10月「カエル遊園地で遊ぼう！」
事例34	4歳児Ⅳ期（11月～12月）	12月「おばけなんかにつかまらないぞ！」
事例35	5歳児Ⅱ期（6月～8月）	7月「宇宙探検に行こう！」
事例36	5歳児Ⅳ期（11月～12月）	12月「忍者ボール！」

事例25

「さわってみよう」

【経験させたい内容】

〔おおむね6か月から1歳3か月未満〕

寝返り、お座り、ハイハイ、高ばい、つたい歩きなど、体を動かす。

〔0歳児（6か月頃～9か月頃）〕

手でものをつかんだり、手を打ち合わせたりする。

【活動のねらい・内容】

- ◎近くにある玩具などに興味をもち、手先や指先を使い、簡単な動作を繰り返して楽しむ。
- ◎見る、触る、つかむ、離す、引っ張るなど手や指の機能を働かせて遊ぶ。
- おもしろいと感じた遊び（行為）を、何度も繰り返して楽しむ。
- 指先でものをつまんだり、引っ張ったり、握ったりする。
- 安心できる保育者の見守りの中で、一人遊びを十分に作る。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・周囲にある様々なものへの関心が高まる時期なので、身近な場所に感触の異なる素材や繰り返しを楽しめる玩具などを用意することによって、“おもしろい”“もっと遊びたい”という意欲につながり、自然に手先や指先を使って遊ぶ経験ができる。
- ・手づくりの玩具は、子どもの発達や興味に合わせて、感覚器官や体の発達を促すものを準備することができる。

【環境設定】<場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

ひっぱってあそぼう



① ひっぱりっこ

<準備物>

フェルト・ひも台紙
(段ボール)

フェルトの動物は握りやすいものにする。

- ◆手と目の協応ができ、探索活動を充実させる玩具（引っ張る、つまむ、握る、出し入れする、打ち合わせるなど）を十分にそろえる。
- ◆手づくり玩具は、安全や衛生面などに十分に注意する。触ったり、なめたりしても安全なものを用意する。
(誤飲防止のため直径40mm以上のものを用意する。)



② くるくる

<準備物>

箱 布 サランラップ
の芯

トイレットペーパーのようにクルクル出てくるのがおもしろく、繰り返し指先を使って下方向へ引っ張れるようにする。

③ どんどん出てこい

<準備物>

ミルク缶 布ハンカチ
カップ チェーン

それぞれ素材の違うものを準備し、上へ引っ張ると出てくる楽しさを感じられるようにする。

④ ハンカチ出てこい

<準備物>

保存パック はぎれ布

パックの中のハンカチがティッシュペーパーのように繰り返し出てくる楽しさを味わえるようにする。

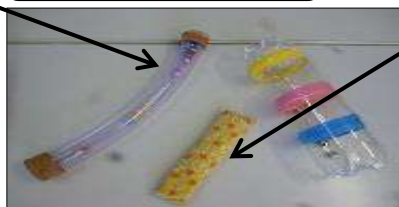
⑤ にぎにぎ（鈴転がし）

<準備物>

太い透明ホース ビーズ 鈴
ホースの両端に机のすべり止め使用

- ・中の鈴やビーズを追視したり、自分で持てるようにしたりする。
- ・誤飲防止のため、しっかりと両端を止める。

にぎってあそぼう



⑥ にぎにぎ（布）

<準備物>

布 セロファン

セロファンを入れることで握るといい音になるようにする。

子どもの姿	読みとり
ハイハイでの移動が活発になり、興味のあるものに自分から向かうようになってきた。自分の衣類かごの中のポリ袋を指先でつまんで引き出すことに興味をもっている。	
【場面① ひっぱったら、でてきたよ!!】※環境設定④ A 児：保育者から少し離れた場所にお座りし、保育者を見ている。 保育者：A児に布をたたんだものを入れた箱を見せて「これおもしろいよ。ほら！（布を取り出す）。Aちゃんも一緒にやってみようか」と誘う。 A 児：保育者のもとまでハイハイでやってくる。お座りをして片手を使って中の布を引っ張る。布の端を指でつまんで引っ張るとスルスルと布が出てくる。表情は特に変化なし。 保育者：「すごいね～。でてきたね」とA児の隣で声をかける。 A 児：少し笑顔を見せ、もう一度引っ張る。布が出てくると保育者を見上げ、にっこりと笑う。 保育者：「やった～！またでてきたね～」と拍手をして、先ほどよりも大きな声を出す。 A 児：保育者と顔を合わせて笑顔になる。その後も布がなくなるまで繰り返し引っ張る。  【場面② にぎにぎのおもちゃを取りに・・・】 ※環境設定①～⑥など 子ども達の手の届く場所に様々な玩具を置いておく。 A 児：にぎにぎ玩具（※環境設定⑥）に気付き、ハイハイで玩具の所に向かう。素早く「お座り」の体勢を整える。にぎにぎ玩具を手にとりぐっと握る。中のビニールの音が「カシャ」と鳴る。またぎゅっぎゅと握ると「カシャカシャ」と音がする。さらに口元に持っていき舐めるような仕草をする。保育者が「いい音だね。カシャカシャって、いい音がしたね」と笑顔で話しかけると、保育者の目をじっと見つめて笑った。	・身近な人やものに興味を示すようになる時期で、保育者の誘いに興味をもったことで、自分から「ハイハイ」して動き出すことができた。「ハイハイ」は、腕の力や足の筋肉が発達し、次のつかまり立ちやつたい歩きの基礎となる力になることから、この時期には十分に経験してほしい動きである。 ・そばにいる保育者に「すごいね」「できたね」と認めてもらうことで、どんどんと嬉しい気持ちになり、引っ張ったら出てくるという楽しさを感じ、繰り返し遊ぶ姿へとつながった。保育者とのかかわりが、手先や指先を使って遊ぶ「引っ張り遊び」を何度も経験する要因となった。 ・お座りしながら片手でものを引っ張り出す姿から、体のバランスや体幹がしっかりと安定してきていることが分かる。さらに、何度も引っ張って取り出すことを楽しむ姿から、つかんだものを意図的に手から離す力が育ってきていることが分かる。 ・自分の視界にあった玩具に興味をもったことで、自分から「ハイハイ」をして動き出すことができた。お座りへの姿勢変換の際に、腕を伸ばしたり、手で体重を支えたりする動作は、腕の支持力や手指の機能が育ってきていることが分かる。 ・握ると音が鳴ることに興味をもち、握る行為を繰り返す。また、何度も握ったり、興味をもった玩具を舐めたりして、感触や音のおもしろさを確認している。 ・保育者が、A児の気持ちを言葉で代弁し、笑顔でかわったことで、嬉しい気持ちを感じている。保育者をじっと見たり笑顔を返したりする姿から、保育者への信頼感が伺える。保育者とのかかわりがあることで、繰り返し自分の遊びを楽しむことができています。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・身近な人やものに興味を示すようになってきたので、自分が見つけたものに向かって自分から足を運び、自分で繰り返し遊ぼうとする姿を温かく見守る。 ・保育者との信頼関係が遊びを繰り返す意欲につながることから、保育者は、子どもの驚きや喜びの気持ちを具体的な言葉にして伝えたり、できた喜びと一緒に感じたりしながら、楽しくかかわるようにする。 ・子どもの興味や発達に応じて、様々な行為を楽しめる玩具や感触の違いを楽しめる玩具を用意し、ものにかかわって遊ぶ中で、手指を使う経験を楽しめるようにする。	

【からだの力】

0歳児 10か月

<生きる力の基礎>

からだの力

生活

運動

事例26

「のぼって おりて」

【経験させたい内容】

〔おおむね6か月から1歳3か月未満〕

寝返り、お座り、ハイハイ、高ばい、つたい歩きなど、体を動かす。

〔0歳児（9か月頃～12か月頃）〕

臥位、座位、つかまり立ち、つたい歩きの間で自由に姿勢を切り換えることができ始める。

【活動のねらい・内容】

◎保育室にある環境に興味をもち、腕や足腰を十分に使って遊ぶ。

○自分の好きな遊びや場所に自由に移動する。

○ゆるい傾斜の上り下りやトンネルくぐりなどに興味をもち、体を使って遊ぶことを楽しむ。

○体のバランスをとりながら、遊具を上ったり下りたりして遊ぶ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

・段差のある場所を繰り返し上ったり下りたりすることにより、様々な体の動きが経験できる。

・つたい歩きや一人歩きをするようになって、全身の発達や筋力をつけるためには十分にハイハイをすることが大切なので、トンネルやゆるい傾斜の滑り台などを用意することで、自然にハイハイの動きを促すことができる。

【環境設定】 <場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

体を動かして遊ぼう

① ゆるやかな滑り台

<準備物>

- ・一番高い所・・・牛乳パック横2個分（約15cm）
- ・横幅・・・・・・牛乳パック横3個分（約60cm）

安心して段差を楽しめるように、ゆるやかな滑り台を用意する。

- ◆布などの素材を使い、ぶつかっても痛くないような環境にする。
- ◆高さなどは成長に合わせて変えるなど、安全には十分配慮した環境を準備していく。
- ◆安全に十分配慮した環境の中、ハイハイやつかまり立ちなど、様々な姿勢を経験できる場所を準備する。



④ でこぼこクッション

<準備物>

布団シート 低反発スポンジ

足裏を刺激する、バランス感覚を身に付ける、クッションの上で寝転がる、でこぼこ道にして歩くなど、様々な動きを楽しめるようにする。



② 段差のある階段

<準備物>

- 1段目は牛乳パック横1個分
- 2段目は牛乳パック横2個分
- 3段目は牛乳パック横3個分
- 横 幅・・・牛乳パック3個分（約60cm）

ハイハイで上ったり、歩くことのできる子は立って上ったりできるように無理のない高さにする。



③ 段ボールのトンネル

<準備物>

段ボール 足元・・・牛乳パック2個×2

トンネルをくぐったり、「いないいないばあそび」を繰り返したりできるようにする。

⑤ 牛乳パックでつくった囲い

<準備物>

- 縦・・・牛乳パック縦8個分（約60cm）
- 横・・・牛乳パック縦9個分（約70cm）

お風呂のように入ってみたり、ボールを入れてみたりなど、足をあげて入ろうとするため、自分の力で入れる適当な高さや安定感のある囲いにする。

子どもの姿	読みとり
【場面① ハイハイで滑り台へ】※環境設定① 牛乳パックでつくったゆるやかな滑り台を用意しておくと、A児はハイハイで進みながら滑り台を階段の方から上り、そのまま斜面へハイハイのまま下りて行った。保育者が、「Aちゃん、上手におりられたね～、すごいね！」と滑り台の下で迎えると、保育者を見て笑った。保育者が、A児の横で一緒にハイハイをして進むと、保育者を見て声を出して笑う。  【場面② お風呂 気持ちいいね】※環境設定⑤ 牛乳パックの囲いに入るB児をじっと見ていたA児。B児が囲いから出ると、自分から囲いに近づき中に入ろうとする。自分の上体を囲いの中へ傾け、腕で体を支えながらゆっくりと中に入ることができた。保育者が「Aちゃん、お風呂に入っているみたいだね。気持ちよさそう～」とA児の体をゴシゴシする真似をして触れると、保育者の顔を見て笑った。しばらく囲いの中にいたが、また腕を囲いの外につき、自分の体重を支えながら囲いからゆっくりと出る。その後も囲いへの出入りを何度も繰り返して遊ぶ。何度かしているうちに、囲いへの出入りがスムーズになっていった。 	・高さのあるところは、怖さもあり今までお尻から下りていたが、次第にハイハイで下りられるようになってきた。ハイハイのまま傾斜を下りていった姿から、体の使い方が上手になり、自分の体重を支える腕の力もついてきていることが分かる。 ・保育者がA児の「できた」という楽しい気持ちに寄り添い、一緒に喜ぶことで、A児に嬉しそうな笑顔が見られた。喜びを感じる経験が、またやってみようという意欲につながっていく。 ・B児が囲いに入出入りする様子を見て、囲いに興味をもったA児。B児が囲いを離れると自分から囲いに向かい、B児を真似るかのように上体を囲いの中に傾け、B児と同じ姿勢をとった。A児に「B児の真似をした」という意識はないものの、B児の姿があったことでA児の興味につながったものと思われる。 ・A児が囲いに入ろうと自分の上体を腕で支えている姿から、支持力がついてきていることが分かる。また、囲いに入るために、自分のやり方で、体の動きやバランスを調整している。 ・保育者に体を触れてもらうことに心地よさを感じたり、また囲いに入れたことを認めてもらったりすることで、保育者の見守りの中、安心して遊ぶことができた。 ・囲いへの出入りを繰り返すことで、自然に背筋力や腕の支持力、バランス力などが身に付いていく。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・保育者とスキンシップを図りながら、ゆったりとした雰囲気の中で安全に、また安心して遊べるようにする。 ・興味をもった場所でじっくりと遊ぶことができるように、遊具の数や場所を十分に用意したり、1人でゆったりと遊べる場を確保したりしていく。 ・滑り台などの傾斜角度は成長に合わせて変えたり、高さのあるところでは危険のないように保育者が常に目を十分行き届かせたりする。また、遊びの様子によって遊具の配置を変えながら、繰り返して遊べる環境を準備する。 ・一人一人の遊びにゆったりとかかわったり、子どもの嬉しそうな笑顔を見逃さずタイミングよく声をかけたりしながら楽しい気持ちに共感していく。 ・体の発達や個人差を理解し、それぞれの場所で一人一人が楽しめるようなかわり方を工夫する。	

事例27

「でこぼこ 楽しいね」

【経験させたい内容】

〔1歳3か月から2歳未満〕

歩く、走る、上る、下りる、ぶら下がるなど、全身運動を使った遊びを十分に楽しむ。

〔1歳児 I期（4月～8月）〕

ゆるやかな段差や斜面を上る、下りるなどの遊び（足腰を使った運動）を楽しむ。

【活動のねらい・内容】

- ◎安心できる環境の中で、保育者と一緒に様々な場所を歩くことを楽しむ。
- ◎様々な場所に興味をもち、自ら進んで足腰を使った動きを楽しむ。
- 素材の感触や様々な場所を歩くおもしろさを感じる。
- 様々な素材に興味を示し、素材の上を自由に歩いたり、傾斜が上がったり、段差を下りたりする遊びを繰り返し楽しむ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・体が少しずつ柔軟に動く時期なので、遊びの中で自然に足腰を使った動きを楽しく経験できる場所を設定する。
- ・抵抗のある不安定な場所を歩いたり、段差を上ったり下りたりすることで、足腰だけでなく全身運動にもつながる。
- ・エアパッキンは、安全性が高く、また心地よい感触やつぶれる音のおもしろさがある。

【環境設定】 <場所：保育室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

<準備物>

- ・段ボールに貼ったエアパッキン【大（直径3cm）、小（直径1cm）】
- ・ペットボトル（500ml 四角い形）に色紙を入れ、ロープでつなげる。
- ・ベッドマット（エアパッキンを貼る）
- ・滑り台（スロープ側にエアパッキンを貼る） ・巧技台



でこぼこ道を歩いてみよう！

① エアパッキン（大・小）



② ペットボトルの橋



- ◆足元が不安定になるので、十分に体を動かせる安全な空間や場所を確保する。
- ◆個人差を考慮して、手を支えたり、一緒に跳んだりして保育者が一緒に楽しむようにする。

- ・エアパッキン、ペットボトルの橋を数か所に用意し、歩く、走る、跳ぶなど、一人一人が興味をもった動きを楽しめる場所を準備する。
- ・子どもの様子に合わせていろいろな動き（歩く、はう、上る）を楽しめるように、移動や組み合わせが自由できるようにしておく。

大きくジャンプ！上ってみよう下りてみよう！

③ エアパッキン（大）を貼ったベッドマット



- ・ベッドマットにエアパッキンを張り付けることで、踏むと音が鳴るおもしろさから、力強く足を動かしたりジャンプをしたりして自然に足腰を使って遊べるようにする。
- ・滑り台にもエアパッキンを張り付けることで、でこぼこのおもしろさに興味をもち、自然に足腰を使ったハイハイ遊びへと促せるようにする。
- ・「歩く」だけでなく「跳ぶ」や「四つばい」の動きを楽しめる環境を準備することで、自然に腕や脚の力を使って遊べるようにする。
- ・保育者も一緒に遊びながら、足の動きに強弱をつけたりハイハイの姿勢を楽しんだりする。

④ エアパッキン（大）を貼ったゆるやかな傾斜の滑り台



【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① 歩いてみよう】※環境設定① ～大、小のエアパッキンの上を自由に歩く～ A 児：あちこちのエアパッキンを踏む。 時折「パチ」と音が鳴り笑顔が見られる。 B 児：初めはゆっくりと歩いていたが、しばらくすると場所を移動しながら力強く足踏みをする。「パチパチ」と音が鳴り笑顔で繰り返す C 児：盛んにエアパッキンを踏んでいたが、しばらくすると跳び始める。エアパッキン（大）の場所で「ジャンプ、ジャンプ」と声を出しながら跳ぶ。 保育者：「Cちゃん、ジャンプ上手だね。先生もジャンプジャンプ！」と言いながら、C児の横で同じように跳ぶ。エアパッキン（大）から「パンパンパン」と大きな音がする。 C 児：さらに跳びながら声をあげて笑う。 A 児：保育者とC児のもとにきて、3人一緒に跳ぶ。 その後、数名が保育者の近くに寄ってきて、それぞれに歩いたり跳んだりを繰り返す。 【場面② 上って下りてみよう】※環境設定④ ～エアパッキンを貼った滑り台の上り下り～ 保育者：「みんなでお山に登ろうね」と声をかけ、滑り台をハイハイで上っていく。 A 児：保育者の後に続き、笑顔を見せながら、四つばいでスムーズに上っていく。上まで上ると保育者に支えてもらいながらゆっくりと体の向きを変え、さらにゆっくりと階段を下りようとする。表情に笑顔はない。 B 児：A児の後ろを速いスピードで上がっていく。上でA児と並び、A児を追い越して階段を下りようとする。 保育者：B児に「ゆっくりね」と声をかけ、A児の後に下りられるようにB児を止める。 A 児：階段を下りると、素早く滑り台に戻り、また笑顔で上っていく。何度か繰り返すうちに、体の向きを変えたり階段を下りたりするペースが速くなる。	・エアパッキンは足裏に心地よい感触があり、歩いたり足踏みしたりする行為を楽しめる素材である。 ・「歩く」と「音が鳴る」、その単純な行為がおもしろく、時折鳴る音に反応して足を盛んに動かすという遊びへとつながった。 ・C児は、エアパッキン（大）の場所で跳ぶと大きな音が鳴ることに気づき、鳴らしたいという意思をもって繰り返し跳んでいる。跳ぶことで、自然に体の動きも大きくなっていった。 ・保育者が自分と同じ動作をしてくれたことが嬉しく、もっと跳びたいという気持ちが表れている。 ・周りの様子に興味を広げていく時期なので、保育者が楽しく遊んでいる様子を見せることで、保育者を真似てやってみようとする子が増える。 ・エアパッキンを貼った滑り台は、でこぼこがあることから上りやすく滑りにくいので、四つばいの姿勢でスムーズに上ることができる。 ・上る時には笑顔が見られていたが、下りることは難しく、保育者に手伝ってもらいながらゆっくりと慎重に体の向きを変えて下りようとしている。A児が階段を下りるのは初めてで、特に慎重になっているようだ。 ・B児は滑り台に慣れているようで、上り下りもスムーズだが、A児を無理に追い越すことが危ないことだとは分からない。自分の興味だけである。 ・保育者がB児の行動を止めたことで、A児は自分のペースで落ち着いて下りることができた。この安心感が、A児のまたやってみたいという意欲につながっている。興味をもって繰り返すうちに、体の使い方が上手になってくる。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・十分に歩き回れる安全な空間や場所を確保し、様々な素材や教材を取り入れ楽しんで遊べるようにする。 ・歩く、上る、下りるなどの経験が脚力につながるなど、遊びを通した体づくりを保育者が意識し、経験を積み重ねられるようにする。 ・信頼できる保育者と一緒に、子ども達が無理なく様々な動きを十分に楽しめるようにする。 ・足踏みからジャンプが始まったように、子ども達はおもしろいと感じるとどんどんと体の動きを大きく表現するようになる。ただ、危険を予知する力はなく、時に興奮するあまりに危険を伴うこともあるので、保育者がそばで声をかけた見守ったりしながら、安全面には十分気を付けていく。	

事例 28

「おもち粘土で遊ぼう」

からだの力

生活

運動

【経験させたい内容】

〔1 歳 3 か月から 2 歳未満〕

手や指の動きや力を調整し、積んだり、描いたり、投げたりすることを楽しむ。

〔1 歳児 II 期（9 月～3 月）〕

並べる、つまむ、めくる、ちぎる、破る、引っ張るなど、指先を使った遊びをする。

【活動のねらい・内容】

◎米粉粘土（おもち粘土）の柔らかい感触に慣れ、手指を十分に使って遊ぶことを楽しむ。

○米粉粘土の柔らかい感触を楽しみ、自分から喜んで触れようとする。

○つまむ、こねる、ちぎる、丸める、伸ばすなど手指を十分に動かして遊ぶ。

○力の入れ方を調整しながら、米粉粘土の形の変化を楽しむ。

○遊んだ後は、保育者に見守られながら、自分で手洗いしようとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・米粉粘土は可塑性が高く、形の変化を楽しむ中で、つまむ、丸める、伸ばすなど、指先を使った遊びが自然に経験できる。
- ・手のひらや手指に様々な刺激を感じたり、こねたり伸ばしたりする中で腕の力を使ったりすることは、手指操作や力を調整する機能が発達してくるこの時期の遊びとして適している。
- ・材料が米粉なので、口に入れても安心である。

【環境設定】＜場所：保育室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

おもち粘土で遊ぼう

＜準備物＞

- ・米粉粘土
こぼし大～こぼし 2 個分の大きさ×人数分
必要に応じて余分を準備。
- ・ブルーシート ・机（座位で遊べるもの）
- ・霧吹き

- ◆粘土の柔らかさは、この時期の子どもの力でも、握る、伸ばす、ちぎる、丸めるなど、様々な形に変化できる程度にする。
- ◆衛生上、冷蔵庫で保管するが、固くなってしまいうため遊ぶ前に常温に戻しておくようにする。

※小麦粉粘土でも楽しめるが、小麦アレルギーの子がいる場合は、米粉を使用するなどして、安心して感触遊びが楽しめるように配慮する。食べても大丈夫な素材ではあるが、誤飲などの安全面には十分に気を付ける。

低テーブルを囲んで

先生と一緒に

米粉粘土

こねて、つまんで、ちぎって、丸めて伸ばして、くっつけて・・・



- ・手指や腕の力を使って、こねる、つまむ、ちぎる、伸ばす、丸めるなどの動作が十分に経験できるように、一人一人に扱いやすい適当な量の米粉粘土を渡す。
- ・米粉粘土の感触や見立て遊びを楽しむ中で、より手指の操作や手のひらへの刺激などを促せるように、あえて容器類は出さず素材そのもので遊ぶようにする。

- ・低テーブルを用意し、座位の姿勢で落ち着いて取り組めるようにする。
- ・1 テーブル 4～5 人の子どもと保育者が一緒に座ることで、保育者や友達の真似ややりとりを楽しむ機会を増やし、その楽しさがより手指を使って遊ぶ姿へとつながっていくようにする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
1歳半を前後する頃から、積み木や箱を積み、ごちそうをお皿にのせる、洗濯ばさみを外す、マジックテープをはがす、新聞紙を破ったりちぎったりするなど、手指を使った様々な動きを楽しむ姿が見られるようになってきた。年末におもちつきを見たり経験したりしたことから、おもちに見立てた米粉粘土を用意してみた。	
保育者1人と4～5人の子が低テーブルを囲んで座っている。保育者が、こぶし大の大きさのおもち粘土(米粉粘土)を1人ずつに手渡ししていく。 【場面① おもち粘土 おもしろい】 A児は、粘土を手にとるとすぐに、指で押ししたり、手のひらで押し広げたり、握ったりする。最初は片手で触っていたが、次第に両手を使うようになり、さらに5本の指で“ぎゅつ”と握ってみる。粘土が指からはみ出すと、また握り直してこねる動作を繰り返す。 【場面② ペったんぺったん】 B児は、手のひらで粘土をたたき、「おもちみたい。ぺったんぺったん」と平らに伸ばしながら保育者の顔を見る。保育者も「ぺったんぺったん、おもちだね」と言いながら、自分の持っている粘土でB児と同じ動作をする。同じテーブルのC児が「Cちゃんもぺったんこする」とB児と保育者と同じように手を上下に動かし始めた。3人それぞれに「ぺったんぺったん」と声を出しながら自分の粘土を叩いたり伸ばしたりする。B児もC児も笑顔。 【場面③ 先生 ほら！】 D児は、親指、人差し指、中指を使って粘土の塊をつまみ、小さくちぎった粘土を並べていく。そばにいた保育者に「先生、みて」と声をかける。保育者「Dちゃん。すごいね。おもちがいっぱいだね」と笑顔で応える。D児はまた、数個ちぎって並べ「ほら！」と保育者に声をかける。保育者が「もっといっぱいになったね」と応える。D児は笑顔で繰り返す。足りなくなると「先生、もっとちょうだい」と要求し、もらった粘土も同じように並べる。 【場面④ コロコロして】 E児は、手のひらで伸ばした粘土に、さらに保育者からもらった粘土を重ねて「ケーキ」とつぶやく。そばで保育者が粘土を丸めているのを見て、同じように丸める動作をするが、うまく丸まらない。E児「先生、コロコロして」と保育者に言う。保育者「一緒にしてみようか」とE児に手を添えて一緒に丸める。E児は、丸まった粘土を自分のケーキに乗せてにつこりする。保育者と2個ほど一緒に丸めて乗せた後、今度は1人でちぎっては黙々と丸める。5つ乗せた後、保育者に「いちご。」と大きな声で言う	・粘土を握ったり広げたりなどして柔らかい感触を楽しむ中で、力を入れると粘土が指の間から出てくることに気づき、さらにそのおもしろさを繰り返すことで「にぎる」「こねる」などの手指や腕の力を使う経験ができた。 ・粘土をおもちに見立てたB児は、手のひらで粘土を叩いて平らにする。保育者が「ぺったんぺったん」とB児と同じ言葉や動作を繰り返したことで、その様子を楽しそうに感じたC児が真似をすることとなった。保育者や友達がしていることへの興味が、C児の叩いて平らに伸ばすという手指操作の経験へとつながった。 ・粘土の塊から適当な量をつまむという姿から、指の操作がスムーズにできていることが分かる。大好きな保育者に「すごいね」「いっぱいになったね」と認められることが嬉しく「もっといっぱい並べたい」「先生に見せたい」という思いが広がり、さらに「つまんで並べる」という手指の操作を経験することができた。 ・今までの経験から、手のひらで粘土を伸ばすことは容易にできる。 ・保育者が粘土を丸めていることに気づき、同じようにしたいという思いから、自分なりに保育者の真似をして手を動かしてみる。 ・保育者に手を添えてもらったことで、粘土を丸める動作のコツや感覚を覚えることができた。自分で丸められるようになるまで、その過程を確認するかのようになんて黙々と丸めている。5つ丸めた後に「いちご」と見立てた姿から、丸める操作ができるようになったことが分かる。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・保育者やそばにいる友達の真似をしてみたいという発達の時期を捉え、保育者は子どものそばで様々な手指の操作を促せる遊び方を見せたり、子ども自身が繰り返して遊んだりできるように、楽しい言葉がけややりとりを心がける。 ・米粉粘土は、遊んでいるうちに乾燥してしまいうため、様子を見て霧吹きで水分を補い、柔らかい感触が損なわれず、形の変化を十分に楽しみながら遊べるようにしていく。 ・片付けの際には、みんなの粘土を集めて「大きなおもちにしよう」などの楽しい終わり方を工夫したり、また遊んだ後の手洗いにも関心がもてたりできるように工夫をする。	

事例29

「カエルになって遊ぼう」

【経験させたい内容】

【おおむね2歳から3歳】

走る、跳ぶ、上る、止まるなど、全身を使った様々な体の動きを楽しむ。

〔2歳児 Ⅰ期（4月～8月）〕

保育者と一緒に、様々な遊具や用具（滑り台、フープ、ボールなど）で体を動かして遊ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎保育者と一緒に身近にある遊具や用具を使って遊ぶ。
- ◎体を動かして遊ぶ楽しさを十分に味わう。
- 保育者や周りの友達と一緒に、体を使った様々な遊びを楽しむ。
- 遊具での遊び方を知り、興味をもったことを繰り返しやってみようとする。
- 保育者と一緒に遊ぶ中で、遊具での安全な遊び方や使い方を知る。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・この時期、園庭などの身近な場所で「カエル」を見たりつかまえたりする機会が多く、子どもにとって親しみがもてる生き物である。
- ・子ども達にとって「カエル」の動きはイメージしやすく、しゃがんだり跳ねたりなどの動作を楽しめるとともに、巧技台などの遊具を使うことで体を使った運動が設定しやすい。

【環境設定】<場所：遊戯室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

カエルさんになって遊びに行こう！

<準備物>

- ・巧技台（三段階くらいに高さを変える）
- ・滑り台 ・マット ・カエル池のフープ
- ・タンバリン ・カエルのお面 ・カエルのリズム

- ◆歩く、走る、跳ぶなどの機能が整い始め、段差から跳び下りる、溝などをまたぐなど、様々な動作に挑戦しようとする時期なので、十分な安全確保と危険予測をしながら、子どもの動きから目を離さないようにする。
- ◆身近な大人の動きに興味をもつようになる時期なので、保育者自身が楽しく表現しながら模倣する遊びを積極的に取り入れていくようにする。

① まねっこあそび



カエルのイメージに合うリズムを用意してイメージを広げるとともに、保育者の真似をして「ピョンピョン」と両足跳びを楽しめるようにする。

② お池にざぶーん



滑り台を使うことで、池に入るイメージをより楽しく膨らませるとともに、体のバランスや体幹を養えるようにする。

③ 先生とおいかけて



広い場所で保育者においかけられたり、一緒に走ったりすることを十分に楽しめるようにする。

④ カエル池にジャンプ



- ・跳び下りる場所を意識できるようにフープを置く。
- ・タイミングに合わせて「お池にピョーん」などと言葉かけをして楽しめるようにする。

⑤ カエルにタッチ



- ・カエルの絵の描いたタンバリンを準備し、タッチする目標がわかりやすいようにする。
- ・下への意識がないので、跳び下りるところにものがないかなど、安全には十分に配慮する。
- ・一人一人の力や挑戦したい意欲によって、高さを変えるなどの配慮をする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
春の散歩でカエルの卵を見つけ、飼育ケースに入れておいた。卵からオタマジャクシが生まれ、カエルになった様子を見てきたことで、多くの子がカエルへの親しみをもっている。特にカエルの歌が大好きで、歌を聞くと自分から跳ぶ姿も見られる。保育者がカエルになって跳んで遊んでいると、多くの子が真似をして跳ぶ。そこで本時は「カエル」のイメージで様々な跳ぶ遊びを取り入れることにした。	
【場面① もう一回】※環境設定④ 保育者が「ゲロゲロ」と言いながらカエルの池に跳び下りる。保育者の後に続いてA児、B児がやってくる。A児が「いっせいのーで、ジャンプ！」と跳び下りると、続いてB児も「ジャンプ！やったあ」と跳び下りる。二人で顔を合わせ笑う。A児「もう一回しよう！」B児「もう一回しよう！」とA児の後について行く。その後、何度も何度も二人で繰り返し跳び下りる。 【場面② Cちゃんもやってみ】※環境設定④ 保育者がカエルの池にフープを置く。保育者「あ～！カエルのお家み～つけた！あそこに跳んでみよう！せーの（少し時間をかけて膝を曲げていく）、ジャンプ！（ジャンプと言ったタイミングで池の中のフープに跳び下りる）」保育者のそばにいたA児が「ぼくも！」と台からフープに跳び下りる。A児「やったあ、できた！」と大きな声をあげる。後ろにいたC児に気付く「Cちゃんもやってみ」と声をかけるものの、特に気にする様子はないまま、また台に上がり跳び下りることを繰り返す。C児は保育者やA児が跳ぶ姿をじっと見ているが、自分から跳ぶ様子は見られない。保育者がC児に向かって「Cちゃんも一緒に跳んでみる？」と尋ねると、A児がまた「Cちゃんもやってみ」と声をかける。C児がゆっくりと台に近づいてくる。保育者がC児の手を持つと自分から台にあがる。保育者が「Cちゃんカエルさん、お池にジャンプしてみる？」C児うなずく。保育者がC児の手を持って「ジャンプ」と声をかけると、声に合わせてC児が台から跳んだ。保育者が「やったあ、跳べたね」と声をかけると、A児も「やったあ、跳べた！」と喜ぶ。C児の顔が笑顔になる。	・保育者が楽しそうにカエルジャンプをする姿を見せたことが、A児とB児の興味のきっかけとなり、2人で楽しくジャンプする遊びへとつながった。この時期、大好きな保育者の真似をしたいという思いが強くなる時期であり、保育者が楽しく体を動かす姿がA児達を引きつけた。 ・一緒に遊ぶ友達がいることで、1人の時よりも楽しい気持ちが膨らみ、その楽しさがさらに体を動かして遊ぶ原動力となっている。 ・カエルの池にフープを置き目標となる場所をつけたことで、ただ跳び下りるだけでなく、目標物に向かって意識を集中させたり、跳べた時の喜びを感じたりすることができた。跳び下りることに慣れてきていたA児にとっても、また新たな刺激となった。 ・保育者やA児の姿に興味はあるものの、自分から台に上がることはなかったC児だが、保育者やA児が誘ってくれたことがきっかけになり、その場を動き出す姿へとつながった。 ・保育者に手を持ってもらったことがC児の安心につながり、さらに自分から台へ上がる姿へとつながっていった。 ・保育者がC児の気持ちに合わせたタイミングで「ジャンプ」と声をかけ、また安定した着地ができるように体重を支えたことで、落ち着いて跳ぶことができた。 ・保育者が「やったあ」と声をかけたことでA児からも思わず「やったあ」の声が聞かれた。保育者や友達に認めてもらえた嬉しさが、C児のジャンプ遊びへの大きな自信となった。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・この時期は、特に保育者や近くにいる友達が楽しそうに遊ぶ姿に興味をもち、自分も真似をしてみたいという思いが広がるため、保育者が遊び方や楽しみ方のモデルとなりながら、積極的に体を動かして楽しく遊ぶ姿を見せることが大切である。 ・一人一人の体の発達や今までの経験などを考慮し、できそうだと、やってみようと思える環境を用意することが必要である。また、少しの支えで「やってみよう」という気持ちに動くことも多いので、子どもの心の動きを丁寧に見とりながら、決して無理をせずタイミングを見ながら誘いかけるようにする。 ・カエルの池へのジャンプに慣れてきた姿を確認してフープを出すなど、子どもの様子や興味によって、臨機応変に遊びを再構成していくようにする。また、カエルという親しみのある生き物を題材にした様々な遊び（ごっこ遊びなど）を楽しむ中で、一人一人のカエルのイメージを広げ、より運動遊びに楽しく参加できるようにしていく。	

事例30

「ボールで遊び 楽しいな」

【経験させたい内容】

〔おおむね2歳から3歳〕

保育者と一緒に、身近な遊具や用具にかかわって遊ぶ。

〔2歳児 II期（9月～12月）〕

ボールを蹴る、投げる、転がす、受けるなどして遊ぶ。

【活動のねらい・内容】

- ◎保育者や友達と一緒にボールに触れて遊ぶことを楽しむ。
- ◎手足を使ったり自分なりに手足の動きを調整したりしながらボール遊びを楽しむ。
- ボールを転がしたり、蹴ったり、投げたりするなど、ボールを使って様々な動きを楽しむ。
- ボールが転がる方向や速さに合わせて体を動かす。
- 目的の場所に向かって、ボールを転がそう（投げよう、蹴ろう）とする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・様々な場所に転がったり跳ねたりするボールの動きに興味をもつ。
- ・遊びを通して手足を自分で調整していく体験ができる。
- ・ボールをおいかけて走ることを繰り返す中で、自然に運動量が増える。
- ・保育者や友達とのやりとりが楽しめる

【環境設定】 <場所：遊戯室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

ボールで遊ぼう

<準備物>

- ・軽いゴムボール（直径15cm程度のゴムボール）
- ・長縄
- ・サルのお口からボールを入れられるようにした段ボール箱

- ◆十分に体を動かして遊べるように、広い安全な場所を確保していく。
- ◆一人一人がボールに触れられるように十分な数を用意する。
- ◆保育者とのボールのやりとりを楽しめるように、保育者の位置を配慮する。

① ボールがいっぱい！



投げたり、転がしたり、蹴ったりする動きが十分に楽しめるように、人数分以上のボールを用意する。

② 先生と一緒に遊ぼう



保育者とボールをやりとりすることで、安心して相手にボールを返そうとすることができるようにする。また、長縄などを設置することで、転がすための目標にするなど、遊びに広がりをもたせ、保育者と一緒に、転がそう、投げようとする意欲がもてるようにする。

③ おサルさんのお口にパクリ！



- ・ボールを食べ物に見立てて、口へ入れられるようにすることで、自然に投げる位置や力を調整しようとする動きができるようにする。
- ・ボールを片付ける際にも無理なく楽しんで片付けられるように、口を開けたサルのお口を用意する。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
進級当初より、遊戯室や園庭で様々な大きさのボールを使って、投げる、転がす、蹴るなどの動きを楽しんできた。始めは1人でボールに触れて遊ぶ子がほとんどだったが、保育者や友達に向かってボールを投げたり返したりといったやりとりをする姿が多く見られるようになってきた。	
【場面① ボールで遊ぼう】※環境設定① 保育者：「いちにのさん、それ～」と箱の中からボールを出す。 A 児：青色のボールが転がるのを目で追い、ボールに向かって走っておいかけていく。ボールにおいつくと、手に取り抱きかかえ笑顔になる。その後、胸の前に持ったボールを両手で突き出し、50cmくらい前に投げ落とす。跳ねたボールを拾いに行き、また投げ落とすことを何度も繰り返す。表情は常に笑顔で、時折嬉しそうに声を出しながら繰り返す。 保育者：「わあ、Aちゃん、ボールを取るのが上手だね」 A 児：保育者を見てにこっと笑い、また投げ落とすことを続ける。転がったボールを拾いに行く途中で、保育者と友達が向かい合ってボールを転がし合っているのを見つけ、しばらくその場に止まって様子を見ている。無表情に自分の持っていたボールを保育者の方へ転がす。 保育者：「あらあら、Aちゃんのボールもきたよ。一緒にする？」とA児のボールを転がして返す。 A 児：保育者からのボールを受けると笑顔になり、「うん！」と返事して保育者の方へ向かってボールを転がす。 保育者：「うわあ、Aちゃんのボール、コロコロって転がったよ」 A 児：「ははは」と笑い笑顔で繰り返す。途中、保育者からのボールが自分の後方に行ってしまうが、すぐにボールを目で追い、急いで取りに行き、保育者に転がすことを繰り返す。 【場面② ボールを片付けよう】※環境設定③ 保育者：「なになに、ふんふん・・・そうかあ～、ねえねえ、みんな、おサルさんがお腹すいたんだって。ごちそうを食べたいよって！」とサルのそばに行き、会話をしている様子を見せる。 B 児：保育者の様子をじっと見ている。「はいどうぞ」と自分の持っている赤いボールをサルの口に入れる。 保育者：「Bちゃん、ありがとう。おサルさん、モグモグおいしいって」 B 児：にっこりと笑い「もっとあげる。はいどうぞ。あ！また食べた。おもしろい」と保育者を見る。 近くにいた他児も、どんどんとサルの口の中にボールを入れにくる。「おいしい？」とサルに声をかける子もいる。あっという間に遊戯室にある全てのボールがなくなる。	・箱から勢いよく出てきたたくさんのボールに関心をもち、自分から動くボールを取りに行った。ボールの位置やスピードに合わせて、自分なりに走る速度や動きを調整し、転がっているボールをつかまえることができた。 ・ボールをおいかける興味やおいかけつかまえる楽しさから、自分で転がしてつかまえるという行為を繰り返し楽しんでいる。体の発達から、投げるというよりは、前に落とすといった動作である。 ・途中、保育者が声をかけてくれたことが嬉しく、さらに繰り返す意欲につながった。楽しいと感じ何度も繰り返すことで、ボールをおいかけて投げたりする動きがスムーズになってきた。 ・保育者と友達が遊ぶ姿に気付き、しばらく見ていることで、2人で何をしているのかを理解し、自分も友達の真似をしてみた。 ・特に言葉はないままに、自分から保育者の方へボールを転がす。相手の同意や周りの様子は気にせず、興味をもったことをすぐに行動に移している。 ・保育者から「一緒にする？」と声をかけてもらったことで、安心して保育者のいる方向へ向かってボールを投げることもできた。 ・保育者とのボールのやりとり遊びを十分に楽しんでいる。 ・保育者のパフォーマンスに興味をもったことからボールをごちそうに見立てて口に入れる遊びが始まった。おサルスの看板を擬人化した遊びは、この時期の子どもにとって分かりやすく、また興味につながることから、「片付け」を指示しなくても、自然に全てのボールを片付けることができた。 ・ボールを食べ物に見立てサルの口に入れることで、無理なく片付けができ、大好きな遊びを無理なく終わることができた。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・柔らかく扱いやすいボールを使い、様々な動作をたくさん経験できる機会や環境を設定し、ボールの扱いを通して、自分の体を調整する力を促すようにする。 ・周りの様子や遊びに関心を広げていく時期なので、保育者とのやりとり遊びにも興味を広げることで、より楽しい遊び方が経験できるように、一人一人の遊びの様子を見ながら誘うようにする。 ・大好きな遊びや行為を何度も繰り返して遊ぶ時期なので、片付けについても、繰り返し楽しみたいという子どもの興味や意欲を大事にしながら、無理なく遊びを終われるような環境や保育者の言葉がけの工夫をする。	

事例31

「おいかけごっこをしよう」

【経験させたい内容】

〔3歳児〕

保育者と一緒に、戸外で体を動かすことを喜ぶ。

〔3歳児 II期（6月～8月）〕

保育者と一緒においかけごっこをしたり、気に入った遊具で遊んだりすることで、体を動かす。

【活動のねらい・内容】

- ◎保育者や友達と一緒に思いきり体を動かして遊ぶことを楽しむ。
- ◎おいかけごっこの楽しさを感じ、自分から参加しようとする。
- 保育者においかけられたり、おいかけたりすることを楽しむ。
- 様々な場所で、走る、隠れる、しゃがむ、寝転ぶ、跳ぶ、登るなどの体の動きを楽しむ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・おいかけたりおいかけられたりして遊ぶ中で、体を思いきり動かすことができる。
- ・つかまらないように方向を変えたり止まったりするなど、体を調整する力がつく。
- ・築山や砂場など、園庭の様々な場所を使うことで、自然に体の動きを調整したり、場所に応じた力を使ったりすることを促すことができる。
- ・段ボールの囲いを家に見立てた安全地帯をつくることで、体を休める休憩場所にする。また、休憩する場所があることで、周りや友達の様子を見ることができ、自分もやってみようという興味に広がる。

【環境設定】<場所：園庭> / 活動名： / 教材： ポイント： / 環境への配慮：◆

クマさんとおいかけごっこ

<準備物>

- ・ダンボールの囲い
(子ども用のお家と保育者用のお家)
- ・築山に階段やでこぼこをつくる
- ・砂場を掘り起こし穴(川)をつくる
- ・クマのお面(保育者用)

① 段ボールの囲い(家)



- ・子どもがしゃがんでも保育者(クマ役)の様子など、周囲が見える高さにする。
- ・家の数は、おいかけごっこの様子に合わせて調整する。

- ◆子ども達がイメージをもちやすいように、保育者がクマ役になりお面をかぶる。
- ◆平らな場所だけでなく、園庭にある築山や砂場など、様々な場所を使っておいかけごっこ遊びを楽しむ。

③ おいかけごっこ



- ・一人一人がそれぞれの力に応じて思いきり走ることを楽しめるよう、保育者のおいかけるスピードや子どもとの距離を調整する。
- ・保育者は、子ども達に経験させたい場(築山の階段など)を意識しておいかけるようにする。

② 砂場に掘った穴



子どもが安心して跳び超えられる幅や深さにしておく。

④ 築山の階段・斜面



子どもの様子を見て、登り降りできる段差の高さや幅に変える。



手足を使って四つばいになって登れるようにでこぼこをつくっておく。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
【場面① 逃げよう おいかけよう】 クマのお面をかぶった保育者がA児に近づき、「食べちゃうぞ」とおいかける。A児はクマにつかまらないように、時々後ろを振り返りながら走って逃げる。それを見ていたB児が、保育者をおいかけて「チクッ」と人差し指で保育者の背中を刺す。保育者が「痛いよ～、注射は嫌いだよ～」と言うと、それを見ていたC児も近づいてきて、今度はお腹ツンツンと刺す。それを見た2～3人の子も保育者に走り寄り、B児C児の真似をして刺す。保育者が「痛いよー」と走って逃げると、さらにたくさんの子が加わり、みんなで保育者の後ろをおいかけてくる。 【場面② 保育者を真似てみよう くま歩き】 ～砂場を走ろう、川を渡ろう、築山の階段～ 保育者が柔らかに掘り起こした砂場の上を通ると、子ども達も砂地に足をとられながらも足を高く上げて走る。 保育者が砂場に掘った穴を見て「わぁ、川がある、ジャンプして渡ろう」と言いながら跳ぶ。後ろからおいかけてきたA児は、一瞬立ち止まり穴（川）を見ていたが、1歩下がって勢いよくジャンプし、再び保育者をおいかける。保育者が築山につくった階段（高さ15センチ位、5段位）を上り「ここまでは登れないでしょう！」と言うと、B児が「登れるよ～」と言い笑いながら登ってくる。保育者が「わぁ～登れるの？すごいね！」と言うと、後ろにいたC児達数名の子も登ってくる。保育者が「大変だ～、つかまっちゃう！」と階段を下りると、B児が階段を見ながらゆっくり1段ずつ下りてくる。下りた後はまた保育者を「まて～」と言いながらおいかける。保育者が、築山のでこぼこで、「クマさんはこんなこともできるんだぞ」と、四つばいになり「くま歩き」で登って見せると、何人もの子が「僕もできる」と四つばいになりゆっくりと登る。 【場面③ ぼくもおいかけて！】 保育者が走っていると、ずっと園庭の端で様子を見ていたD児が近づいてきて「先生、僕もおいかけて」と小声で言う。保育者が「D君も食べちゃうかな。おいしそうだな～」と言いながらゆっくりめにおいかけると、D児は「わぁー」と言いながら笑顔で走って逃げていく。	・保育者がクマになりきり、A児を食べようとする仕草をして近づいてきたことで、保育者においかける嬉しさやおいかけてごっこのスリルを楽しんでいる。クマを意識して後ろを振り返り確かめながら逃げる姿から、体の動きをバランスよく調整できていることが分かる。 ・保育者が「注射」という子どもにとってイメージしやすい言葉を表現して逃げたことで、B児だけでなく多くの子に真似をしておいかけていたい思いが膨らみ、みんなで保育者をおいかけるという楽しい遊びに広がった。 ・掘り起こした砂場は、足場が柔らかに不安定になるため、園庭での走る動きや体の使い方とは異なった経験ができる。 ・保育者が、砂場に掘った穴を川に見立てて跳んだ姿を見て一瞬立ち止まったが、穴（川）の幅を見て勢いをつけて跳ぶことを思いついた。勢いをつけるために1歩下がるという方法を今までの経験から身に付けている。 ・保育者が、築山につくった階段を登って見せたり、刺激となる言葉をかけたりしたことで、B児の登ってみようという気持ちを引き出すことができた。 ・C児達も保育者に登れることを認めてほしくて、同じように登る姿が見られた。 ・保育者が階段を使って降りたことで、同じ階段を慎重に確認しながらも下りることができた。さらに保育者がクマ役になり、築山を手と足を使い、四つばいになり登って見せたことで、自分達も両手を地面につき、でこぼこの築山を登ることを楽しめた。このように、保育者の言動をきっかけにして、子ども達が様々な場所で様々な体の動きを経験することができた。 ・保育者と友達の楽しそうな姿をじつくりと見ているうちに“僕にもできそう”“僕もやってみたいな”と感じ、自分からおいかけてほしいと伝えることができた。保育者がD児のペースに合わせたおいかけ方をしたことで、楽しく参加することができた。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・この時期はまだ自分で自分を見てほしいという思いが強く、また体の動きについても個人差が大きい。保育者は、一人一人のペースや楽しみ方を大切にしたいことが重要である。 ・保育者自身が思いきり走ったり、四つばいになってくま歩きをしたりなど、遊びの中で様々な動きを楽しむことで、それを見た子ども達も真似をして体を使った楽しい動きができるようにしていく。 ・築山の階段や砂場の穴（川）を準備する際には、子どもの歩幅や跳躍力を考慮し、適当な階段の高さや跳べる幅にする。 ・家（安全地帯）にいれば大丈夫というルールがあることで、おいかけてごっこに安心して参加できるようにする。	

事例32

「〇〇になって遊ぼう」

【経験させたい内容】

〔3歳児〕

自分なりに体を動かす心地よさを味わう。

〔3歳児 Ⅲ期（9月～10月）〕

走る、跳ぶ、登るなどの様々な体の動きを楽しむ。

【活動のねらい・内容】

- ◎保育者や友達と一緒に、役のイメージに合わせた運動遊びを楽しむ。
- ◎役になりきって遊ぶ中で、体を思いきり動かして遊ぶ心地よさを味わう。
- 役になりきって遊ぶ中で、走る、跳ぶ、投げるなど、体を使った様々な遊びを楽しむ。
- 繰り返し跳んだり投げたりなど、簡単な目的に向かって自分なりに挑戦しようとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・3歳児の興味に合ったお話で、体を使って遊ぶことに適したキャラクターである。
- ・キャラクターになりきって遊ぶ中で、自分なりに新たな技や攻撃と称した様々な体の動きを考え経験することができる。
- ・保育者や友達と共通のイメージをもって遊ぶ中で、同じ役の保育者や友達の遊び方や動きに興味をもち、自分も真似をしてみようとする。

【環境設定】＜場所：遊戯室＞ / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

たこやきマントマンになって冒険だ！

＜準備物＞

- ・『たこやきマントマン ～にぎやかまのりぼうけんのまき～』
- ・お面 ・マント ・ポンポン
- ・玉入れの玉 など



② 天井からつるした“ボンゴホン”



- ・少しジャンプすれば剣が届く高さにする事で、跳ぶ動きが楽しめるようにする。
- ・色画用紙など、広告の剣で叩くとすぐに破れるような素材にする。
- ・遊びに合わせて、低い位置の“ボンゴホン”も準備しておく。

① たこやきマントマンのお面とマント
(赤・青・緑・黄・桃・虹色)



- ・マントは好きな色を使えるように余分をつくる。虹色は子どもの思いに寄り添い準備する。
- ・役の動き（投げる、蹴る、跳ぶなど）をイメージして楽しめるように、ヒーローと同じものを身に付け、なりきれるものを準備する。

③ 青のりふりかけ

緑タフテープポンポン



- ・剣はラップ芯を使い、握る、手首を上下左右に動かす、腕を上げ下げするなどの体の動きを促すようにする。
- ・腕の動きによって、自分の持っているものの揺れ方が分かるように、「ふりかけ」を長めのポンポンにする。
- ・危険な扱い方をする子には、遊ぶ中で適切な扱い方を知らせていく。

④ 玉入れの玉

とボンゴホン



- ・大きな口を開けることで、投げる目的となる場所がはっきりするようにする。また、口に透明の袋を付けておくことで、入ったことがはっきり見て分かるようにする。
- ・玉入れの玉を置く位置とボンゴホンの位置を離しておき、走ったり遠くから投げたりできるようにしておく。

⑤ ボンゴホンのお面
攻撃された時の表示



- ・ボンゴホン役の保育者が首にかけて順にめくっていく。
- ・ボンゴホンの動きを目で見て理解できるようにすることで、自分が次にすることを考えながら動けるようにする。

子どもの姿	読みとり
クラスで絵本「たこやきマントマン」を読むと、たこやきマントマンに興味をもち、新聞紙や色画用紙などでタコヤキをつくる姿や、たこやきマントマンになったつもりで遊ぶ姿が見られた。	
【場面① ボンゴホンをやっつけよう】※環境設定② ・A児は、保育者が“ボンゴホン”を吊り下げると「つまようじウイング切り」と言って、持っていた広告の剣を振りながらボンゴホンめがけて両足を揃えて跳ぶ。“ボンゴホン”が少し破れたことに気づき、何度も跳んで剣を振り当てる。 ・B児は、黄色のマントを身に付け、低い位置にある“ボンゴホン”を素手で叩いている。保育者が「しょうがぶっくんパンチ！」と片手で“ボンゴホン”を勢いよくパンチすると、B児は、保育者の言葉や動きの真似をして、耳の後ろ辺りから握りこぶしを素早く前に突き出し、勢いよくパンチを繰り返す。そばにいたC児は、腕を大きく回転させた後に勢いよくパンチをする。保育者は「BちゃんもCちゃんも強いパンチだね、かっこいいね、先生もしてみよう」などと、2人の動きの真似をする。B児とC児が顔を見合わせにっこりと笑った。 【場面② 毒入りタコヤキを食べさせよう】※環境設定④ ・紙でつくった“毒入りタコヤキ”を持ってきて“ボンゴホン”に投げるが、何度投げても入らない。保育者が玉入れの玉（タコヤキに見立てる）を出し、「このタコヤキならどうかな？」と言いながら“ボンゴホン”を的にして投げてみる。D児は「ぼくもする！」と保育者からタコヤキ（玉）をもらい、両足を踏ん張り、利き手（右）でタコヤキ（玉）をつかみ、“ボンゴホン”に向かって思いきり投げる。“ボンゴホン”の口に入るたびに「入ったー！」と声を出すC児。そばにいた周囲の子もC児の真似をして投げる。しばらくして保育者は、“ボンゴホン”の的から離れたところにタコヤキ（玉）の入ったカゴを移動する。C児は、少し距離をおき“ボンゴホン”の口をねらい投げる。数回に1回程度口に入る。入るたびに「やったー！」と大声をあげる。	・たこやきマントマンの敵である“ボンゴホン”をやっつけるというイメージをもち、少し高めに吊るされた“ボンゴホン”を的にして、何度も跳ぶことを繰り返す。ボンゴホンが破れ始めると“やっつけたい”という思いがさらに強くなり、より跳ぼうとしている。 ・B児は、お面とマントを身に付けたことで、自分からなりきった動きを楽しんでいる。保育者が絵本に出てくる動きや言葉の真似をしてパンチをしたことをきっかけに、保育者が見せた動きに、さらに自分なりに勢いをつけてパンチを繰り返す。 ・C児はもっと強いパンチをイメージして、回転させてから叩いてみた。保育者からそれぞれの動きを「かっこいいね！」と褒められ、嬉しい思いを共有している。 ・紙でつくったタコヤキ（ごっこ遊び用）は、固く丸められていないことや、投げる力が弱いことなどから当たらない。投げやすい玉（玉入れ用）を使うことで、手や足にも力が入り、投げる楽しさを感じられるようになった。また、口に入れるというゲーム性のある楽しみから、入った時に満足感も味わえる。 ・慣れてきたタイミングに合わせて玉を的から離れた場所に置いたことで、少しだけ難しくなったことにより興味をもって遊びを続けることができた。 ・少しだけ抵抗のある環境をつくったことで、しばらくの的から距離をおきながら集中してのりをねらったり、入った時の喜びを大きく表現したりする姿へとつながった。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・イメージに合わせたものや視覚的な教材を準備するとともに、子ども達にどんな動き方や遊び方を経験させたいかを考えて環境を準備していく。 ・子どものイメージや思いが実現できる様々な遊具や用具を準備するとともに、様々な体の動きが経験できるように、遊びの流れや様子を見ながら、タイミングよく声をかけたり環境を再構成したりする。 ・保育者も同じ役になって遊んだり、一人一人の興味や必要に合わせて相対する役になったりしながら、なりきり遊びの中で存分に体を動かすことを楽しめるようにする。 ・友達の動きの真似をしたり、自分で考えた動きを見せたりするなど、友達同士でかかわりをもって楽しめる環境を工夫する。 ・自分で使いたいものを選んで取り出したり簡単に片付けたりしやすいように、剣やマントなどは色別に入れられる箱を用意する。	

事例33

「カエル遊園地で遊ぼう！」

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。

〔4歳児 Ⅲ期（9月～10月）〕

遊具や用具の使い方に慣れ、いろいろな動きを試していく。

【活動のねらい・内容】

- ◎遊具を使った様々な動きに挑戦し、体を思いきり動かすことを楽しむ。
- ◎巧技台での遊びに繰り返し挑戦する中で、“できた”“おもしろかった”という満足感を味わう。
- 巧技台などを組んでつくった遊具を使って、握る、ぶら下がる、引っ張る、跳ぶ、くぐる、渡る、転がるといった動きを楽しむ。
- 周りの友達の様子を見ながら、興味のある動きを何度も繰り返し挑戦して楽しむ。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・この時期は、運動会を経験したこともあり、体を動かす活動に興味や意欲を感じている。
- ・“カエル遊園地”というイメージがあることで、巧技台や運動遊具などを使った遊びにも興味をもちやすい。
- ・巧技台は、子どもの興味や力量に合わせて高さの調整ができたり、環境をつくり変えたりしていくことができる。
- ・様々な動きができる環境を設定することで、遊びの中で自然に全身の運動機能を養うことができる。

【環境設定】<場所：遊戯室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

カエル遊園地で遊ぼう！

<準備物>

- ・鉄棒・滑り台・はしご（巧技台用）
- ・ロープ・マット・巧技台
- ・トンネル用の枠（マット掛け）
- ・バネス・草の囲い
- ・積木・平ゴム

- ◆カエルの王様から手紙が届くことで、子どものイメージやワクワク感が広がるようにする。
- ◆子どもの興味に合わせて、様々な動きができるように環境を準備しておく。
- ◆興味のある場所からスタートする。ただし進行方向は決めておく。
- ◆中央に休憩スペースをつくるなどして、自分のペースで活動に取り組めるようにする。
- ◆安全面については、保育者が常に意識して、各活動場所に気を配るようにしていく。

① ロープぶら下がり



- ・巧技台の鉄棒にロープをくくりつけて、ぶら下がる動きができるようにする。
- ・握りやすいように、三つ編みなどでロープを束ねておく。
- ・ぶら下がるのが楽しめるように、巧技台は高くしておく。

② マット転がり



転がることが楽しめるように、積木で高さをつくり、その上にマットを置くようにする。

③ 坂登り



- ・滑り台を逆から登れるように配置する。ロープをつかんで引っ張り、坂を登れるようにしておく。
- ・握りやすいように、三つ編みなどでロープを束ねておく。

④ くもの巣くぐり



- ・枠の中に平ゴムをくもの巣状につけて、その中を通れるようにする。
- ・平均台を2本おいて、バランスを取りながら通れるようにする。

草の囲い

休憩スペース

⑤ はしご渡り



- ・段差をつけた巧技台にはしごをつけて、その上を渡れるようにする。
- ・怖くないよう、段差は低めに設定しておく。
- ・最後にジャンプができるよう、バネスを置いておく。

子どもの姿	読みとり
園外保育でオタマジャクシを見つけ、カエルに成長していく様子を見ていた子ども達。クラスでは「ぎろんやまのカエル」など、様々な絵本を楽しみ、イメージをふくらませてきた。また、カエルごっこの広がりから、運動会では、カエルになってみんなで踊るなどして遊ぶことを楽しんでいた。	
【場面① やってみようかな？でも・・・】※環境設定③ A児が、自分から滑り台の“坂登り”の場所にやってきた。A児は、滑り台についているロープは使わずに、手すりの部分をつかんで斜面を登ることをくり返していた（毎回、ロープではなく手すりをつかんで登っている）。前にいたB児はロープをつかんで登っている。後ろから無言のままじっと見ていたA児。自分の番になると、今度はロープをつかんで登ろうとした。ロープの揺れに体が左右に大きく振れたが、なんとか上まで登れた。表情はあまり変わらない。その後は再び手すりを持って登っていた。しばらくその状況が続いた。  【場面② ロープで登れた！】※環境設定③ 前に並んでいたB児に続き、C児も「うんとこしょ、どっこいしょ」と大きな声を出しながら、ロープをつかんで斜面を登っていった。その様子を見ていたA児。B児、C児に続き、再びロープをつかみ、体を引き寄せながら斜面を登った。今度は体があまり振れずに登りきった。上まで登ると笑顔になり、もう一度並んでロープで登った。上まで登ると、小さな声で「できた！」とつぶやき、その後別の場所に移動していった。一周してまた“坂登り”の場所に来ると、今度もロープをつかんで登った。活動の終盤、保育者の言葉がけでみんなが集まる。A児も保育者に向かって「汗かいた」と額に手をあてながら笑顔で集まってきた。 	・A児は、日頃から体の使い方にぎこちなさが見られ運動遊び（特に巧技台など）については苦手意識があった。坂登りではロープよりも端の手すり部分を持った方が、体を支えたり踏ん張ったりするのに力を入れやすいようだ。 ・前にいたB児の姿の真似をしてロープを使って登ってはみたが、ロープを引っ張りながら登っていくことは、体のバランスが上手くとれず、左右に体が大きく振れることへの不安を感じたようで、また手すりを持って登ることにした。 ・B児に続きC児もロープを使い、「うんとこしょ、どっこいしょ」と楽しげにロープで登っている姿を見て、絵本の中にもある「カエルの山登り（ロープで登っている）」のイメージが浮かび、再びロープをつかんで登ってみようという挑戦につながった。 ・先ほどとは違い、自分の意志でロープを持ったことから、自然に手に力が入り、体を引き寄せるという動きになった。体を引き寄せたことで、体のバランスが安定し、不安なく登り切ることができた。 ・一度できたことをもう一度繰り返すことで、再びできた時に「できた！」「やっばりできた！」という満足感を自覚することができた。登りきった時の「できた！」のつぶやきや笑顔から、坂登りに対する自信が感じられる。 ・保育者に「汗かいた」と額を見せている姿から、楽しかった、頑張ったという満足した気持ちが感じられる。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・子ども達が楽しんでいるカエルごっこのイメージを取り入れた“カエル遊園地”を設定したことで、ただ巧技台で遊ぶ運動遊びとは違った楽しさや意欲が感じられた。このように、子どもが興味をもった遊びの中に、自然に体を動かすことが楽しくなる「イメージに応じた環境」をうまく取り入れていくことで、日頃は固定遊具などに苦手意識がある子どもにも、遊具を使って遊ぶ楽しさを感じられるようにすること大切である。 ・友達や保育者の姿に興味や憧れを感じて真似をしたい気持ちが高まってくる時期なので、できるだけ周りの様子が見られるような遊具の置き方を工夫したり、一人一人の力量に合わせながら、必要に応じて言葉がけをしたり、コツを知らせるために体を支えるなどの直接的な支援をしたりしながら、子ども達が「自分でできた」という気持ちにつながるように援助していく。 ・自分なりに繰り返し試したり確認したりしながら頑張っている場合は、安易に声をかけたり手伝ったりせずに、丁寧に見守りながら、できたタイミングを見て十分に認めるなどのかわり方を心がける。	

事例34

「おばけなんかにつかまらないぞ！」

【経験させたい内容】

〔4歳児〕

簡単なルールのもとで、体を動かす遊びを楽しむ。

〔4歳児 IV期（11月～12月）〕

友達と一緒に簡単なルールのある遊び（おにごっこやしっぽとりなど）を楽しみ、思いきり体を動かす。

【活動のねらい・内容】

◎簡単なルールのある遊びを友達と一緒に楽しむ中で、思いきり体を動かす心地よさを感じる。

○おにごっこ遊びのおもしろさを存分に味わう。

○体を動かすことで体が温まる経験をする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・ひっこしおにごっこのルールは単純で理解しやすい。またおいかけられることや走ることが苦手な子も、安全地帯があることで安心して参加ができるなど、クラスのみんなで楽しめる活動である。
- ・おにごっこは、つかまえたり逃げたりするなど、相手の動きに応じて走る速度や向きなどを臨機応変に変えることが必要であり、遊びを通して自分の体を調整する力を育てることができる。
- ・友達や保育者と一緒に逃げたり、おいかけたり、おにつかまった友達を助けたりするなど、友達との群れ遊びを経験する中で、思いきり体を動かすことができる。
- ・寒くなってくるこの時期に、おにごっこを通して思いきり体を動かすことで、体が温まる経験ができる。

【環境設定】 <場所：園庭> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

おばけごっこ（ひっこしおにごっこ）

<準備物>

- ・ラインカーで園庭に家の形やおばけやしきのラインを引いておく。
（家3～4か所、おばけやしき1か所）
- ・おばけのお面

<基本的な遊び方>

- ・おばけがおに役になりおいかける（つかまえる）。
- ・家の中に入っている時は、おばけ（おに）はつかまえることができない。
- ・家から家にひっこしをしている間に、おばけにつかまったらおばけやしき（牢屋）に入る。
- ・おばけにつかまった友達に、逃げている友達がタッチをすれば助けることができ、もう一度逃げるができる。



おばけやしき

おばけにタッチされたらおばけやしきに入る。

保育者も仲間になり、それぞれの楽しみ方に応じて、一緒に逃げたりおいかけたりしておにごっこ遊びの楽しさを感じられるようにする

家

家

家

家

おばけにつかまった友達を助けに行きやすいように、家とおばけやしきとの距離は短くする。

安心してひっこし遊びができるように、家と家の間の距離を短くする。

運動量を増やし、おいかけられるドキドキ感がもてるように移動距離を長くする。

- ◆おばけやしきとその他の家について、それぞれが見えやすい位置に配置する。
- ◆家と家との距離は、ひっこしするのにためらいがある子のため短く、また逃げきる楽しさを感じたい子のために長くなど、それぞれの楽しみ方ができるように両方を用意しておく。
- ◆おばけにつかまった子どもが、長い時間おばけやしきに入っていると「おもしろくない」と感じてしまうので、クラスの人数の3分の1程度の子どもがつかまったら遊びを区切るようにする。
- ◆水分補給ができるように、近くにお茶を用意したり、汗をかいた後に着替える時間をつくったりする。

【保育実践】

子どもの姿	読みとり
最初の頃は、おばけ（おに）につかまったら、おばけやしき（牢屋）に入るという簡単なルールのみで遊んでいた。次第に牢屋の中につかまったままの友達の姿を見て「ずっと牢屋に入っているしおもしろくない」と言う子や「おににつかまったらずっと牢屋やしおもしろくない」と言う子が出てきた。そこで、みんなの思いを聞く場をもち、保育者も加わりながら相談する中で“つかまっても、逃げている友達が牢屋に入っている友達を助けることができる”という新しいルールが加わった。	
【場面① やったー 逃げられたぞ！】 園庭に出ると、靴のマジックテープを2、3回しめ直すA児。早速、おばけごっこ（ひっこしおにごっこ）の場所に向かい、おばけ役の友達の動きを見ながら、家から家へ次々と移動する。 おばけ役のB児達数名がA児のいる家にやってくる。おばけのイメージで手を動かし、A児らに向けて「おばけ〜」「ペロペロベ〜」と笑顔で声をかけながら家の周りを回っている。隙を見てA児が別の家に走る。A児の姿に気づきB児がおいかけるが間に合わない。A児は別の家の中で「やったー！」と笑顔でジャンプをする。 【場面② 1回もつかまらんかった！】 おばけごっこが大好きなC児。遊び始めの時からいつも喜んで参加している仲間の1人である。 おばけ役の子の動きを目でキョロキョロと追いながら、隙を見ながら、家と家との直線距離が長いところを移動する。しばらくして、自分からおばけやしきの周辺を大回りする。おばけが出てくると、腕を大きく振って走り、つかまることなく別の家に移る。家に入った後「つかまえてみ〜」「こっちだよ〜」とおばけ役に声をかける。何度も何度も家をひっこしする。 保育者が「おばけさんたち〜、そろそろ夜だからお家に帰ろうね。また、朝になったらつかまえていこうね」と片付けを促す。C児は「いっぱい走ったし汗かいた〜」と額の汗を拭く。保育者のそばに来て「先生、ぼく1回もつかまらんかった！今度もつかまらんで〜」と大きな声で話す。近くにいた友達に「つかまったら？ぼく1回もつかまらんかった」と話をしながらクラスに戻っていった。 保育室に戻ると、自分から手洗いとうがいをした後、友達と一緒に小さなテーブルを囲み、「のど乾いてたんや。お茶おいしい」と自分の水筒のお茶を飲んだ。	・“思いきり走ろう”という意欲や“おばけにつかまらないぞ”という気持ちが、靴のマジックテープを何度かしめ直す姿に表れている。 ・おばけにつかまらないように、おばけ役の友達の様子をよく見て、おばけが近寄っていないタイミングを図りながら、すばやく移動している。つかまりたくないという気持ちから、周囲を注意深く見たり、相手の動きに合わせて体を調整したりする力が育っていることが分かる。 ・おいかけてきたB児（おばけ）につかまることなく逃げきれたことは、A児にとって大きな自信になり、もっと遊びたいという意欲につながった。 ・おばけにつかまらないように、おばけ役の友達の動きをよく見ながらタイミングを図って逃げている。また、今までの経験から、よりおにごっこにスリルを求めて楽しむために、わざと長い距離の移動を選んだり、自分からおばけを挑発しておいかけられようとしたりするなどの姿が見られた。遊びが楽しくなることは、子どもの運動量を増やし、さらに瞬発力や体を調整する力など、様々な運動能力の向上につながる。 ・保育者がおばけごっこのイメージを大事にした片付けへの促しをしたことで、遊びに区切りをつけてスムーズに片付けに向かうことができた。 ・C児の汗いっぱいの笑顔や言葉から、“おにごっこ楽しかった”という気持ちが伝わってくる。特に「1回もつかまらずに逃げること」がC児の今の楽しみ方であり、また「つかまらんかった」ことが大きな自信になり、次回の“おにごっこ”への意欲にもつながった。 ・友達と一緒に「楽しかった」「満足した」という思いを共有したことは、一緒に遊んだ仲間と共に、「手洗い、うがい、水分補給」をするという望ましい習慣にも影響をもたらしていると思われる。

必要な援助・環境の再構成などのポイント

- ・おにごっこのおにのイメージに合う「おばけ」を取り上げることで、ルールの共通化を図り参加しやすくする。
- ・保育者も一緒に仲間になって一人一人の楽しみ方に合わせたかかわり方をすることで、どの子どもが体を動かす楽しさを感じられるようにする。
- ・体を動かすことに対して苦手意識のある子、おばけ（おに）につかまることへの不安感がある子など、一人一人の姿に合わせて、家の数を増やしたり、家と家の距離が短い場所をつくったりする。
- ・遊びに慣れてきたら、家と家の間の距離を少しずつ長くしたり、家の位置を変えたりしながら、楽しみながら運動量が増える工夫をしていく。
- ・寒くなると室内に閉じこもりがちになるので、戸外で元気に遊びたくなる楽しい遊びを取り上げ、体を動かすことの気持ちよさや体が温くなる経験ができるようにする。

事例35

「宇宙探検に行こう！」

【経験させたい内容】

〔5歳児〕

様々な運動遊具を進んで使い、工夫して遊ぶ。

〔5歳児 Ⅱ期（6月～8月）〕

友達の刺激を受けたり、競い合ったりしながら、様々な運動遊びに取り組んでいく。

【活動のねらい・内容】

- ◎宇宙のイメージに合わせながら、運動遊具や巧技台を組み合わせて遊ぶ。
- ◎遊びに応じた体の使い方を知り、自分なりに取り組んだり挑戦したりして楽しむ。
- 様々な運動遊具を組み合わせたおもしろさを感じる。
- 自分なりのめあてをもち、繰り返し挑戦したり、できるようになった嬉しさや達成感を感じたりする。
- 友達の姿に刺激を受けながら、真似をしたり繰り返したりする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・宇宙やロケットへの興味が広がる時期であり、運動遊びに取り入れるイメージに適している。
- ・登り棒や鉄棒、巧技台などの運動遊具は、自分なりのめあてをもって繰り返し取り組める遊具である。また、友達の姿に刺激を受けながら挑戦する意欲が促せる遊びである。
- ・巧技台は、イメージに合わせて組み合わせ方を変えたり、自分達で挑戦するものをつくり出したりできる遊具である。

【環境設定】<場所：遊戯室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮：◆

宇宙探検しよう！

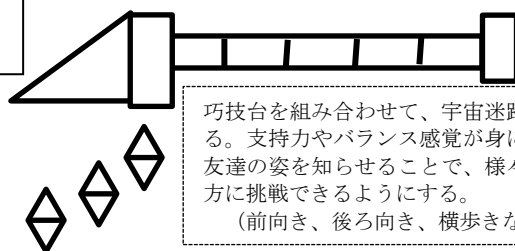
<準備物>

- ・マット ・足型
- ・箱（ボールが入る大きさ）
- ・鉄棒 ・ボール
- ・フラフープ ・平均台
- ・巧技台
- （滑り台、はしごなど）
- ・リトルコーン

① 月運び！ （ボール運び）



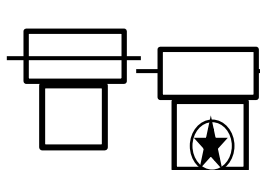
ボールや箱を準備し、足でボールを挟むことや腹筋を使ってボールを離すこと、離すタイミングを図ることなどができるようにする。



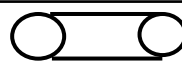
巧技台を組み合わせて、宇宙迷路をつくる。支持力やバランス感覚が身に付く。友達の姿を知らせることで、様々な渡り方に挑戦できるようにする。
（前向き、後ろ向き、横歩きなど）

③ 宇宙人の足

④ ぶらぶらジャンプ （鉄棒）



⑤ お星さま渡り



② 宇宙迷路！ （巧技台）



- ・ぶら下がりだけでなく、目標物（星や印の線）を準備することで、めあてをもって繰り返し挑戦できるようにする。遊びの中で体の使い方やコツを知らせる。
- ・自分のめあてに向けて高さや種類の違うものを選んで挑戦できるようにする。

頭の上の惑星（フープ）を落とさないように気を付けながら平均台渡りに挑戦できるようにする（注意力、支持力、バランス感覚などが養える）。途中、遊びの様子に合わせて障害となるリトルコーン（隕石）を準備し、さらに難しくしていく。

子どもの姿	読みとり
絵本やお話などから宇宙に興味を広げ、遊戯室で様々な運動遊具を使って「宇宙迷路をつくろう」「宇宙服を着よう！」と宇宙ごっこのイメージで宇宙探検の場をつくり始めた。大きな遊具や持ちにくいものは、友達と声やタイミングを合わせながら、一緒に巧技台の組み合わせを楽しんでいた。	
【場面① こうやってするんやで！】※環境設定① 鉄棒につかまり、足でボールを挟もうとするA児。鉄棒にぶら下がると同時にボールを挟もうとするが、ぶら下がった勢いで体が揺れ、上手くボールが挟めない。何度か足を動かしているうちに、足がボールに当たり、ボールが転がってしまう。鉄棒から手を離し「できん」とつぶやく。後ろにいたB児が隣の鉄棒を使って「こうやってするんやで」と、先にボールを足で挟んでから鉄棒にぶら下がることをして見せた。B児の様子をじっと見た後、にっこりするA児。B児は「こうやってやってみ」A児「うん」と真剣な表情になる。B児は、A児が鉄棒を持ちながら先に足でボールを挟もうとする動作に合わせて「ほら！先に挟んで……挟む！えいっ！」と声をかける。B児の声に合わせてA児がやってみると、今度は上手く足でボールが挟める。B児は「A君やったやん、挟めたな！」とA児に声をかける。A児もB児の方を向いて「うん！できた！」と笑顔になった。 【場面② 】 箱を1つ持ってきて、台の上に乗せるC児。鉄棒にぶら下がり、足で挟んだボールを箱の中に入れようと足を上げるが上手く入らない。それを見ていたD児が「私もやってみたい」と隣の鉄棒に箱を持ってきて入れ始める。何度か繰り返すうちC児のボールが箱に入った。C児「やった！！（月が）入った！！」と笑顔で箱の中を覗き込む。そばにいたA児とB児が「すごい！私もやりたい」と手を叩いて一緒に喜ぶ。その後もC児は何回も成功する。D児は、並んでいる間もC児の様子をじっと見たり、一緒に並んでいる時には「どうやると入るん？」と聞いたりしながら、自分の番を待って何度も繰り返し挑戦する。D児はお腹に力を入れて体を曲げ、足を高く上げようとしている。しばらくしてD児の月（ボール）も箱に入った。D児「すっご〜い！入った！」と驚いた表情を見せて箱を覗き込む。何度か繰り返した後、近くにあるゲームボックスを持ってきて、その上に箱を置く。C児、D児に数名の友達も加わり、C児「つき はこび〜」と言いながら、高い位置にある箱の中にボールを入れようとする。しかし、なかなか足が箱の位置までは上がらず、体を前後左右に動かしてみたり、思いきりお腹に力を入れたりしながら挑戦する。この日は最後までボールが箱に入ることはなかった。C児「あ〜！くやしいな。Dくん！明日は絶対に入れような」D児「うん！」と2人で顔を見合わせた。その後2人で一緒に鉄棒を持ち、片付けに向かった。	・月運び（環境設定①）の遊び方は分かっているものの、まずは足でボールを挟むことができない。ぶら下がることと足でボールを挟むこと、2つの動きを同時に行うことは、A児にとってはまだ難しい。 ・一緒に遊ぶB児が丁寧に遊び方のコツを伝えてくれたことで、できなかった2つの動きができるようになった。この時期になると、興味のあることについて、友達の動きの真似をしたり、真剣に教えてもらおうとしたりするようになり、できないことにも一生懸命挑戦しようする姿が見られる。また、友達の教えや励ましを素直に受け入れられたことが、A児の新たな動きができる大きな要因となった。 ・C児D児ともに足でボールを挟むことはできている。月運びをもっと楽しみたいという思いから、自分で箱を準備し、新たな挑戦を始めた。 ・同じ場所で同じように挑戦したり、できたことを一緒に喜んでくれる仲間があることで、何度も繰り返し頑張ろうとする意欲が持続される。 ・何度も繰り返す中で、箱の中にボールを入れるための体の動かし方や力の入れ方を、体験的に学んでいる。 ・少しだけ難しく、でもできそうだという適度な抵抗がある環境は、子どもの意欲をより引き出すことができる。子ども達は、その抵抗感を楽しみに変え、できないことができるようになる喜びを求めて何度も繰り返している。 ・意欲の持続には、目的を同じにする友達の存在が大きく友達との共感が、新たな挑戦への力を支えている。
必要な援助・環境の再構成などのポイント	
・新しい遊びや固定遊具への挑戦など、興味をもったことに自分なりのめあてをもって繰り返し取り組み、できるようになった嬉しさを感じ始める時期なので、少し難しい内容にすることで、さらに挑戦したり、頑張ったからできた満足感を感じたりできるようにする。また、自分のめあてに合わせて高さや距離を選択したり、つくり替えたりできる場やものを準備する。 ・友達の遊ぶ様子や挑戦する姿を見る機会を設け、刺激を受けたり、教え合ったりすることで、挑戦する気持ちや意欲をもって取り組めるようにする。 ・遊びにイメージを取り入れることで、運動遊具を使った環境づくりに様々なアイデアを取り入れられるようにする。	

事例36

「忍者ボール！」

【経験させたい内容】

〔5歳児〕

自分のめあてに向かって繰り返し挑戦したり、チーム
対抗の遊びを楽しんだりする。

〔5歳児 IV期（11月～12月）〕

チームで競い合ったり、ルールをつくったりしながら、
繰り返し体を動かすことを楽しむ。

【活動のねらい・内容】

- ◎同じチームの友達と力を合わせ、チームで競い合う楽しさを味わう。
- ◎ボールを投げたり受けたりして、ボール遊びの楽しさ十分に味わう。
- 友達のよさを認めたり、教え合ったりしながら、共通の目的に向かって一緒に遊びを進めていこうとする。
- チームの友達と協力しながら、勝つための方法を考えたり試したりする。
- 投げ方や受け方などを自分なりに考えながら、ボール遊びのおもしろさを感じ、繰り返し挑戦しようとする。

【活動を取り上げた理由（教育的価値の観点から）】

- ・仲間意識が高まる時期であり、特にチームで遊ぶドッジボールは、「勝ちたい」という共通の目的に向かって、チームの仲間と協力したり、相手チームとの競争意識が芽生えたりしやすい遊びである。
- ・チームで競い合うおもしろさを繰り返し楽しむ中で体を十分に動かすことができる。
- ・相手の動きを見ながら素早く逃げたり、ボールを受けたりするなど、自分の体を自在に調整して遊ぶ力が促せる。
- ・目的の場所（距離）に合わせてボールを投げる力をコントロールできる。

【環境設定】 <場所：遊戯室> / 活動名： / 教材： / ポイント： / 環境への配慮： ◆

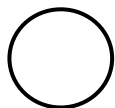
忍者ボール（ドッジボール）

遊びの流れ

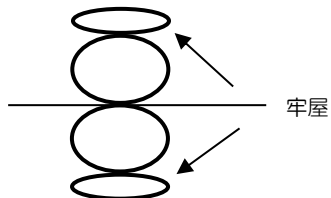
- ① ボールに当たったら牢屋（外野）に行き、最後まで残った人の勝ち。
- ② 2チームに分かれ、当たったら牢屋に行く。牢屋からしかボールは投げられない。
↓
牢屋に入ったままでは楽しくない意見から、牢屋から当てたら復活できる。
- ③ 狭さやボールを投げる力が付いてきたことをきっかけに、方形にする。
↓
慣れてきたら牢屋の位置を決めずに陣地のみ決める。

環境の変化

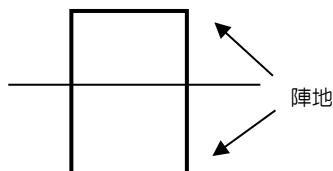
- ① 円形転がしドッジボール



- ② 転がしドッジボール → 投げるドッジボール



- ③ 方形ドッジボール



<準備物>

- ・ビニールテープ（赤、青、白）
- ・ソフトボール
（ドッジボール用は柔らかいが、小さくてつかみにくい。約20cmの大きさのものが適当）
- ・忍者ハチマキ

- ◆子ども達が親しみ、楽しんできた忍者ごっこのイメージを大切にして忍者ボールとする。
- ◆子どもの経験や投げる力に合わせてコートやルールを変化させていく。また、コートは、一人一人が力を発揮でき、運動量が確保できる広さにする。
- ◆子どもと一緒に遊びながら、子どもの気付きや声を取り上げ、ルールを変更していく。
- ◆自分がチームの一員であることが感じられる人数にする（1チーム5名程度）。
- ◆チーム意識をもって楽しめるように、色ハチマキを用意したり、様子を見て勝敗表などを準備したりする。
- ◆自分達がするばかりでなく、他のチームがしているのを「見る」機会を設け、友達の動きに刺激を感じられるようにする。



子どもの姿	読みとり
運動会以降、気の合う友達と小集団で遊んできた。学年で忍者ボール（転がしドッジボール）をしたことをきっかけに、毎日競い合いながら繰り返し取り組んできた。「今日も絶対勝ちたい！」と元気に参加するA児。A児は、ボールの動きをよく見て逃げたり、ボールを拾いに行ったり、また、積極的にボールを投げたりして、意欲的に取り組んでいる。本時も、クラスの目標（・ボールを見て逃げること ・牢屋の友達を助けるためにボールをパスすること ・ボールをキャッチしようと挑戦すること）の話し合いに積極的に参加していた。	
【場面① ボールを見るんやって！】※環境設定③ 遊戯室に行き、自分のチームの忍者ハチマキ（赤）を締め、すぐにチームの家（コート）に入るA児。それぞれの忍者チームで、ボール取りジャンケンをする子を決める。赤忍者チームの代表と青忍者チームの代表がジャンケンをし、ボールは青忍者チームが持つこととなった。A児は素早くボールを受ける姿勢をとり、青忍者チームにあるボールをじっと見ている。同じチームのB児は「キャー！キャー！」と声をあげながら笑顔で走り回る。その姿を見たA児は、B児に向かって「Bちゃん、ボールを見るんやで！Bちゃんボール見るんやってば」と大きな声で言う。B児にはA児の声が届かず、そのまま走り続ける。 【場面② すご〜い〇〇ちゃん！】 赤忍者チームの人数が、1人、また1人と減っていく。A児は、B児のそばに行き「トントン」と肩を叩きながら「ボール見て逃げた方がいいで」と言う。B児もA児に気付き、A児の顔を見てうなずいた。さらにチームの友達が当てられ、A児も牢屋（外野）に行くこととなった。赤忍者チームでB児が最後の1人になり、次第にボールを見ながら逃げるようになった。当たりはしないもののボールから逃げてばかりいるB児に「ボール取って！」と牢屋（外野）から赤忍者チームの仲間が声をかける。B児は無言のまま真剣な表情で走り続ける。時折ボールに手を伸ばす仕草を見せながら、当たらないように逃げ続ける。再び「Bちゃん、ボール取って」とA児が大きな声を出す。B児は無言のまま顔色、何度も何度も手を伸ばす。青忍者チームからスピードのゆるいボールがきたのを見て、思いきり手を伸ばすと、B児の手の中にボールが入った。少し驚いたような表情の後、手の中にあるボールを見て「わあ〜！！」と声をあげる。赤忍者チームの仲間が「すごーい、Bちゃん」と大喜びし「こっちに投げて〜」とB児に向かって手を振る。青忍者チームからも「もお〜、あとちょっとやったのに」という声とともに「お〜すごい！」という声が聞かれた。B児が牢屋（外野）に思いきりボールを投げると、同じチームのC児が受けて、相手に当てて家（コート）に戻ってきた。その後B児はボールに当たり、牢屋（外野）に行くと同時に「あー疲れた・・・」と、その場に座り込んだ。表情は笑顔。	・遊戯室に行き、迷わずハチマキをして家（コート）に入る姿から、クラスでの話し合いを理解し、自分達のチームを意識し頑張って勝とうという意欲をもっていることが分かる。 ・A児は忍者ボールに自信をもっているため、同じチームのB児に対して「ボールを見るんやで」と自分なりの方法をB児に伝えている。逃げているばかりでは勝てないことや、よく見ないとボールが取れないことを、これまでの経験の中で学んでいる。 ・A児は、B児に、声だけでなく“トントン”と肩を叩いてボールをしっかり見て逃げることを知らせた。同じチームとして頑張ろうという気持ちが伺われる。B児にも、ボールに手は出せないものの、A児の気持ちは伝わった。 ・自分が最後に残ったことで、B児にチームの1人として自分なりに何とかしなければという意識が生まれた。当てられれば自分のチームが負けてしまうというプレッシャーとチームの仲間の思いに応えたいという思いとで、ボールを受けてみようという気持ちになった。友達からの応援を受ける中で、ボールの方向やスピードをよく見て、何度も何度も手を伸ばし、自分でボールを受けようという積極的な気持ちへと変わっていった。 ・ボールをよく見るようになったことで、ゆるいボールがきたことに気付き、受けることができた。 ・仲間から「すご〜い」と認めてもらったことは、B児の大きな自信となり、自分のチームに思いきりの力でボールを投げる姿となった。 ・ようやくプレッシャーから解放され、思わず座り込んでしまったB児だが、自分なりのチームでの役割を果たしたことへの満足感と安堵感を全身に感じている。自分の力で受けられたことは、その後のB児の自信につながっていくものと思われる。
必要な援助・環境の再構成などのポイント ・安心して楽しめる転がしドッジボールから、本時の方形ドッジボールに変化させていく過程においては、子どもの興味や経験に合わせながら、無理なくルールづくりを進めていくようにする。 ・ボールを見ずに走り回る子や投げる力が弱くボールが届きにくい子などには、牢屋（外野）の場所を限定したり、横長のコートにしたりするなど、子ども達の力量に合わせて環境を配慮していく。 ・チームや仲間意識が高まる時期のため、チームで遊ぶ中で、ボールをよく見て逃げたり受けたりすることを友達同士で伝え合う姿を大切にする。	

【豊かなことば】

研究指定園Ⅰ

豊かなことばを育む環境・援助のキーワード

事例 3歳児 7月 ・ 11月

事例 4歳児 9月 ・ 11月

事例 5歳児 5月 ・ 11月

研究指定園Ⅱ

主体性を大切にした「豊かなことば（表出・表現）」を育成する自己評価

- ・ 学校（園）評価における自己評価表を活用するメリット
- ・ 自己評価の具体的な実践方法
- ・ 子どもの実態と自己評価作成までの流れ
- ・ 自己評価表（例）

《 主体性を大切にした「豊かなことば（表出・表現）」の育成 》

研究指定園Ⅰ

○豊かなことばを育む環境・援助のキーワード

豊かなことばを育む指導のあり方を探るために、研究指定園でごっこ遊びの実践を行いました。

「豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード」を3歳児、4歳児、5歳児の発達に合わせていますので、各園の実態に合わせて保育の参考にしてください。

3歳児	発達のキーワード（まねびの時期）		
	・安心できる保育者	・安心できる場	・リズムのある言葉
	・気に入った友達	・一緒のもの	・自分を出せる遊び
	豊かなことばを育む環境のキーワード		豊かなことばを育む援助のキーワード
	興味・関心	（継続して遊べる場） （生活経験をもとにした遊び）	幼児理解 （子どもの思いやイメージの受け止める）
	時間の保障	（継続して遊べる時間）	受容 （子どもの思いやイメージを認める言葉かけ）
4歳児	環境の選択	（スコープやおたまなどの道具）	温かい関わり （子どもの思いやイメージを認める優しい言葉かけ）
	発達段階に合う	（十分な物の数） （見立てやすい色、形、大きさ）	応答性 （リズムのある言葉・擬音擬態語） （友達との関わり方のモデル）
	空間的環境	（保育者の存在を感じられる場）	スキンシップ（子どもの動きを真似て遊ぶ）
	安心感	（同じ場にいる保育者や友達）	
	もの・人・友達	（自分の先生）	

4歳児	発達のキーワード（まなびの時期）		
	・仲間としての保育者	・自分達の間	・グループ、集団遊び
	・気の合う友達	・遊びに必要なもの	・夢中になる遊び
	豊かなことばを育む環境のキーワード		豊かなことばを育む援助のキーワード
	興味・関心	（経験が共有できる遊び） （子どもの興味のある題材）	幼児理解 （子どもの発想を遊びの中に取り入れる）
	時間の保障	（繰り返し遊ぶことができる）	受容 （作ったものを褒める） （自分の思いを伝える）
5歳児	環境の選択	（自分で選んで作れる場）	共感的理解 （子どものしていることを認め、遊びを広げる）
	挑戦できること	（作った物で繰り返し遊べる）	
	空間的環境	（場所の広さ、友達との距離）	
	もの・人・友達	（花火大会でのイメージの共有）	

5歳児	発達のキーワード（まなびあいの時期）		
	・必要に応じた保育者の支え	・遊びに必要な場作り	・仲間意識、集団意識
	・友達との連帯感、協力	・遊びに必要なものの作り	・遊び込む中で力を発揮
	豊かなことばを育む環境のキーワード		豊かなことばを育む援助のキーワード
	興味・関心	（友達とつながりあえる題材）	幼児理解 （子どもの葛藤を受け止める） （子どもの思いが言いやすい雰囲気作り）
	時間の保障	（継続して遊べる場所・時間） （友達と考えを出し合い・工夫できる場と時間）	受容 （子どもの思いやイメージを認める言葉かけ）
5歳児	環境の選択	（いくつかの遊び場）	応答性 （友達同士の言葉のやりとり）
	発達段階に合う	（本物らしく作れる用具）	
	もの・人・友達	（協力し合える友達との関係）	
	協同性	（友達と協力し合える用具）	

遊びの概要 A児が砂場で遊び出す。保育者「先生、砂場に道を作ろう」と言い遊び始めると、A児は保育者の近くに行き、保育者と一緒にスコップで砂の上をなぞり、道を作り始める。A児の作った道がつながると、A児「つながってる！」と言う。保育者も「Aちゃんの道がつながったね」と応じる。しばらく道作りをしていると、小さな砂山がいくつかできる。するとA児はこの砂山の上に立ち、「おっとっと」と言いながらケンケンで降りる。それを見ていた保育者は「つるつるお山？」と言い、保育者も「おっとっと」と言いながら砂山から降りて繰り返し一緒に遊ぶ。		
豊かなことば：「つながってる」「おっとっと」		
遊びの経過	考察	★環境 ☆援助
砂場であそぼう 道を作ろう<考察1> 滑って遊ぼう<考察2> 砂山ができ、何度も繰り返し滑って遊ぶ 	1. 砂場で保育者と一緒に道作りをして遊ぶ中で、自分の道がつながったことを保育者に共感してもらったことで、嬉しさを感じ、もっと一緒に遊びたいという気持ちをもつ。 2. 道作りでできた小さな砂山を坂道に見立てて「おっとっと」という擬態語で表す。保育者も「つるつるお山」という擬態語を使って共感する。一緒に坂道をケンケンして降りて遊ぶことが楽しく、「おっとっと」というリズム感がある言葉を繰り返し言いながら遊んだ。	★毎日継続して遊べる場や時間の保障 ★安心できる保育者の声や存在をすぐ近くに感じられるような保育者の位置や場の広さ ★使いたい物がすぐに使える場所にあること ★十分な道具の数、わかりやすい表示 ☆子どもの遊びのモデルとなる安心できる保育者の声かけ ☆子どもの想いを受け止め、共感する。 ☆リズムのある言葉や擬音語、擬態語を遊びに取り入れることで、遊びがより楽しくなる。
【豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード】		
【環境】 興味・関心(継続して遊べる場) 時間の保障(継続して遊べる時間) 環境の選択(スコップやおたまなどの道具) 発達段階に合う(十分な物の数) もの・人・保育者(自分の先生) 空間的環境(保育者の存在を感じられる場)		
【援助】 温かい関わり(子どもの思いやイメージを認める優しい言葉かけ) 応答性(リズムのある言葉・擬音擬態語) スキンシップ(子どもの動きを真似て遊ぶ)		
【教材性】		
砂・可塑性があり、見立てたり、繰り返し遊んだりすることができる。 ・見立て遊びをしたりイメージを膨らませて遊んだりしやすいことから、保育者に感じたことを言葉や態度で表現することができる。 ・さらさら、どろどろ、かちかちなどいろいろな感触を味わって遊ぶことができる。 擬音擬態語 ・同じ言葉を繰り返したり、リズムにのせて言ったりすることで、イメージしたり表現したりする楽しさを感じることができる。		

○事例【3歳児・11月】保育室

ポイント☞保育者のモデルが子ども同士をつなぐ

遊びの概要 B児は保育者と一緒にジュース屋さんになって遊ぶC児のお店に買い物に行く。保育者が「メロン味のジュースください」と言うと、C児は「はいどうぞ」と言い、ジュースを渡す。その様子を見ていたB児は、同じようにジュース屋さんで買い物をしようとする。初めは不安そうに小さい声で伝えていたが、ジュースが欲しいので、繰り返しC児に伝えた。するとジュースをもらえるようになり、徐々に大きな声でほしいものを伝え、繰り返しジュースを注文することを楽しむ。		
豊かなことば：「ぶどう味ともも味を1個ほしいです」 「バナナ、ぶどう味、もも味を全部ください」「スプーンもください」		
遊びの経過	考察	★環境 ☆援助
先生と一緒にジュース屋さんに行こう！ <考察1>  一人でジュース屋さんに行こう<考察2>  お買い物とっても楽しいね♪<考察2> 	1. 保育者がC児と丁寧にゆっくりと言葉のやりとりをすることが、B児へのモデルとなり、やってみようと思えるきっかけとなった。 2. 友達とのやりとりの楽しさや嬉しさを感じ、「バナナ、ぶどう味、もも味を全部ください」「スプーンもください」「何時に作ってくれますか」など大きな声で自分の思いを友達に伝えて、かかわって遊ぶことを楽しんだ。	★生活経験からイメージしやすく、見立てやすい素材の準備 ★友達とつながりをもって遊ぶことができる素材や道具の準備（買い物かご・ジュースなど） ★保育者や友達の動きが目に入りやすく、同じ場で過ごすことの楽しさを感じられる場や距離の設定 ☆友達との関わり方のモデルとなる保育者の言葉がけと見守り ☆保育者も一緒になりきって遊び、やってみたいと思える雰囲気づくり ☆子どもの考えたことやイメージしたことを、十分に受け止める保育者の存在
【豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード】		
【環境】 興味関心 （生活経験をもとにした遊び） 安心感 （同じ場にいる保育者や友達の存在） 発達段階に合う （食べ物に連想しやすい色や持ちやすい形、ペットボトルの大きさ、かご） もの・人・友達 （安心できる場）		
【援助】 受容 （子どもの思いやイメージの受け止め） 応答性 （友達との関わり方のモデル）		
【ごっこ遊びの教材性】		
・生活経験をもとにしたお店屋さんごっこは、子ども同士でイメージが共有しやすい。 ・友達とつながりをもって遊ぶことができるもの（買い物かごやジュース）があることで、同じ場にいる友達との言葉でのやりとりが生まれやすく、一緒に遊ぶ楽しさを感じることができる。 ・身近なものに見立てられる素材（大きさや形・色などの工夫）を使った遊びを楽しむ中で、自分なりにイメージして見立てたり、自分の思いを言葉で伝えたりすることができる。		

遊びの概要		
A児はペットボトル2本をセロテープでつなぎ端に星型の紙を貼る。そして自分の背丈よりも高い段ボールの囲いを叩く。すると「ドン」という音になり、A児「花火の音みたい」とつぶやく。近くで見ていた保育者「いいのが作れたね」と言うと、A児は段ボールを再び叩き、「花火の音がする」と言いながら何度も叩く。すると近くにいたB児「花火大会みたい、もう一回して」と言うと、A児は段ボールを何度も叩き、持っていたペットボトルの星を高くあげて走る。B児も同じように走る。その様子に友達が集まってくると、「4, 3, 2, 1, ドーン」とカウントダウンに合わせてポンポンを花火に見立てて上に投げたり拍手をしたりして遊ぶ。その後、この遊びがごっこ遊びのモグラを追い払う作戦となり、運動会のリズム遊びでもクラスみんなで楽しんだ。		
豊かなことば：「4, 3, 2, 1, ど〜ん」「4, 3, 2, 1, ど〜ん、ど〜ん」「どどどどど」「どどどどど〜ん」		
遊びの経過	考察	★環境 ☆援助
ペットボトルで段ボールを叩くと・・・＜考察1＞  花火の音みたい！ ドン 花火の音がする いいのが作れたね 友達が集まり花火大会みたい＜考察2＞  4, 3, 2, 1 ど〜ん どどどどど〜ん 上がった！上がった！花火が上がった！！ 拍手	1. 自分が考え思いついたことを保育者に認められることでイメージが広がり、遊びが花火の打ち上げにつながった。 2. 友達に共感してもらうことで、意欲的に遊ぶ姿が見られた。友達数人と花火を打ち上げる中で、花火の音、カウントダウン、打ち上がった後の拍手につながり、友達と一緒に楽しむことができた。	★子どもが扱いやすく、製作物がイメージとつながる材料用具の準備 ★友達が楽しんでいる場や様子が見える場、一人一人の考えや思いを友達に伝えていけるような場の環境設定 ☆子どもの発想から、遊びを広げたりつなげたりするかかわり ☆友達に思いを伝えながらイメージを共感する姿を受け止め、友達同士のつながりが楽しくなるように支える。 ☆子ども同士が遊びを作っている姿を共感し、友達に認められた自信や満足感を支えながら、言葉を引き出す。
【豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード】		
【環境】興味・関心 （経験が共有できる遊び） もの・人・友達（生活経験のある花火大会のイメージを共有） 【援助】幼児理解 （花火の遊びを受け入れる） 受容 （作ったものを認める）		
【ごっこ遊びの教材性】		
・ 子どもの発想を柔軟に受け止めることで、生活経験とごっこ遊びが結びつき、イメージを広げ、遊びを作り出すことができる。 ・ 「花火大会」という身近な生活経験のあることは、友達同士のイメージが共有されやすく、一緒に遊ぶことができる。 ・ 身近な素材（小型ペットボトル、星形の画用紙）を利用し、自分の作ったもので遊び出す中でイメージが膨らみ、保育者の受け止めがあることで友達同士が繋がって遊ぶことを楽しむ。		

遊びの概要 クラスの友達がお店屋さんごっこで遊んでいる中、B児とC児は“忍者”のお面を付け、新聞で作ったボールを天井に投げている。保育者「すごく飛んだね」「高く飛んだね」と言う。するとB児が新聞ボールを投げて「隕石が落ちてきた」と言ったことで、C児も新聞ボールを隕石に見立てて遊びたいという思いが膨らみ、2人は新聞をさらに包み、新聞ボールを大きくしている。そこにD児が持っていたもっと大きな新聞ボールを見て、さらに大きな新聞ボールの隕石を作りたいという気持ちになり、2人の新聞ボールを1つにして作り始める。そして出来上がるとB児とC児は、「これで僕たち、もっと強い忍者になれるね」と話す。		
豊かなことば：「僕はかっこいいんだ」「僕たち、もっと強い忍者になれるね！」		
遊びの経過	考察	★環境 ☆援助
僕は忍者だ！＜考察1＞  隕石が落ちてきたぞ！＜考察2＞  隕石を大きくしたい！＜考察3＞  僕たち、もっと強い忍者！＜考察4＞ 	1. 自分のしたいごっこ遊びを考えて遊び始めている。友達がいることで一緒に遊ぶことを楽しんでいる。そこに保育者の共感があることで、イメージが膨らんだ。 2. C児は「隕石」という言葉に関心を持ち、一緒にしたいという思いが繋がったのだろう。 3. もっと大きな新聞ボールを見て、自分達も大きくしたいという思いが膨らみ、2人で1つの隕石を作るようになった。 4. 一緒に作って、大きな新聞ボールができたことに満足感をもち、「僕たち」という表現を使って、喜びや仲間という気持ちを表現した。	★子どもが自分で作ることができる扱いやすい素材 ★考えたことを、繰り返し何度もやってみたり、なりきって動いたりできる広さや場所 ★遊びに必要なものを友達と一緒に作ることができる場や材料用具 ☆子どもの遊びを認め、一緒に楽しみながら、遊びの面白さや気持ちに共感する保育者の関わり ☆自分なりに繰り返し遊んだり、考えたことをやってみたりしながら十分に楽しむ中で、言葉を引き出したり、期待感を高めたりする保育者の言葉かけ ☆自分や友達が思いや考えを互いに話す姿を受け止め、一緒に遊ぶ様子を言葉にして伝えたり、めあてを實現できるように支えたりしていく保育者の存在
【豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード】		
【環境】 興味・関心（子どもの興味のある題材） 時間の保障（繰り返し遊ぶことができる） 挑戦できること（作った物で繰り返し遊べる）		空間的環境（場所の広さ・友達との距離） 環境の選択（自分で選んで作れる場） 人・もの・友達（一緒に遊ぶ友達）
【援助】 共感的理解（子どもの楽しんでいることを認め、遊びを広げる）		
【ごっこ遊びの教材性】		
・新聞のような素材は変化や工夫を加え、イメージを広げながら思いついたことを試したり見せ合ったりし、自由自在に扱うことができる。 ・イメージの実現に向けて、自分なりに素材を使って作ろうとしたり、作ったものを使って遊んだりする。 ・イメージしたものになりきった言葉や動きを使ってやりとりを楽しむことができる。 ・ごっこ遊びはみんなでするだけでなく、自分でしたいと思ったことを身近な環境で作り出せる。		

○事例【5歳児・5月】遊戯室 ポイント☞遊びに必要なもの（カラーボックス）を自由に使える環境
☞友達とつながりがもてる場

遊びの概要 海賊や海、島などのイメージでそれぞれのグループが遊んでいる。A児、B児、C児は海賊の仲間のねこになり、カラーボックスをつなげて家を作ったが、友達が10人遊びに来たことで家の中がいっぱいになる。友達が家に遊びに来てくれることは嬉しいが、自分達の家がいっぱいになってしまい、困った表情をしている。そこで保育者が「10人もいるの？どうする？」と聞くとA児「もっと大きい家を作りたい」と言う。それを聞いてB児、C児もうなずくと、3人でカラーボックスを取りに行き、家を大きくし始める。		
豊かなことば：「お家がちっちゃいから4人しか入れない」「修理してるから2人なら入っていいよ」「（お家が大きくなったら）10人来てもらいたい」「もっと大きいお家作りたい」		
遊びの経過 カラーボックスでねこの家を作る  家に友達10人と保育者が来る<考察1>  友達とカラーボックスを運び、家を大きくする<考察2> 	考察 1. 自分達が作った大事な場所という思いや、友達を家に招きたい気持ちを、「4人しか入れない」など数の大小を意識して伝えようとしている。 2. 自分達で作ったねこにゃんのお家に友達が来て場を崩してほしくない思いと、ねこにゃんのお家に何度もやってくる友達の存在が嬉しいという両方の思いを感じている。どうしたらいいかを考え、「もっと大きい家を作る」ことを思いつき一緒にカラーボックスを運び家を大きくする。	★環境 ☆援助 ★子どもが遊びに必要なものを考え、作ることができる道具や用具 ★共通のイメージを持ち、調節できる広さや数、協同で運べる大きさのもの ★各々の遊びの場を島というクラス共通のイメージでつなぐ。 ★他の遊びの場も見渡せる環境配置 ☆思いを出せる雰囲気づくりや保育者の言葉かけ ☆考えてやっていること、発見したことなどを認め、友達にも言葉で伝えていけるように支える。
【豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード】		
【環境】 興味・関心（友達とつながり合える題材） 環境の選択（いくつかの遊び場） 時間の保障（継続して遊べる環境・場所・時間） 協働性（友達と協力し合える用具） 空間的環境（広い遊戯室・友達とのつながりを持てる場作り）		
【援助】 幼児理解（子どもの葛藤を受け止める） （子どもの思いが言いやすい雰囲気作り）		
【ごっこ遊びの教材性】		
・クラスで共通のイメージ（島）があることで、友達同士つながり合えることができる。 ・カラーボックスや巧技台はイメージに合わせて自分達で組み替えたり、友達と一緒に積んだり、運んだりできる。 ・友達の遊びに興味を持てる環境配置から、友達の動きや言葉を感じ、自分の考えや発見を伝えることができる。		

遊びの概要 前日に年長児が招待状を持って、年中児を自分たちのお店屋さんへ誘う。話し合いの中で、まずチケット屋さんに行き、チケットを3枚もらってからそれぞれの店に買い物に行ってもらうことに決めていたため、当日はB児のチケット屋に年中児の行列ができる。するとどんどんチケットがなくなっていく。B児達は、急いでチケットを作ろうとするが追い付かず列が途切れぬ。焦るB児達に、隣のすし屋さんのC児が気づいてチケットを持って来た。		
豊かなことば：「早くしてって言わないで。私達今、大忙しなんだから」 「わ～ほんまにありがとう。ほんまにありがとう。ほんまにありがとう。よかった～!」 「これでいける。ぎりぎりいける!」		
遊びの経過	考察	★環境 ☆援助
はじめは順調だったチケット屋さん  急にチケット屋さんが大混雑!チケットが足りない!<考察1>  隣のすし屋さんから友達が気付いて、チケットを持って来てくれた!<考察2, 3> 	1. チケットを渡したいが、チケットがなくなってしまい焦っている。しかし、年長として役割を果たしたいという思いから、必死にチケットを作っている。 2. どのお店もチケットでやりとりできるというクラス共通チケットがあることで、隣のチケット屋さんが困っていることに気付いたのであろう。 3. 隣の店から助けに来た友達に感謝の気持ちを繰り返し言葉で表現する。友達の助けから、協力し合いながら目的を達成した喜びを感じている。	★本物らしく作りたい気持ちを大切に、実現できるような素材、材料、用具の準備 ★友達同士が役割分担をし、繰り返し継続して遊べる時間や場 ☆異年齢間の保育者の連携 ☆お客さんと呼ぶという目的に向かって友達の思いや考えを言葉で伝え合いながら準備を進める姿を支え、達成感や満足感につなげる。 ☆問題や困り感、思いのすれ違いが起きた時は相手の思いに気づけるよう支えとともに、考えを出し合い、協力したり自分達で解決しようとしたりする姿を認める。
【豊かなことばを育むための環境・援助のキーワード】		
【環境】 時間の保障 (友達と考えを出し合える時間・工夫できる場と時間) 発達段階に合う (本物らしく作れる用具) 空間的環境 (お店の様子が見合える距離感) もの・人・友達 (思いを言葉に出し合い協力し合える友達との関係) 協同性 (友達と一緒に目的に向かっていける遊び) 【援助】 受容 (子どもの思いやイメージを認める言葉がけ) 応答性 (友達同士の言葉のやりとり)		
【ごっこ遊びの教材性】		
・お店屋さんというクラスの共通の目的に向かって遊ぶ中で、一緒に進めていく楽しさや、やり遂げた満足感を味わうことができる。 ・自分の考えと相手の考えの違いに気づき、折り合いをつけて進めようとするすることができる。 ・異年齢児と交流することで、「思いやりを持って相手にわかりやすく説明する」など、関わり方を考え、年長児としての自覚、責任、誇りを持って接することができる。		

研究指定園Ⅱ

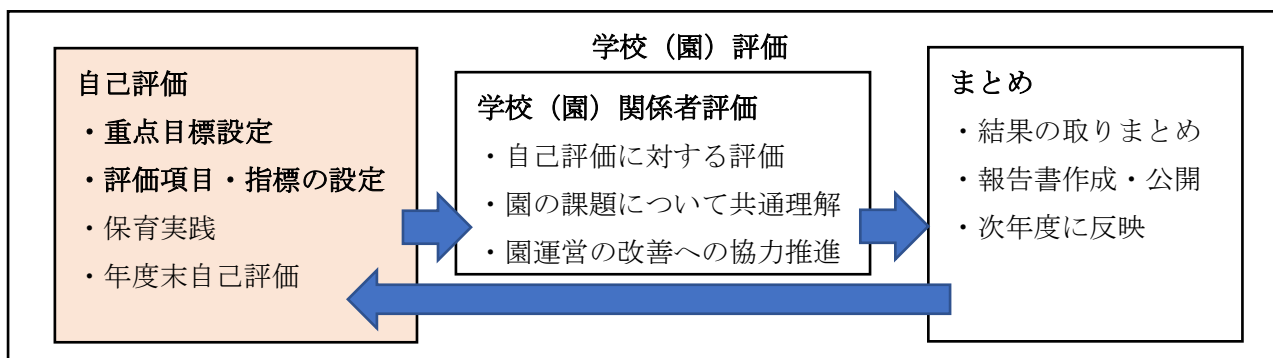
○主体性を大切にした「豊かなことば（表出・表現）」を育成する自己評価

主体性を大切にした豊かなことばを育成するための、学校（園）評価の自己評価表を研究指定園では実践し作成しました。学校（園）評価については、地域社会に開かれた教育・保育施設として教育・保育活動やその他の運営を充実させると同時に、教育・保育の質の向上につながることを求められています。この学校（園）評価の中の自己評価表の活用は、特に質の向上に大きく関わります。そのメリットや取組方法は下記を参考にしてください。

・学校（園）評価における自己評価表を活用するメリット

・保育者の子ども理解を深めることができる。
・保育の質の向上につながる。
・保育者同士が園目標や園の取組の共通理解が深まる。
・保育者が協力して取り組むことができる。
・自己評価をすることで、取組むべきことが明確になる。

・自己評価の具体的な実施方法



1、重点目標設定

- ・園の教育目標や重点として取り組むことを踏まえて、「重点的に取り組む目標」を設定する。
- ・前年度の学校評価の結果から、成果や改善策を反映させる。

2、評価項目設定

重点目標につながる評価項目を設定する。

（例）園の状況を踏まえた教育目標 保育者間の共通理解

園小接続の工夫

チーム保育など保育者間の協力的な指導 など

3、評価指標設定（取組指標、成果指標）

- ・評価項目につながる評価指標を設定する。
- ・重点的に取り組む目標の達成に向けた取組や成果を質の変化で捉える方法（例）や、多面的な取組や姿で評価指標を設定する方法などを選択する。
- ・取組指標の基準は、4を最高評価とし、3は頑張ったらできること、2は普通程度、1はできていてほしいことの基準を示す。成果指標は子どもの姿を示す。これによって基準が共通理解され、妥当性、信頼性を高める。

4、保育実践と年度末の自己評価

- ・取組結果の数値は、学期や年度末などに保育者が自分の取組を振り返り、基準に基づいて評価する。
- ・保育を実践し、園で設定した時期に自己評価を行う。自己評価の結果は、職員会議や園内研究等で振り返る。

・子どもの実態と自己評価作成までの流れ

研究指定園の子どもの実態は、「自分の思いを言葉で伝えにくいこと」、「感情をコントロールしにくいこと」、「コミュニケーションが苦手なこと」の3点があげられました。そこで、豊かなことばを育むことで、自分の気持ちやしたいことを言葉で相手に伝えたり、自分の気持ちをコントロールして接したり、保育者や友達とコミュニケーションを深めるためは何が大切かを明らかにするための研究が行われました。

豊かなことばの研究をする中で、豊かなことばを育むための環境援助が明らかになってきました。この研究成果を活かすために、そして保育者同士の共通意識を深めるために、自己評価表(重点目標設定、評価項目、指標設定)を作成しました。子ども理解や保育の質の向上だけでなく、保育者の実態や子どもの姿を考慮した「自己評価表(例)」ですので、各園の実態に合わせて参考にしてください。

・自己評価表(例)

重点目標：豊かなことばを育むための保育のあり方や環境・援助							
評価項目	基準	取組指標	取組結果	基準	成果指標	成果結果	総括評価
安心できる関係や場づくり	4	応答的に（認める、支える、提案する）かかわる。時には見守る。		4	困ったことやしてほしいことを保育者に自分から言葉で言う。		
	3	一人一人と向き合いながら、思いを丁寧に受け止め、最後まで話を聞く。		3	自分の思いや気持ちを言葉やしぐさで表す。		
	2	遊びに必要な物や材料が、自分で選択でき、使用できるように準備しておく。		2	自分からしたい遊びを見つけて遊ぶ。		
	1	保育者がゆったりと遊びに関わりながら、笑顔で遊ぶ。		1	喜んで登園する。		

重点目標：豊かなことばを育むための保育のあり方や環境・援助							
評価項目	基準	取組指標	取組結果	基準	成果指標	成果結果	総括評価
子どもの気持ちを理解する	4	遊びや記録から、子どもの思いをよみとり、環境を再構成する。		4	自分たちで遊びを作り出したり発展させたりする。		
	3	子どものイメージや目的が実現する場や物を用意し、時間を設ける。		3	試行錯誤して遊び込む。		
	2	子どもの表現（言葉や表情）を受け止め、言葉にして返していく。		2	好きな遊びに繰り返し取り組む。		
	1	子どもの表情、行動、しぐさなどに着目する。		1	好きな遊びを見つけて遊ぶ。		

重点目標：豊かなことばを育むための保育のあり方や環境・援助							
評価項目	基準	取組指標	取組結果	基準	成果指標	成果結果	総括評価
保育者や友達と共有の場づくりをし、伝え合う機会をもつ	4	伝えあえる場の配置や物の数、役割を分担して遊べる環境構成を工夫する。		4	困った時や、トラブルが起こった時に自分たちで考え、解決しようとする。		
	3	友達とイメージや考えを共有できるように、保育者が言葉でつなげる。		3	イメージを広げ、感じたことや考えたことを友達にわかるように話す。		
	2	子どもの興味関心に合わせて、保育者や友達とやりとりが生まれるような環境を用意する。(ままごと・ごっこ遊び)		2	遊びの中で、保育者や友達と言葉のやりとりを楽しむ。		
	1	子どものつぶやきや会話に着目する。		1	自分の思いや知っていることを保育者に言おうとする。		

重点目標：豊かなことばを育むための保育のあり方や環境・援助							
評価項目	基準	取組指標	取組指標	基準	成果指標	成果結果	成果指標
豊かなことばの感性を高める機会を作る	4	・子どもの表現（言葉・思い・考え・行動）に着目し、周囲に広げる。 ・体験したことをもとに、遊びや活動を展開する。(絵画、造形表現、〇〇遊び等)		4	相手に伝わるように様々な言葉（比喩、擬音、擬態語、助詞、形容詞、数量、文字等）を使いながら、話す。		
	3	・保育者が言葉を引き出すような揺さぶりの言葉をかけ、応答関係が豊かになる仕掛けをする。		3	経験し、感じたこと、考えたことを言葉にすることを喜ぶ。		
	2	・保育者が丁寧で正しい言葉遣いで話す。 ・言葉にふれる遊びの時間や教材を用意する。(歌、手あそび、わらべ歌、絵カード、かるた、言葉遊び)		2	保育者や友達の言葉や話に興味を持ち、聞いたり、真似て使おうとしたりする。		
	1	・子どもの興味や発達に応じた絵本、紙芝居を用意し、毎日読み聞かせる。		1	・絵本や紙芝居などを喜んで見る。		

参 考

【参考文献】

- 幼稚園教育要領 （平成29年3月・平成20年3月）
- 幼稚園教育要領解説 （平成30年2月・平成20年10月 文部科学省）
- 保育所保育指針 （平成29年3月・平成20年3月）
- 保育所保育指針解説書 （平成30年2月・平成20年5月 厚生労働省）
- 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 （平成29年3月・平成26年4月）
- 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 （平成30年3月）
- 幼保連携型認定こども園教育・保育要領を読む （平成26年5月 全国保育士会）
- 小学校学習指導要領 （平成29年3月・平成20年3月）
- 指導計画の作成と保育の展開 （平成25年9月 文部科学省）
- 「就学前教育カリキュラム」 （平成23年3月 東京都教育委員会）
- 台東区幼児教育共通カリキュラム「ちいさな芽」 （平成25年3月 台東区教育委員会）
- 協同して遊ぶことに関する指導の在り方 （平成22年3月 全国国立大学付属学校連盟）
- もの・ひと・自分に向き合いながら 自分と相手との関係性を創り出す子どもをめざして
（平成23年10月 滋賀大学教育学部附属幼稚園）
- 教育課程 （平成21年11月 奈良教育大学附属幼稚園）
- 「生きる力」を育む幼児のための柳沢運動プログラム＜基礎編＞ （オフィスエム）
- 0～5歳児の発達に合った楽しい！運動あそび （ナツメ社）
- 発達がわかれば子どもが見える （ぎょうせい）
- 保育に役立つ！子どもの発達がわかる本 （ナツメ社）
- 0歳～5歳児の発達と保育と環境がわかる本 （ひかりのくに）
- 0歳～6歳子どもの発達と保育の本 （学研教育出版）

【掲載した事例等の協力校園】

南郷里幼稚園
神照幼稚園
北郷里幼稚園
さくらんぼ保育園
北郷里小学校

【長浜市就学前教育カリキュラム改訂版】

○監修：びわこ学院大学教育福祉学部こども学科教授

中井 清津子 先生

○カリキュラム改訂委員

(※ 以下敬称略)

健康に生活する	赤尾 千晶 清水 裕梨	田邊 恵 西村 祐美子	西川 愛純
進んで体を動かす	丸岡 京子 佐野 知佳子	名古屋 香菜 鬼頭 孝子	中川 美樹
自ら学ぼうとする	高橋 智美 飯田 陽子	竹内 麻里子 伊藤 さゆり	奥村 英梨子
仲間と共に育ちあう	山崎 有美 堤 由樹	田中 実果 村田 里美	永井 蒼 岡田 卓也
感じる心を表現する	磯部 由美 小倉 絵美	長谷 朋美 大橋 瑠美	高木 真紀
伝え合う（聞く力・話す力を育む）	三上 紀子 吉田 優奈	脇坂 蘭 近藤 真智子	谷口 真梨子

本カリキュラムのデータは、長浜市ホームページに掲載しています。
本カリキュラムの PDF データ他、第 3 章の全実践指導事例も掲載していますので、ぜひご活用ください。

【QR コード】



長浜市ホームページ

長浜市就学前教育カリキュラム【改訂版】

令和 6 年 7 月 発行

編集・発行 長浜市教育委員会事務局幼児課

〒526-8501 長浜市八幡東町 632 番地

T E L : 0749-65-8607

F A X : 0749-65-6540

